

BUILD NEW WORLD ・ ビルドが斬る！

ビーザワン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて…地球を滅ぼうとした星狩りの民と…

愛と平和を掲げその脅威と戦う仮面の戦士がいた

これから語られる物語は正義と悪…光と闇…

決して交わることはない相反する2つの存在が

世界の次元を超え再び激突する…そんなお話である

目次

セントの日記〜天才物理学者の日常〜	1
仮面ライダーオーズ・欲望のメダル	11
仮面ライダー鎧武・果実と鎧武者	18
セントとアカメ〜ベストマッチな2人	27
第1部・遭遇編	
プロローグ	46
第1話・その名は“ビルド”	55
第2話・動き出すナイトレイド	106
第3話・交差する正義	152
第4話・暴かれる本性	182
第5話・新たな一歩	215
ビル斬る劇場#1・懐かしの味	245
ビル斬る劇場#2・くしゃつとする笑	254
顔	
第6話・偽りのジャスティス	269
第7話・正義のボーダーライン	308
第8話・帝国のリベリオン	347

セントの日記〜天才物理学者の日常〜

《午前6：00》

セ「……もう少しで新武器が完成するところからが天才物理学者の本領発揮だぜ
！」

タ「セント……朝からテンションが高いな」

セ「へえっ……つてもう朝かよおい！」

タ「気づいてなかったのかよ……ほらっ今日は兄貴との朝練あるんだから早く行くぞ」

セ「まつ待ってくれ!!もう少しで完成するんだだからあとちよつと!!」

タ「駄目だっほら行くぞ……兄貴はもう訓練場にいるんだから」

“ガシッ……グググッ……”

セ「NOooo——ッ!!」

《午前6：30》

セ「……眠いっ」

ブ「セントどうしたっ目の下に凄い隈ができてるぞ」

タ「多分徹夜で作業してたから寝てないんだよ」

ブ「それは良くないなセントツ睡眠不足は判断力を下がらせる…日々健康な生活習慣を心掛けないと戦士として強くなれないぞ」

セ「そうだね…やることやったら日中に寝るよ」

ブ「……もしお前がよければ俺のベッドと一緒に寝てやるぞ／／／／」

セ「謹んでご遠慮させていただきます！」

タ「(セントもセントだけど…兄貴も兄貴でヤベエーツ)」

《午前7:30》

ア「朝食の手伝いを頼んですまないなセント」

セ「良いってことさ…つか何かしてないと眠くて仕方ないんだ」

ア「そうか…ならセントの目が覚めるような朝食を作るとしようっ」

セ「本日は何を作るんだ？」

ア「からあげ丼だ!!」

セ「……朝から胃もたれしそうだよ(泣)」

《午前8：00》

“ シャシャシャツツ：シャシャシャツツ ”

ア「……うんっ美味かつた」

タ「相変わらずよく食うなアカメは」

セ「……ていうかマインとシエーレの分まで食べたよねっ」

タ「あの2人は朝弱いからな……だから2人の分はいつもアカメが食べちやうんだ」

セ「それでいいのかよ!」

ア「食べ物粗末にはできないっ」

セ「……俺の作った冷蔵庫使えばいいだろ（泣）」

《午前9：00》

チエ「ただいまあゝ……」

セ「あつおかえりチエルシー」

ア「帝都で情報収集していたのか?」

チエ「そつ……もう夜通しで動いてたから眠いよおゝ」

セ「俺も徹夜で作業してから今すげえ眠い」

チエ「あれだったら一緒に寝る?」

セ「はえっ……えっええっと……」

ア「……………」

セ「(アカメ目が怖ええよ!)」

タ「(ご)愁傷様セント…骨は拾ってやるぞ)」

《午前9:30》

セ「アカメ…あれはチエルシーの冗談交じりの発言だから気にしない方がいいよ」

ア「わかっている…気にしてはいないぞ」

セ「だったらなんでさつきから腕にくっついてるの?」

ア「…………ツ／／／」

セ「あのねアカメ…この状態だと歩きづらいし…何より色々あたってると言いますか

／／／」

ア「ツ……セントはスケベだ／／／」

セ「それはないだろおおく(泣)」

《午前12:00》

ア「昼飯はコウガマグロのマグロ漬け丼だ!!」

セ「につ二連続で丼物だとお……」

レ「いやあくお腹空いてたからこりや嬉しいねえ♪」

“パクツ”

ナ「うんっ……良い味付けだぞアカメ」

ア「ありがとうボスツ」

セ「……ナイトレイドには肉食女子しかいないのか（泣）」

タ「（セント……俺も最初の頃同じことを思っていたぞ）」

《午後2：00》

セ「あああく胃が気持ち悪い……ハツカ味の飴で口の中をリセットするか」

ナ「セントはいつも飴を舐めているな……煙草は吸おうとは思わないのか？」

セ「へえっ……うううくん言われてみれば吸おうと思ったことはなかったね」

ナ「どうだっこれを機会にデビューしてみないか？」

ア「ボスツセントに無理強いをするな」

マ「そうよっただでさえ煙いんだから……むしろボスの方が煙草を飴に変えた方がいい

んじゃない？」

ナ「………いいじゃないか少しくらい」

セ「ボス…なんかごめん」

《午後4:00》

シエ「……………(ボケエ〜)」

セ「スーさん…シエーレは何をしてるの？」

ス「わからん…さつきからずっとあの状態なんだ」

セ「へええ〜…シエーレさつきからそこで何を考えてるの？」

シエ「実は私にもよくわからなくて…私は昼食後に何をしようとしていたんでしょう？」

セ「いや俺が知るわけないでしょっ」

《午後6:00》

ラ「セントツお前には男としての欲が足りてない!!」

セ「なんだよ急に…」

ラ「男なら欲望に忠実になれっ欲望を開放してこそ生の喜びを感じられるっでもんだぜ！」

セ「ちなみにラバはこれから何をしようとしてるの？」

ラ「無論つナジエンダさんが風呂に入る姿を覗きに行くに決まっている！」

セ「そうか……ラバよ」

ラ「ああ？」

セ「……歯食いしばれ」

「ゴリラ」

セ「ふううんっ」

“バゴオオオーンッ”

ラ「へぶしいいっ!!」

《午後6：20》

ナ「んっ……どうしたラバックその腫れた顔は？」

ラ「はっはははっ……ちよつと色々ありましてえ」

ナ「???’」

セ「少しやりすぎたかなあ……」

ア「いやっセントは正しいことをした……ラバックにはあれくらいが丁度良い」

マ「バレるってわかっててもやるからねえ」

チエ「ある意味凄い根性だよ」

セ「常習犯すぎるだろっ」

《午後7：00》

セ「アカメツ今日の夕食：焼肉カルビ丼にするのはやめよう」

ア「何故だっ!!」

セ「胃がもたんつもう少しサツパリした物を食べないと体がおかしくなる」

ア「……セントがそう言うなら（しゅん）」

セ「（そっそんな顔しないでっ……良心が傷つく!）」

タ「（セントよく言ってくれたっお前は男だ!）」

《午後9：00》

セ「今日は風呂入ってさっさと寝よう」

チェ「あつセントくん今からお風呂?」

セ「そうだよっ」

チェ「そっかあ……あれだったら一緒にお風呂入る?」

セ「だっだからそういうことを軽々しく言うもんじゃ!」

ア「……………」

セ「(だから目が怖いってアカメさあゝゝん(泣))」

タ「(セントは苦勞するなあ…)」

ラ「(ぐがあああゝゝつ!!なんでセントばかりいい!!)」

《午前0:00》

セ「さて寝るとしますかあ……あそうだつ新武器もう少して完成するところだったの忘れてた!これだけ作り終えないと他の作業は入れないからなあ……さっさと完成させちやうか♪」

“ガシツ”

セ「へえっ?」

ア「セント…睡眠はしっかりとらないと駄目だ!」

セ「なっなんでアカメがここに!!」

ア「ブライトに言われてお前の様子を見に来た…セントツすぐに寝るぞ」

セ「ちよつちよつとだけ待ってよ!あと少して完成するんだから!!」

ア「駄目だ…私も一緒に寝るからベッドに行くぞ!!」

セ「ちよつ一緒にってなに!?!それは色々問題があると思うんですけど!!」

“ガシツ…グググツ…”

ア「さあセント…共に夢の世界に行こう」
セ「N O o o o — ツ !!」

“ 終わっておけ ”

仮面ライダーオーズ・欲望のメダル

《とある次元の狭間》

セ「仮面ライダールーレット”ねえ…”

ア「色んなライダーの名前が書かれているな」

セ「天才物理学者として…ビルドの発展のために他のライダーのことを知っておく必要はあるよな」

ア「そうなのか？」

セ「そうなの…んじやいつちよ行ってみますか!!あポチツとな♪」

“ピピピピピピ…ピピッ”

「仮面ライダーオーズ」

セ「決定っ仮面ライダーオーズだ！」

ア「仮面ライダーオーズ…どんなライダーなんだ？」

？「この本によれば…仮面ライダーオーズは2010年に生まれっ欲望が形となった

怪物“グリード”と戦ったと記されている」

セ「へえくなるほどおく……てっ貴方誰ですか!？」

ウ「おっと紹介が遅れたね。私の名は“ウオズ” 歴史の傍観者といったところさ」

ア「歴史の傍観者？」

セ「要は道先案内人みたいな存在ってところ？」

ウ「そう受け取ってもらって構わないよ。まあ実際のところ……私はとある使命を終えたところでねっ時間を持って余していたところだったのさ」

セ「つまりは暇人ってことね」

ウ「っ……うんつまあそうとも言っうね」

セ「まあいいやつんじやウオズ……早速オーズの世界に連れてってよ」

ウ「引き受けたっそれではこれを使いオーズがいる時代に行くとしよう」

「タアーイムツマジーン！」

ウ「“タイムマシン” という名のタイムマシンだ」

ア「……名前そのまんまだな」

セ「タイムマシンをこの目で見れる日が来るなんて……最っ高じやねえか!!」

ー2010年ー

セ「ここがオーズのいる世界…もとい時代か」

ア「セントなんだこの風景はつ城のような巨大な建物がたくさん建っているぞ!!」

ウ「君のいた時代から見ればここは何百年も技術が発展した時代だからね…異質に見えるても無理はないか」

セ「けどなんでだろう…：俺はこの風景をどこかで見たことがあるような」

“ドオーンツドオーンツ”

セ「…つて言ってる傍から事件が起きたな」

ア「向こうの方だぞセントツ」

ウ「オーズが来ているかもしれない…行ってみようじゃないか」

セ「よっよしっ…行くぞアカメツウオズ!!」

ア「ああっ」

ウ「(ふっ…そんなに経っていないのに懐かしい響きだな)」

ーとある広場ー

ヤ「ウオオオオオオーツ」

セ「なっなんだあの怪物…スマッシュと違って生物的な見た目してるな」

ウ「あれは“ヤミー”といってグリードが人間に“セルメダル”と呼ばれるメダルを入れることでその人間が持つ欲望を具現化させた怪物さ」

ア「欲望……」

セ「とにかく放っておくわけにはいかない…変身ツ!!」

「ラビットタンク!Yeah!」

ビ「さあてっ行くとします!」

“ブオオオオーツ”

ビ「へえっ?」

?「んっ…ええっ仮面ライダーがもう1人いる!!」

ビ「仮面ライダーがもう1人って…まさか貴方が!」

映「ああっ俺も仮面ライダーなんだ!俺の名前は“火野映司”仮面ライダーオーズだ」

ビ「マジかつこんなに早く会えるなんて…俺はセントツ仮面ライダービルドだ!」

映「ビルドっていう名前のライダーなんだ…これも何かの縁だねっよろしくビルド

!!」

ビ「よろしく映司さん！」

ウ「ああゝ：セントくん興奮してるとこ申し訳ないがまずはあのヤミーをどうにかする方が先決じゃないか？」

ビ「ああそうだつまりはヤミーを倒さないと!!」

映「なら俺も…」

“チャキンツ…カチャツ…キンキンツ”

映「変身ツ!!」

「タカ・トラ・バツタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ！」

オ「はああつ」

ビ「えっ…何いまの歌？タカ…トラ…バツタつて」

オ「ああ歌は気にしないでっオーズはこれが基本だからさ」

ビ「これが基本なのお？」

オ「さあてっ…一緒に行くよビルド!!」

ビ「はっはい!!」

「ボルテックフィニッシュ！Yeah！」

「スキヤニングチャージ！」

ビ・オ「はああああーっ!!」

“ドガアアアアアーンツ”

ヤ「ギイヤアアアアアーンツ!!」

“ジャララララ……”

ビ「うおつメダルになった……」

オ「ふううう……ありがとうビルドツ一緒に戦ってくれて」

ビ「いついえこちらこそ……」

ア「しかし体が三色に分かれてるとは……個性的な見た目だな」

オ「よく言われるよ……あそうだっ出会いの印にこれ!!」

ビ「えっ……これは……何？」

オ「明日のパンツ”だよ」

ビ「おおおおいっ女の子がいる前で男性モノの下着を出さないでええ!!」

オ「あつそうだ!君の分の明日のパンツも渡さなきゃ……けどさすがに女性モノのパン

ツは持ってないんだよなあ」

ビ「渡さなくていいっ持ってなくていい!!つか下着を素で持ち歩くのを止めなさいよ

!」

オ「それは無理だよっこれは明日を生きるために必要なモノなんだから」

ア「明日を生きるために……セントツ私も」明日のパンツ」とやらが欲しいぞ!!」
ビ「何故に!？」

ア「愚問だぞ……セントと共に明日を生きるためさ」

ビ「なんて純粋な子なのっ穢れを知らないとはこのことか!!」

オ「それじゃ一緒に明日のパンツを買いに行こうか♪」

ア「ああっ行こう！」

ビ「行かないくていいからああくくくっ!!」

ウ「やれやれ……この賑やかな感じ戻ってこないとわかっていても求めてしまうな
……君もそう思うだろ……」我が魔王「よ」

“別のライダーの世界に続く”

仮面ライダー鎧武・果実と鎧武者

《とある次元の狭間》

ウ「さあ数多のライダーの世界を渡り歩く冒険者よ…再びルーレットを回し次に行くべきライダーの世界を選びたまえ！」

タ「…何なのこの人？」

ア「私たちもこの前会ったばかりでよく知らないんだ」

セ「多分友達がいなさ過ぎて妄想の世界で1人ですつと喋ってるうちに中二病まがいの病に侵されてああいう性格になっちゃったんだよ」

ア・タ「中二病ってなんだ？」

セ「別の意味で“痛い”病気のことだよ」

ウ「酷い言われようじゃないか!!」

セ「あつごめん怒った？」

ウ「ううんっ…失礼っこの言い回し方に慣れてるのでね…断じて中二病なんかではない!!」

セ「そうなんだ：あそうだった次に行くライダーの世界を選んだたよね？それじゃ早速フルレットスタート！あポチツとな♪」

“ピピピピピ……ピピツ”

「仮面ライダー鎧武」

ウ「祝えっ次に行くべきライダーの世界は：”仮面ライダー鎧武”の世界だ！」

セ「仮面ライダー鎧武：名前からして和製な感じがするね」

ウ「百聞は一見に如かずっ早速タイムマジンンを使い鎧武がいる時代に行こうではないか!!」

「タアーイムツマジーン！」

タ「うおおっなんだこのデカブツは!？」

ア「タイムマシンと言う過去と未来を行き来するための乗り物らしい」

タ「過去と未来を!？」

セ「よおしっそれじゃ鎧武の時代に向けて：レッツゴオーツ!!」

セ「着いたぞっ鎧武がいる時代に!!」

タ「なあっとなあっ…なんだよこの風景!?城みたいなデカイ建物があっちこっちにあるぞ!!」

ア「ウオズが言うにはライダーがいる時代は私たちがいる時代から何百年も先の未来らしいんだ」

タ「何百年も!?それ本当なのか!?!」

ウ「ああっ色んな技術が君のいる時代より優れている…例えばあそこにある”自販機”はお金を入れてボタンを押すだけで冷えた飲み物や温かい飲み物が自動で出てくる
機器なんだ」

タ「マジかよっすげえな未来の世界って!」

ア「飲み物が自動で出てくるなんて…素晴らしい世界だなセント!」

セ「そっそうだね…」

ウ「(自販機で…)ここまで感動するとは…:…それだけ彼らにとつて”未来”とは希望に満ち溢れたモノになってほしいという願いがあつてのものなんだろう)」

”ブオオオオオンツ…:シユンシユンツ”

「シヤアアアアーツ!!」

セ「うおっ早速現れやがったな怪物共!!」

ア「ウオズ：あれはなんという怪物なんだ？」

ウ「この本によれば：奴らの名称は“インベス”と言い“ヘルハイムの森”という異世界で生まれ“クラック”と呼ばれる次元の裂け目を利用してこの世界に現れる怪物らしい」

タ「異世界で生まれた怪物：それがなんでこの世界に現れてるんだ？」

ウ「その答えは：“仮面ライダー鎧武”のDVD&Blu-rayで観てくれたまえ！」

タ「でいつ：ディーブイデイ？ブルーレイ？」

セ「何しれつと宣伝してるのさ！今はそのインベスをどうにかしなきゃでしょ!!!」

ア「そうだなっ：そういえば前はこの時に仮面ライダーが現れて共に戦ったな」

？「おおお！お前たちっそんなとこで何してんだ！」

ウ「噂をすればなんとやらだね：どうやら来たみたいだ」

セ「ええっ：てことは君が仮面ライダー鎧武!？」

？「俺のこと知ってるのか!？」

セ「知ってるも何も：俺たちは君に会いに来たんだよ！」

紘「そうかつなら自己紹介しなきゃだな!!俺は仮面ライダー鎧武の“葛葉紘汰”だっよろしくな！」

セ「俺は仮面ライダービルドのセントツよろしく絃汰」

絃「おうっ」

イ「シヤアアアアーツ!!（無視するなああツ!!）」

セ「おっと…まずはインベスを倒さなきゃだな」

絃「よおしっ行くぜセント!」

セ「OKッ!」

「ラビット／タンク・ベストマッチ!」

「オレンジ・ロックオン」

「Are you ready?」

セ・絃「変身ッ!!」

「鋼のムーンサルト!ラビットタンク!Yeah!」

「オレンジアームズ!花道・オンステージ!」

鎧「よっしゃああっ行くぜ!」

ビ「オッオレンジが頭に!?!仮面ライダーって…ほんと個性豊なんだなあ」

タ「(そのセリフお前が言うべきじゃないだろ…)」

ビ「とっ…俺も行かなきゃだな」

鎧「ふうんっはああっ」

“ズバアンツズバアンツ”

鎧「ふうっおりやあああつ」

“ズバアンズバアンツ”

イ「キイシャアツ」

ア「鎧武は二刀流なのか…まだ太刀筋は粗いが二本の剣を巧みに扱う技術は素晴らしいな」

タ「二刀流かあ…同じ剣使いとしては憧れるよなあ！」

ビ「あららっお二人は鎧武のことがかなり気に入ったみたいね！」

“バアンツ”

ビ「ほおっよおつと!!」

“ドオンツドオンツ”

イ「シャアアアツ」

鎧「ビルドツ一気に行くぜ！」

ビ「ああっ」

「オレンジスカツシユ！」

「Ready go! ボルテックファイニツシユ! Yeah!」

鎧「せいっはああああーっ!!」

ビ「はあああああーっ!!」

〃ドオオオオーっ!!〃

イ「キシヤアアアーっ!!」

〃ドガアアアアーっ!!〃

鎧「おっしやあ!」

ビ「ふううう…お疲れ絺沓」

鎧「セントもお疲れさんっ」

〃ピイイイーっ!!〃

絨「にしても赤と青のアーマードライダーなんて見たことがないんだけど…セントはどここのチームに所属してるんだ?」

セ「チーム?」

ウ「鎧武は〃ビートライダーズ〃というストリートダンスを行うチームの1つ〃チーム鎧武〃に所属しているんだ。ちなみにこの世界では仮面ライダーのことを〃アーマードライダー〃と呼んでいるらしい」

セ「へえ、そうなんだ…」

絨「知らないってことは沢芽市の住人じゃないってことか…あそうだったから全チーム共同のイベントがあるんだっ良かったら観に来ないか!?!」

セ「イベントかあ……どうする？」

ア「私は興味があるぞっこの時代の文化にもっと触れ合ってみたい！」

タ「俺もストリートダンスがどういものか観てみたい！」

ウ「私は君たちについていくだけだよ」

セ「決まりだねっそれじゃ紘汰……そのイベントにお邪魔させてもらうよ」

紘「ああっ楽しんでっくれよ！なんなら飛び入り参加してもいいんだぜ！」

セ「そっそれはさすがにい……」

ーイベント会場・ステージ上ー

セ「っ……っ……踊れたぜえ！」

紘「すげえなセントツもかしてダンス経験者か!？」

セ「そっそんな記憶はないんだけど……何かしら音楽に携わってたのかな？」

紘「おおしっそれじゃ今日大活躍してくれセント……皆に一言頼む！」

セ「へえっ……えっええっ……」

観客一同「……」

セ「……夜は焼肉っしよおおーっ!!」

紘「はえっ?」

観客一同「???」

セ「(白けたっ!! てかなんで俺はこんな意味不明なセリフを言ってしまったんだあ

!!)」

ア「(セントお前も肉好きだったのか…なら今日の晩御飯は焼肉丼で決まりだ!)」

タ「(あああ…なんかいますげえ嫌な未来が見えた気がするう)」

ウ「(あのセリフは確かビルドの世界の…ふっどうやら君は”彼”の記憶も受け継いでいるみたいだね)」

“別のライダーの世界に続く”

セントとアカメくベストマッチな2人く

ー某月某日・ナイトレイドアジトー

セ「……街に出掛きたい？」

ア「(コクリッ)」

セ「俺と一緒に？」

ア「(コクリッ)」

セ「またなんで？」

ア「……ツ／／／／」

“コツンツ”

セ「痛っ！」

レ「セントオゥ……そこを聞くのは男して野暮つてもんだよ」

セ「っ??？」

お日柄の良いとある日……ナイトレイドのアジトでは平和なひと時が流れていた、

そんな中つ本日非番でアジトにいたセントはアカメのとある発言に頭から？が出ていた

“セントと一緒に街に出掛けたい” 何故急にそんなことを言ったのかを聞くとアカメは頬を赤く染め：傍にいたレオーネはセントの頭を軽く叩いたのであった

レ「アカメが勇気を出してお前をデートに誘ったんだよつそこは理由を聞かずに”行こう” だろ！」

セ「そつ…：そうなの？」

レ「かああ…：色恋沙汰に疎いって罪だねえ…」

セ「そんなに責められるほどのこと言ったかな俺…」

レ「と・に・か・くつ私の親友がお前と一緒に出掛けたいって言ってるんだ！だからお前は何も言わずにアカメと一緒に出掛けてこい！」

セ「そつそうは言ってもアカメは帝都じゃ顔割れてるからこの状態だとすぐバレるよ」

チエ「ふつふつふ…：セントくんつ私のことをお忘れじゃないかな？」

セ「へえつチエルシー？」

チエ「私の帝具” 変身自在・ガイアファンデーション” の力を使えばそんな問題はす

ぐに解決できるよ！」

レ「あつでもアカメの要素が残ってないとデートしてる感でないからそこらへんはよろしくね？」

チエ「任せといて!!という訳でアカメちゃん…あっちの部屋で私がメイクしてあげから行こ♪」

ア「わっ…わかった」

レ「んじゃセントは水浴びして服装と髪を整えてアジトの外で待っててつその間に私とチエルシーでアカメを最っ高の状コンディション態にしてあげるから!!」

セ「はっはい…」

レオーネの勢いに押されたセントは言われた通りに水浴び↓髪の設定↓服選びを
終え、

普段のどこかズボラな感じから凛々しい好青年風のイケメン男子へと変わった

セ「ここまでおめかしするの久しぶりだなあ…にしてもアカメのやつつなんで急に街に行きたいなんて言ったんだろ」

ラ「たくっこれだから女心のわからない奴は……」

セ「悪かったなわからなくて…つかお前はいつからここにいたんだよ？」

ラ「お前がアカメちゃんと一緒に出掛けるってことを知ったからに決まってんだろおお!!なんだよお前はっ一番下っ端のくせにうちのエースであるアカメちゃんとデートに行くとか!俺なんてナジエンダさんと同じ空間にすらいられないっていうのによおお!!」

セ「うん…多分その原因はお前自身の行いのせいだよ」

ラ「くわあああゝゝつ!!なんでだあつなんでこんな色恋沙汰に鈍い男がモテて女心を熟知してる俺が童貞街道を突き進んでいるんだよおおおゝゝゝつ!!」

「ゴリラ」

セ「ラバ…少し眠れっ」

“バゴオオオーーンツ”

ラ「ぎやあふっ!!」

荒れ狂うラバツクを鎮めるべく…セントはゴリラボトルを数回振った後、

ゴリラの成分が溜まった右手でラバツクの顔を思いつき殴り気絶させたのだった

セ「たくつそんなだからお前はモテないんだよ…」

ア「セツセントオ……」

セ「おつアカメ………てっ雰囲気変わり過ぎだろ！」

ア「ツ／／／／」

現れたアカメの姿にセントもビックリ…髪形はリボンのゴムを用いたポニーテールとなり

服装も普段の黒統一のモノから大人な色のマゼンタカラーのワンピースを身に纏っていた

更にチエルシーの帝具の力でメイクも完璧に施されており、

顔もバレないようにしつつ部分部分にアカメの要素を残すことに成功している

これにはさすがのセントも驚いたよう…アカメの周りを何度も周りその姿を確認し、

一方のアカメはセントに見られていることが恥ずかしいようで先程以上に顔を赤く染める

ア「あつあまりジロジロ見ないでくれ………恥ずかしい／／／／」

セ「あつごめん……あまりのビフォーアフターにビックリしちゃって」

ア「そっそれじゃ……行こうか？」

セ「そだね……んじやこいつで帝都の町まで行きましようか」

「ビルドチェンジ」

“ドオンツ”

セ「アカメは俺の後ろに乗って結構スピード出るからしっかり掴まってね？」

ア「わかつたっ」

“ギユウツ”

セ「ツ!! (せつ背中に柔らかい感触があ……はあつかんいかん!素数を数えて落ち着くんだ……2・3・5・7・11・13・17・19・23……)」

ア「セント……どうかしたか？」

セ「なっなんでもないよ!そっそれじゃ帝都の街に行くとしますか!!」

ア「ああっ」

“ブオオオオーンツ”こうしてセントとアカメは帝都に向かって出発し、

その後ろ姿をレオーネとチエルシーは温かい目で見送ったのだった

チエ「ふうう……無事に出掛けられて良かったね」

レ「けどチエルシー…あんたはいいの？」

チエ「へえっ…何が？」

レ「あんたもセントのこと好きなんでしょ？」

チエ「ツ／／／」

レ「お姐さんの目は誤魔化せないよお…最近のチエルシーツセントを見てる時の顔が乙女になってるもん」

チエ「そっそんなことはあ…／／／」

レ「ふふふっ…まあでもあの2人の仲の良さ見たら一歩引いて見守りたくなる気持ちもわからないではないよ」

チエ「うううっ…」

レ「でもねチエルシー…恋は戦いと同じでどう攻めていくかが肝心だよ。あんたがどうしたいかは自分が納得いくまで考えれば良いけど…後悔だけはしないようにね」

チエ「…ツ／／」

レ「さあてっ今日はボスもないことだし…昼酒といきますか!!」

チエ「…私も付き合っついていい？」

レ「勿論ツ」

チエ「…ありがとうっレオーネ」

レ「どういたしまして♪」

チエ「ふふっ……あそうだっこれラバツクはどうする？」

レ「ほっところ！」

チエ「まあそうなるよね♪」

――帝都・市街地区――

ア「……変装してるとは言え帝都の街中を堂々と歩くのは緊張するな」

セ「もつとリラックスしないとっ強張つてると逆に怪しまれるよ」

ア「……セント……そのお……てっ手を繋いでくれないか？」

セ「OKッ」

“ギユッ”

ア「ツ／／／（セントの手……以外に細いんだな）」

セ「少しは緊張解れた？」

ア「ああ……ありがとう／／／」

セ「よしっ……それじゃ帝都観光といきますか♪」

ア「街には詳しいのか？」

セ「ナイトレイドに入る前はここで生活してたからねっ行きつけのお店もあるから案内するよ」

ア「わかつたっセントに任せよう」

手を繋ぎ街中を歩き進めるセントとアカメ……その姿はまさに休日を満喫するカップルそのものだった、

そんな2人がまず最初にたどり着いたお店は赤色に鳥の羽を模した装飾が施されたアイス屋だった

ア「ここは……アイスのお店か？」

セ「そうっこのお店のアイスがまた絶品なのよ！」

？「あっセントくん！」

セ「どうもです」エイジ「さん」

エ「久しぶりだねっ最近顔見せてなかったけどどうしたの？」

セ「ちよっと色々あります……」

エ「そうなんだあ……んっそちらの女の子は？」

ア「あつ…わつ私は」

セ「俺の彼女の“ミソラ”ですっ初めて帝都に来たんで街を案内してたんです」

エ「ええっセントくん彼女いたんだ!？」

セ「ちよつとそれどういう意味ですか!？」

エ「ああ〜深い意味はないから気にしないで!ええつとミソラちゃんていいんだよね
?俺の名前はエイジッこの“クスクシエ”で働いてるんだつよろしくね!」

ア「あつああ…よろしく…」

セ「んじやエイジさんっいつものやつを2つお願いします」

エ「わかったつすぐ用意するから待ってて」

そう言つてエイジは慣れた手つきで2つのコーンに茶色のアイスのをのせ、

更にその上に赤緑のアイスを上乗せしっそこにスプーンを刺してセントとアカメに
2人に渡した

エ「はいっ下がセントくんお気に入りチョコで上のが最近オレが作った“ホッピン
グシャワー”味のアイスだよ」

セ「また斬新なアイスを考えましたね…」

エ「常に新しいモノを取り入れていくのがうちのスタイルだからね♪」

セ「なるほどね…あつミソラ食べてごらん！凄く美味しいと思うから!!」

ア「ああ…いただきます」

“パクツ”

ア「ツ…なつなんだこの不思議な味は!?!今まで食べたことのない味だが…凄く美味い

!!」

“パチツ”

ア「はあつ…口の中で何かが弾けた!!」

セ「弾けた?どれどれ…」

“パクツ…パチツ”

セ「うわあつほんとだ!口の中でパチパチ鳴ってる…」

エ「凄いでしょっ」

セ「はいっこれはアイス業界に革命が起きますよ!」

エ「そうなればいいなあ」

こうして2人はクスクスエでのアイスを堪能しつつエイジにお礼を言ったのちにその

場を後にし、

先程買ったアイスを食べながら再び帝都の街中をブラブラと歩き進めたのだった

ア「このアイス：本当に美味しいな」

セ「気に入ってもらえてなによりだよっそれじゃ次は最近帝都で流行っている遊び場に行こうか」

ア「遊び場？」

―数分後―

セ「ここだよっ〃バンバンシューティング〃場!! 作りモノの的にペイント弾が入ったおもちゃの銃で狙い撃つゲームができる場所なんだ」

ア「なるほど：要は射撃の訓練を遊びに置き換えたモノを体験できる場所なんだな」
セ「ざっくり言うとなんな感じだね」

簡単な説明をした後っセントはお金を払いアカメを連れシューティングエリアに向かう、

そこには草原をイメージしたフィールドにガーディアンを模したのが配置され射撃を行う場所には台が設置されそこにペイント弾が入った銃が用意されていた

ア「これであの的を狙い撃つんだな？」

セ「そつ簡単でしょ」

ア「だが私は銃との相性が悪くてな……昔マインの射撃訓練に付き合った時に何度も誤射をして危うくマインを撃ってしまいそうになったんだ」

セ「まっまあこれはペイント弾だから……気軽な感じに撃つてみなよ」

ア「よしっ……いくぞっ」

“カチャツ…バンバンツ”

セ「ああく惜しいなっあともう数センチ右だったら当たってたのに」

“バンバンツバンバンバンツ”

ア「……全然当たらない(シヨボン)」

セ「力み過ぎなんだよっ肩の力抜いて少し肘を曲げた姿勢で撃つてごらん」

ア「ふうううう…よしっ」

“バンバンツ…カアアンツ”

セ「おおつ当たったよアカツ…ミソラ!!」

ア「なるほどっ…コツが掴めたかもしれないっ」

セ「よおしっ…どっちが多く的を倒せるか勝負と行こうか!!」

ア「ああっ負けないぞ!!」

その後…2人の射撃勝負は白熱しつつ多くの見物客が見守る中での勝負となった、結果は僅差でセントが勝利しつつ同時にハイスコアもたたき出し景品としてサンングラスを貰ったのだった

セ「いやあく思いのほか白熱した勝負になったね」

ア「そうだな…だがやはり射撃の腕前はセントの方が上だ」

セ「まあそれなりに経験があったからねつてもアカメだつて最初の時よりは格段に上手くなつてたよ」

ア「そうか？」

セ「そうだよっ今度メインと訓練した時に成長した姿を見せてごらん!」

ア「…あああつ機会があれば披露してみるよ」

そんなことを2人で話してた時にセントが上を見上げると…空が少し赤みがかつており、

時計を確認してみると時刻は午後4時半と夕方の時間になっていたのである

く

そしてセントはコーヒーを…アカメはココアを一口飲んで一息つき、今日の疲れを癒すかのようにその味をしつかりと噛みしめるのだった

セ「ふううう…なんだかんだで有意義な一日を過ごせたね」

ア「ああ…私もっ…久しぶりに楽しい休日を過ごせたよ」

セ「けど最初は本当に驚いたよっアカメがデートに誘ってくるなんて思いもしてなかったからさ」

ア「…わっ私は…セツセントと一緒に時間を過ごしてみたいと思って…それをレオーネに相談したら／／／」

セ「“デートに誘えば？”とレオーネが提案してくれたって訳か…本当にアカメのことが好きなんだなレオーネは♪」

ア「セツ…セントは…私のことをどう想っている？」

セ「えっ…そっそれは…っ／／／／／」

ア「…／／／／／」

セ「…勿論っ好きに決まってるじゃないか!!」

ア「／／／／／」

セ「あつ…あうつ…えつええつと…こつこの“好き”には色んな意味が込められると言いますかあ…あのおつ…そのおつく…」

ア「私もつ…私もセントのことが好きだつ!!」

セ「ツ／／／／」

ア「だっだから…そのおつ…／／／／」

“ポントツ”

ア「っ?」

セ「…焦らずにいこう。今日っ両想いだつてことを知れただけでも…一歩前進したわけだし／／／／」

ア「…：…そつ…：…そうだな／／／／」

セ「…：…帰ろうか?」

ア「うんっ」

こうして…セントとアカメの両者はお互いの気持ちをお互いの告白することができ、

めでたく結ばれ…たのかはまだわからないがとにかく一歩前へ進んだ関係へと
なりましたとさ

【END】

1 同日夜・ナイトレイドアジト1

レ「それでそれでどうだったの今日のデートは!？」

チエ「セントくん楽しく過ごせられた!？」

ア「うっ…うん／／／／」

レ「おおおっ／／／!!アカメがそんなほんわかかな顔と口調になってるの久しぶりに見たぞ!!」

チエ「腕によりをかけてメイクした甲斐があつたよっ」

ア「ツ／／／／」

マ「顔が更に赤くなつたわね…：セントツあんた変なことアカメに言っていないでしよ
うね?」

セ「なんだよ変なことって…」

ラ「そ・れ・でっ…アカメちゃんどこまでイツたんだよ!!？」

セ「…：ご想像にお任せします／／／／」

ラ「きいやあああああ／／／／!!」

【終わっとけ】

の空間に乗せて追わせれば……………」

“ゴオオオオオオ……………」

「……………もともと俺は作られた存在……………存在してはいけない人間……………でもつここで終わらせるわけにはいかないんだ！」

“ゴオオオオオオ……………」

「俺の記憶と思い出は失われるかもしれない……………全てなかったことになるかもしれない……………けどっ今はこれしか方法がない!!」

“パワアアア……………」

「頼んだぞ……………お前がっ……………お前が世界を救いッ皆の明日を守るッ」

？「んっ……んあ……ここ……は……」

目が覚めると……俺はとある町中にいた

人気がなく……大きな樽やゴミが散らかる

どこかの薄暗い路地に……座り込んでいた

？「……俺は……誰だ？何故……こんなところに」

意識がハッキリしていく中で俺は自分に問う

俺は誰だ……何者なんだ……何故……どうしてこんなところに……

色んな疑問が俺の頭の中を巡り……混乱させる

そんなことを考えていると…

“ポツツ…ポツツ…ザアアア…”
? 「……あ…め？」

上を見上げると薄暗い雲が広がる空から
冷たい水の粒が降ってきた、

最初はポツンポツンと弱かったが…

それは徐々に強くなっていき、

気づいたときには大量の雨粒がふり

あたりを濡らし湿らせていった

? 「……俺は……どうしたら……」

? 「んっ……おいお前っそんなとこで何をしてるんだ!？」

? 「えっ……貴方は？」

? 「人に名を訪ねる時はまず自分から名乗るもんだぞ少年♪」

? 「……わからない……自分が何者かも……どうしてここにいるのかも……わからないん

だ」

？ 「ふくん…記憶喪失ってやつか、まあこんなご時世だ…自分を見失う人間が出てくるのも仕方ないってものさ」

？ 「……………」

？ 「ともかくつこのままじゃ濡れて風邪ひいちゃうぞ」

“ ガシッ ”

？ 「えっ？」

？ 「立てよツ家に連れてってやる」

？ 「……………こんな…見ず知らずの……………俺を？」

？ 「俺がしたくてやってんだツ有無は言わせねえぞお♪」

？ 「……………あり…がとう」

？ 「良いってことさ…あそうだつまだ名前言つてなかったな！俺の名前は“ソウイチダツよろしくな少年♪”」

？ 「……………セン…ト」

ソ 「んっなんだって？」

セ 「……………セント” ……多分…それが俺の名前だと思う」

ソ 「セントかつ良い名前じゃねえか、よろしくなセント」

セ「……よろしく…ソウイチさん」

ソ「うしっんじや俺の家に案内するよ」

セ「うん…よいしょつと」

“カチヤツ”

セ「えっ…これは？」

ソ「んっどした…おっ随分珍しいモノ持つてるんだな！噂の“帝具”ってやつか
!?”

セ「帝…具？」

ソ「ああ…あれだっ詳しい話は家に行つてから色々話してやるよ」

セ「……………」

ソ「ほらっ付いてこいセント」

ソ「あっ…うん」

俺が手にした黒いベルトのような形をしたアイテム、

これがなんなのか…なんのためにここにあるのか…

この時の俺にはまだわからなかった

でも…凄く懐かしい感じがして…安心する気持ちになれた

もしかしたらこれが…

俺の記憶に繋がる鍵なのかもしれない

だとするならば…俺はこれを持ち続けなきゃならない

不思議と…そんな気持ちになった

だが今は安心して休める場所が必要だ、

俺は重い足を動かし…先をゆくソウイチの後を追う

そしてこの一歩が…この先に待ち受ける…

俺の記憶を巡る戦いの始まりを告げるものとなったのだ

“ t o b e c o n t i n u e d ”

第1話・その名は“ビルド”

人がやがて朽ちゆくように、国もいずれは滅びゆく――

千年栄えた帝都すらも、今や腐敗し生き地獄――

人の形の魑魅魍魎が、我が物顔で跋扈する――

――ならばこそ、天が裁かぬその悪を、闇の中で始末する――

――そして、絶望に墜ちし世界に、希望の光を灯し創造する――

1年後・帝都城下町 カフェ〔nascita〕

セ「……………zzz」

“チィンツ”

セ「おわあつ……………あああ…寝てたのかオレ…」

昼下がりの帝都、空に昇る太陽が地表を照らす中、少年セントは突然鳴ったベル音に驚き、眠っていた机から体を大きく跳ね起こした

セ「……………はあつもう午後!?!最悪だあ…」

壁に掛けてある時計を見ると時刻は既に正午を回っており、

1日…つまりは24時間の中で人間が起きて活動するであろう

16時間の中での4分の1の時間を睡眠に使ってしまったことを後悔していた

セ「あああゝ…：そういえば昨日は色々あった後での実験だったから寝たのが遅かったよな…：とつそんなことよりボトルボトル！」

テンションが下がっていたセントは

気持ちを切り替え部屋の中にある大きな機械の前に行き、
煙を放出している空間に手を入れそこからあるものを取り出す

セ「よつしやああ！変換成功ッこの成分は…：ライオンカツ!!ということはこのボトルと合わせればベストマッチってことか…：くうううく最っ高だあ!!」

先ほどどうって変わってハイテンションになり、
手に持つ小さなボトルを部屋の灯りに照らし
目をキラキラと輝かせていた

セ「はああゝ…：早く実験したい！に…：してもつこの俺が作ったこの特殊変換装置、優

秀過ぎて発明者本人も土下座したくなる仕事ぶりだよ」

と言いながらセントは“特殊変換装置”なる大きな機械に頬をつけ…優しく扱うの如く手で撫でるのであった

セ「こいつのおかげでボトルの浄化も進み…扱える力もどんどん増えていく…でもつ何より凄いのはそれを生み出し扱うこの俺の才能だよな、凄いでしょうっ最っ高でしょうっ天才でしょっ!?”

“シイーン….”

セ「……うんっ…そろそろ上にあがろっか」

ハイテンションだったセントは取り合えず冷静になり、椅子にかけていたお気に入りの黒コートを持ち隣の部屋に設置してある螺旋階段を上がっていく階段を上がり終わると目の前には小さな扉があり、セントは裏に設置してある鍵のロックを解除し、扉をゆつくりと開け目の前の状況を確認する

セ「……相変わらずお客ゼロか、まあっいつも通りのことだけどね」

“バタンツ”

セ「さあてっ朝食……じゃないっ昼食昼食っ」と

“シユウンツ”

ソ「ボンジョオオ〜ルノツセントくん！」

セ「おわあっビックリしたあ……マスター心臓に悪いから止めてよねそういうの！」

ソ「あれあれえ〜寝坊助がそんな口のきき方していいのかなあ……お前の分の飯っ用意してあるんだけどなあ」

セ「マスターごめんっ謝る！だからご飯を盗らないでください！」

ソ「わかればよろしっ」

セ「おっ今日はパスタか、んじやついたただきまあす!!」

セントの前に現れた男・ソウイチは

からかいつつもセントに用意した

朝食兼昼食のパスタがのったお盆をテーブルに置き、

セントはテーブルに置いてあつたフォークを使い

パスタを口に運んでいった

セ「うううくくんっ…やっぱ人間は食べなきや駄目だね♪」

ソ「贅沢なことを言うねえ、この帝都じや飯を食うという当たり前のこともできない人間が多くいるっていうのに」

セ「…：食事中に暗い話題出すなよな」

ソ「あっこりや失礼♪お詫びに俺特製のコーヒーをセントくんにはやろう！」

セ「うっ…：今度のは大丈夫だよな？」

ソ「自信作だッ遠慮せず飲んでくれ♪」

セ「信じるぞ…：んじやっいただきます」

“ゴクツゴクツ…”

セ「ぶはああっ…」

ソ「うおおつ汚ねえなおい…：これ新調したばっかなんだぞ!!」

セ「知るかそんなもんツつかなんだよこれ!? 相変わらず不味いままじやんか!」

ソ「お前の舌がお子様なんだよッコーヒーつつうのはこれくらい苦みがあるほうが良いんだって」

セ「たくっ…：カフェやっててコーヒー淹れるのが下手ってどういうことだよ、よくこ

れで1年も店が潰れなかったよね」

ソ「1年か……：そういうえばお前を拾ったのも1年前だったよなあ」

セ「ああ……：もうそんなに経つんだね」

ソ「どうだっ？」

セ「どうだって何が？」

ソ「お前の記憶のことだよ！何か思い出したりしてないのか!？」

セ「……：それが全然ツ残っているのはこの天才的な頭脳と機械作製の技術……：そして”

ビルド”に関する知識だけだ」

セントはそういいながら懐から黒いベルト状のアイテムと

先ほど手に持っていたモノと似ている赤と青のボトルをテーブルに置く

ソ「お前が最初に倒れていた場所に一緒に落ちてたアイテム……：それがその”ビルド
ライバー”と”ボトル”だった……：最初は”帝具”の一種かと思つて俺も驚いたよ」

セ「そんな歴史あるものなんかじゃないよ……：まあ俺自身もまだ完全にこれを把握し
きつてないんだけどね」

ソ「とうとうと？」

セ「ビルドシステムにはまだ知られてない力が眠ってる、それこそ世界を変えるような力が……なんとなくだけどそんな気がするんだ」

ソ「なるほどねえ……」

セ「まっ焦ったって仕方ないよ、こういうのは時間をかけて取り組まないと駄目だからさ」

ソ「まあ俺は良いんだけどさ、お前が時々危険種を狩って懸賞金を稼いできてくれるおかげでこの店は今でも成り立ってるんだからな」

セ「完全に俺頼りじゃんそれ……つか店の経営がずっと赤字なのはマスターがちゃんとコーヒー淹れられないのが原因でしょ！」

ソ「ううっ……痛いところをつくじゃねえかあ」

セ「はああく……まっ住む場所をくれたんだ、それなりに感謝はしてるよ……それじゃつ腹ごなしと気分転換がてら外に行ってくるね」

ソ「気をつけるよッ最近の帝都は前にもまして危険地帯になってる、路上を歩いているだけで争いに巻き込まれるのなんて日常茶飯事なほどにな」

セ「そういえばこの間歩いてた時に道端で数人の男が荒ぶっててそこその騒ぎになつてたね」

ソ「ただでさえまともな政治をしてこなかった帝国だが……この1年ちよいでそれが

もつと酷くなつてゐるって近所の主婦たちが言つてたくらいだからな」

セ「……あの城の中にいる“権力者”共が……この国を腐敗させ続けている、いつになつたらそのことに気づくのやら」

ソ「“革命軍”が大きく動き出しているのは知つてゐるだろ……最近じゃその革命軍の切り札的組織が帝都内で名を馳せてゐらしいぜ」

セ「……“殺し屋集団”のことか」

ソ「噂じゃ帝都の重役たちや富裕層の連中たちを中心に暗殺と称して殺してゐらしい、まあ殺されてるのはろくな人間じゃないから死んで喜んでる奴らも多く……帝都に住む人々の間でも“救世主”かもツなんて言われるらしいぜ」

セ「……命を奪つた先にある未来に……幸せなんてこないよ」

ソ「へえっ？」

セ「ううんっなんでもない……それじゃ散歩に行つてきまあゝす」

ソ「おうっ気をつけろよセント！」

“ガチャツ……バタンツ”

ソ「……やれやれっまだ戦う覚悟は定まつてない感じか、でもなセント……お前は強くならなきゃならないんだ……」

ソ
「俺の野望を…復讐を果たすためにも…な」

セ「天気が良いことで…これは絶好の散歩日和だね」

nascitaを出たセントは帝都の町並みを見ながら
のんびりと歩きながら散歩を楽しんでいた

そんな時…セントの前をとある集団が
列を乱さない規律正しい行進をしながら歩いていた

セ「……また“ガーディアン”の数が増えたな、町の警備という名目じゃ説明できない配置数だぞこれ」

“ ガーディアン ” それはここ一年の間に

帝都が新たな兵力と称して導入した

完全自立型の機械兵士である

機械ということもあり人間のような心はないが

余計な思考をもたず命令された指示を

的確かつ確実に実行に移すその優秀さから

現在では帝都の主力兵士となっており

警護から異民族との戦争の際に導入されたりなど

幅広い任務で活躍している

だがその結果非力で無能な人間の兵士が必要となくなり

この1年の間に大勢の兵士が解雇され職を失ってしまった

その結果、現在の帝都に残っている人間の兵士はごくわずかで

帝都警備隊ですら8割ほどがガーディアンとなっている

当然ながらそのことに不満を持つ元兵士は数多く、

そのほとんどがやがぐれいまや帝都内のあちこちで

暴動やテロまがいの行動を起こし問題となっている

セ「世知辛い世の中だよな……まっ誰かを傷つけた時点で同情はしねえけどさ」

そういうとセントはポケットから
棒付きキャンデーを一つ取り出し、
それを口にくわえ再び歩き出した

セ「さあてっ気分を変えて散歩を「てめえっこの俺様にたてつく気かっあああ!？」言っ
てるそばからこれだよ」

散歩を再開しようとするど、

近いところから怒号が聞こえてきた

声が出した方向に顔を向けると、

3人ほどの体格がそこそこデカイ男3人が

子ども2人を庇う母親らしき女性に因縁をつけていた

「どっどっかお許してください！この子たちも悪気があってやったわけじゃないんです

！」

「悪気がどうか問題じゃねえんだよツそのガキ…よくも俺たちが食つてた飯を盗りやがったな！」

「ごっごめんなさい…あまりにもお腹が空いていたから…妹も僕も…母さんももう限界でっ」

「お前らの理由なんざ聞いてねえんだよツようはどう落とし前つけてくれるかってことを聞いてんだ！」

「そっそう言われましても……」

「金がないっていうなら……あんたを代金がわりに連れていくしかねえな」

〃 ガシツ〃

「ひいっ!!」

「母さん！」

「お母さんツ!!」

「やつやめてください…私がいなくなったらこの子たちが!!」

「知らねえなそんなこと……さあつ大人しくついてきてもらおうかあ？」

「お願いですっ手を離してください！」

「ガタガタうるせえ女だなっ少しは…黙りやがれえ！」

3人の男のうちの1人がナイフを取り出し、

なおも騒ぐ女性に向けてナイフを振り下ろした

2人の子どもが叫ぶものの：回避するのは絶望的、

誰しもが女性はここで死んでしまう：

それが現実になりそうな距離にまでナイフが迫った：その時ッ

“ガシッ”

「ッ……なあっ!？」

セ「おいおい……真昼間の町中でなに物騒なことをしてんのさ」

「なっなんだてめえ!？」

セ「通りすがりの”正義の味方”ってどこ♪」

「ふざけてんじゃねえぞこらあッ」

一部始終を目撃していたセントは女性と子どもを守るべく、

男たちの間に割って入り、ナイフを持った手を右手で掴み阻止した

一方ナイフを持った男は標的を女性からセントに変え、

素人とは思えない巧みなナイフさばきでセントを襲う

「ふうっさああっはあああつ」

セ「ふっほおっ…へえ、意外にいい動きしてるね、ナイフのさばき方を見ると元兵士か傭兵か…」

「何をぐちゃぐちゃ言ってるやがるツ、いいから黙って死ねええ！」

セ「け…どっ」

“ シュツ…バアンツ ”

「なああつ!？」

セ「人を傷つけるだけの力じゃ…俺には勝てないよ！」

“ シュツ…ドオオンツ ”

「どわあああーっ!!」

セントはナイフの軌道を正確に読み

振り下ろされた瞬間に左腕でナイフを弾き、

完全無防備状態の男に回し蹴りを放った

顔面に回し蹴りを喰らった男は大きく吹き飛び、

仲間である2人の男たちがいる地面に大きな音をたてて倒れた

「おっおい！」

「大丈夫か!？」

「くつくそお……このガキッ」

“ チャキンッ ”

「ひいっ!!」

セ「はい……チェックメイト」

倒れた男にセントは先ほど弾き空中に飛んだナイフを

右手でキャッチしツ男の首元に刃先を向ける

「たっ頼む……許してくれっ……ちよつちよつとした出来心だっただ……本気で連れてこよう
なんざ思っでないだよ！」

セ「……だったら取り巻き連れてこの場から消えろ……今すぐにッ!!」

“ シュウンッ……キインッ ”

「「ひいっすいませんでしたあぁーっ……!!」」

セントは男の顔すれすれのところに向けナイフを投げた、
それにビビった男たちは謝罪の言葉を発しながら
同時に走り出しッその場から去っていった

セ「……最悪だあ……せつかくの散歩か台無しじゃねえか」

“パチツ……パチパチパチパチツ”

セ「へえっ？」

「兄ちゃんすげえなっカツコよかったぞ!!」

「ほんとお男3人相手にして動じず堂々と立ち向かう姿……素敵だったわよ!」
「この帝都に兄さんみたいな人がまだいたんだな……久々にスカツとしたよ!」

先ほどの一部始終を見ていた町の人々は、

勇敢に立ち向かい男どもを撃退したセントに向け

感謝の拍手を贈るのだった

一方のセントはまさかの展開に動揺しつつも、

左手で頭をかきながら“どうもっ”と言いなながら

町の人たちに一礼した

セ「(やべえな…めっちゃ目立ってしまったよ)」

「あつあのお…」

セ「はい？」

「さつ先ほどは助けてくださってありがとうございます、貴方のおかげで子どもたちも大した怪我を負わずにすみました」

「お兄さんツ…母さんを助けてくれてありがとうございます、すごいカッコ良かったよー」

セ「ありがとう…けど君たちがやった行為も問題だぞ、どんな理由があれ誰かの食べ物を盗るのは駄目だ…食べ物への恨みというのは何よりも恐ろしいからね」

「うっうん…今日ので痛いほどわかった…もう盗みは絶対にしないよ」

セ「よしっお兄さんとの約束だぞ」

「うんっ」

「………ねえお兄ちゃん」

セ「んっどうしたの可愛いお嬢さん？」

「………何か食べ物ない？私もお兄ちゃんもお母さんも…ご飯食べてなくて」

「おっおい！」

「危ないところを助けていただいたのにつそんな我儘言っちゃいけません！」

「だつてえ……」

〃 ヒュイツ〃

セ「いま棒付きキャンディーしかないんだ…取り合えずこれで我慢してね」

「えっ…本当にくれるの？」

セ「勿論ツ遠慮せずに食べな」

「ありがとうお兄ちゃんツ!!」

セ「ほれっ少年も食いなっせ」

「あつありがとう…」

セ「はいお母様も…こんなもので申し訳ないですけど」

「ほッ本当によろしいんですか?いま手持ちが何もなくて…」

セ「ああ〜良いんです良いんですツこれ俺が作った手作りキャンディーだから、なの

でお金はいりません…ていうか貰うつもりなので安心してください」

「……何から何まで…本当にありがとうございます!」

「ありがとうお兄さんツ」

「お兄ちゃんありがとうっこれ甘くて凄く美味しいよ♪」

セ「そりゃ良かった…んじやつ俺はここらへんで失礼しますね」

「あつお兄さん…最後に聞きたいことがッ」

セ「んっなんだい少年？」

「……………なんで靴右と左で色が違うの？」

セ「そりや俺が天ツ才物理学者だからさ！」

「ブツブツリ…ガクシヤ？」

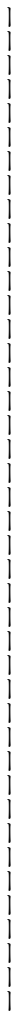
セ「大きくなればわかる、それじゃ…S e e y o u！」

そう言うのとセントはその場から去っていき、

残った親子3人と町の人々は去っていくセントの姿を見て

まるで“正義”が形になって現れたような存在だと…

言わんばかりの尊敬の眼差しを向けるのだった



セ「はああく……あんなに感謝されるようなことしたつもりじゃないんだけどなあ、人として当たり前のことをしただけだし……つかマスターがあんな話したから騒ぎが起きたんじゃないかこれ!? 帰ったら一言文句言つてやらないと!!」

“バゝバツパバゝバツパバパ…バゝバツパバゝバツパバパ…”

セ「んっ電話だ…マスターから？」

路地裏に来たところでポケットから妙な機械音が鳴る

その音を発しているのはセントが最近発明し開発した

“ビルドフォン”というこの時代ではまだ存在しない

長距離での通信を可能にする端末である

そのビルドフォンのディスプレイには“マスター”と

名前が表示されておりツセントはビルドフォンに搭載してる

ボタンを押しっ耳元に近づける

セ「もしもし?」

ソ『セントかつ突然の報告だ：スマツシユが現れた』

セ「何ツそれほんと!？」

ソ『お前が作ったレーダーに反応している、場所はエリアA―2：ちなみにスマツシユの近くに人間の反応が1つあるツどうやら襲われてるみたいだ』

セ「わかつたすぐ向かうツあとはこつちに任せてくれ!」

ソ『おうっ気をつけて行けよお』

“ピイツ”

セ「ツ：エリアA―2か：ここからじゃ距離があるな、そういうときは…」

“ガチャンツ”

セ「こいつの出番だあつ」

「ビルドチェンジ」

“カシヤカシヤツ：ドオオンツ”

セ「携帯端末からバイク形態“マシンビルダー”に変形する2モード仕様の発明：やつぱ俺って天才だよなあ♪」

セントはマシンビルダーに乗り込み、

同時に出現したヘルメットを頭にかぶる

そしてフロントの液晶ディスプレイを操作し
現在位置からスマツシユがいるポイントへ向かう
もつとも早い最短ルートを検索する

セ「よしつこのルートなら10分くらいってとこだな…待ってるよスマツシユ！」
“ブウウンツブウウンツ…ブオオオオオオオーンツ”
セ「正義のヒーローの出陣だああーっ!!」

タ「はあつはあつはあつ…撒けたか？」

場所は変わり帝都のとある排水溝の中、そこにいた少年の名は「タツミ」といいとある事情で帝都中心部にある城に潜入していた

タ「ツ…なんなんだよきつきの怪物は…こつちの攻撃が一切効かなかったしっ話しかけても何も応えないしっ」

愚痴のように独り言を話すタツミは傷ついた左腕を右手で抑えながら、外に通じる排水溝を歩き進めた
しばらく歩くと陽の光が目に入り、
タツミは周囲を警戒しつつ排水溝を出てその場に座り込んだ

タ「はああく…場数踏むのが一番良いとは言ってたけど…これはいきなりハードすぎるだろっ」

“ブオオオオオーンツ…ギユイイインツ”

タ「へえっ!?”

セ「…:…んっ…:そんなとこで何してんの君?”

タ「いやそりゃこっちのセリフだよっ何その乗り物!?!つかあんた誰!?!”

セ「俺?聞いて驚くなよ…:俺はっ”

“ドオオオオーンツ”

「ウオオオオオオーンツ」

タ「ツ…:…追つてきたのか!?”

セ「もおゝ自己紹介しようと思つてたのにツ」

タツミの前にマシンビルダーに乗って現れたセント、

何者か問われたので説明しようとした時…:

上半身が青と黄色のボディで筋骨隆々な異形の存在が現れた

セ「おおおゝ随分筋肉発達してるね」

タ「何呑気に観察してるんだよッ」

“グイッ”

セ「うおおっ!!」

タ「俺の後ろにいるツこいつは…俺が斬る！」

タツミはセントの腕を引き自分の後ろにこさせ、
背中の鞘に収めていた剣を右手で引き抜き構える

「ツ…ウオオオオオツ」

タ「くっ…はあああぁーっ」

“ ギイインツ ”

タ「ふっ…はああっはああっ」

“ ギイインギイインツ ”

「フウウンツ」

“ ドオオンツ ”

タ「うわああっ!!」

凄まじい速さで放たれた斬撃だが、

斬られた怪物はダメージどころか傷一つ負っていない

タツミは再度斬り込もうとしたが

怪物の右腕から放たれたパンチをもろに受け、
左側の地面に体を打ち付けながら倒れ込んだ

タ「くそっ…やっぱり攻撃が効いてないっなんなんだよこいつは!?!」

「ウウウウ……ッ」

タ「(でもっここでやられる訳にはいかない!あの2人に…もう1度会うまでは!!)」

「フウウウンッ」

タ「はああッ」

“ ブウウウンッ ”

タ「せやあああーっ」

“ ガギイインッ ” タツミは神経を集中させ、

怪物が放ったパンチを見切り回避する

そして懐が無防備になった怪物の体に向け、

渾身の斬撃を放った……だが

「ハアアアアツ」

“ バアアアーンツ ”

タ「がはあつ!!」

精一杯の力で放った斬撃ですら怪物には効果がなく、

その結果今度はタツミが無防備となつてしまい

怪物の放つパンチを顔に受けてしまった

大きく吹っ飛ばされたタツミは再び地面に倒れ、

パンチを受けた顔には痣が…そして口からは血が流れていた

なおかつ自分の攻撃が一切効かないことへの

精神的ダメージも大きく…心身共にボロボロとなつていた

タ「ツ…くそおつ…俺じゃつ…こいつを倒すことは出来ないってことかよ!」

「フウアアアア…」

タ「…故郷を救うために村を出てつ…皆を守るために抗つたのにつ…こんなところでつ…終わっちゃうのかよ!!」

「ウオオオオオオーツ」

タ「くううっ!!」

“ バアアンバアアンツ ”

「グワアアアツ!!」

タ「……………えっ?」

セ「生身でスマツシユに立ち向かうなんて……………根性あるじゃないか少年ツ」

死を覚悟したタツミに襲い掛かろうとした怪物、

だがそれを銃らしき武器を持ったセントが

数発の弾丸を怪物に向け放ちつ直撃し小さな爆発が起きたことで

怪物は動きを止めつ視線をタツミからセントに移した

「ウウウウウ……………」

タ「…につ逃げろっ……………こいつは生身の人間が戦つて勝てる相手じゃない!」

セ「傷ついてる人間を置いて……………逃げれるわけねえだろ」

タ「えっ?」

セ「……………あとは俺に任せろ」

そう言うときセントは懐から黒に塗装されたアイテム

“ビルドドライバー”を取り出し腰に置く

するとドライバーから黄色のベルトが出現し、

“カチャツ”セントの腰に自動で巻き付き装着される

装着したのを確認したセントは

再度懐に手を伸ばしつそのから赤と青色をした

2本のボトルを取り出し両手で持つ

セ「…さあつ…実験を始めようか」

“シヤカシヤカシヤカツ”掛け声を発したセントはボトルを振り始める
するとセントを中心に夥しい数の数式が出現し、

その場にいたタツミと怪物を困惑させる

その後セントはボトルのキャップを正面に合わせ、

腰に装着しているビルドドライバーに2本のボトルを装填する

「ラビット／タンク・ベストマッチー」

2本のボトルを装填するとベルトから謎の電子音声が発せられ、

それと同時にセントはドライバーの右横にあるレバーを回す

するとセントを中心にベルトから透明のチューブが現れ

セントを囲むように前後に伸びて形を作っていく

そして形成されたチューブにボトルの同じ色の赤と青の液体が流れ込み
形成された形に色がつき赤と青のハーフボディーが前後に生成され：

「Are you ready?」

セ「…変身ツ!!」

“ガチャアーンツ”

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！Yeah!」

セントはファイティングポーズをとりながら掛け声を発し、

それに反応するように前後の赤と青のハーフボディーが

セントを挟むように組み合わさって一つの鎧を作り上げた

「ッ!？」

タ「なっ…なんだそれっ…赤と…青の…鎧!？」

ビ「俺の名は”仮面ライダービルド”…『創る』『形成する』…って意味のビルドだ。以後…お見知り置きを」

タ「仮面ライダー…ビルド？」

ビ「少年はそこにいろ…こいつは俺が倒すッ」

「フウツウオオオオツ」

“ガアアンツ”

ビ「ふっ…そりゃよつと!!」

“バアアンツ”

「グウツ」

“仮面ライダービルド” そう名乗ったセントは、襲い掛かってきた怪物のパンチを右腕で難なく防ぎ、戦車のローラーが付いている左足で回し蹴りを放つ

「グッ…ウウウツ」

ビ「まだまだ行くよッ」

“ギユイイイン…パアアンツ”

ビ「とおっ」

“バアアンツ”

ビ「はっはあはあはあっはああーっ」

“バアンバアンバアンツ…バアアンツ”

「又ウウツ」

ビ「もういつちよっ…はあああーっ」

“バアアアアーンツ”

「又アアアアアーンツ!!」

怯んだ怪物を叩き込むべく、

ビルドは右足にあるバネを圧縮させ一気に解放する

すると3メートルほど離れていた怪物の目の前に一瞬で移動し、

両手から目にもとまらぬ速さのパンチを怪物に向け連続して放つ

「グウツ…グオオオオオツ…」

タ「攻撃が効いてる!?俺が何度斬ってもダメージを負わなかったのに…」
ビ「驚くのは…ここからだッ」

“シャカシャカシャカツ” 驚くタツミをよそに
ビルドはドライバーに装填されていた2本のボトルを抜き、
左腰のホルダーについていた白と赤のボトルを手に持ち再び降り始める
そして先ほどと同じようにキヤップを正面に合わせ、
新たな2本のボトルをビルドドライバーに装填する

「ハリネズミ／消防車・ベストマッチー!」

再びドライバーから電子音が発せられ、
それと同時にビルドは右側のレバーを回し始める
すると今度は白と赤の液体が透明のチューブを通り
ビルドの前後に形を形成して出現する

「Are you ready?」

ビ「そこをすかさず……おりやあつ」

“ガアアアンツ”

「グウウツ!!」

ビ「ふっほおいはあいつ…はあああーっ」

“ガアアアアーンツ”

「又オオオオーっ!!」

形態を変化したビルドは左腕に装備されてる銃のような装備から

水流を放ちつ怪物の動きを止めたところで今度は炎を放射した

だが怪物はお構いなしにビルドに向かって突っ込む、

それに対しビルドは右拳から無数の棘を出現させ

その状態の拳を怪物に向かって放つ

棘が付いている分攻撃力が増加したため

先ほどのパンチ以上に怪物は怯み、

最後に重い一撃を喰らったとこで怪物は遂に地面に倒れた

「グウツ…又ウウウツ」

だがそれと同時に先ほどの数式とよく似た
グラフ型のエネルギー滑走路が立ち上がり怪物の体を挟み動きを封じる

「グウウツ…ヌウウウウツ」

「Ready go!」

“ドオオオオーンツ”

ビ「勝利の法則は決まった!」

「ボルテックフィニッシュユ!Yeah!」

ビ「はああああオーンツ!!」

“バアアアオーンツ”

「グウウウツ…ヌワアアアオーンツ!!」

“ドガアアアオーンツ”そして穴から行きよい良く現れた柱に乗ったビルドは
グラフ型のエネルギー滑走路を滑るように沿っていき、

滑走路の終わりにいる怪物に向け猛烈な蹴りを放つ

その蹴りを喰らった怪物は体のあちこちから火花を散らし、

断末魔とも言える叫び声をあげながら爆発し…最後は力尽き地面に倒れた

タ「……………すつすげえ……」

ビ「さてとつ……スマツシユの成分を採取つと」

“カチツ……シユウウウ……”

ビ「よしつ……これにて実験完了つと」

謎の怪物を圧倒し……それを撃破したビルドを見てタツミは驚嘆し、一方のビルドは透明なボトルを取り出すとそれを怪物に向ける
すると怪物の体は粒子状となりボトルの中に吸い込まれ、

吸い込み終えると細く透明だったボトルは

中心部が膨らみ棘の描かれた形へと変貌した

一方怪物は粒子状となったことで消滅したが……

何故か先ほどまで怪物がいた場所には

白い囚人服を連想させる服を着た女性が意識を失って倒れていた

タ「えつ……この人……城の中で見た人だ！」

ビ「城の中？」

タ「……俺はある任務を受けて帝都の城に侵入した、目的は言えないけど……城の中を
進んでいったらとある部屋にたどり着いたんだ。そこは……薬品や金属が焼けたような
臭いが充満してて……いるだけで気分が悪くなった」

ビ「典型的な実験室の光景だね」

タ「怪しいと思って調べてたら……白い防護服を着た集団が女の人を液体がはいった大
きな桶の中に入れて……そしたらっ」

ビ「怪物になった……か、常識を範疇を超えているな」

タ「本当なんだッ信じてくれ！」

ビ「……お前の話が本当なら……帝国は違法な人体実験を行ってるってことになる
な」

タ「……帝都が……国を治める奴らがこんな酷いことをしてたなんてっ……早くみんなに
このことを知らせないとっ」

“バンバンバンバンバンバンッ”

タ「おわあっ！」

? 「動くなッ不法侵入者!!」

突如としてタツミの周囲に銃弾が飛散する、

銃弾が飛んできた方に顔を向けると……

そこには数体のガーディアンが銃を構えていた

更にガーディアンたちの中心には

トンファアのような形をした銃をタツミに向ける

オレンジ色の髪に黒のリボンを結んだ少女が立っていた

タ「てっ帝都警備隊!!」

セ「ようやく見つけたぞ、許可なく城内に踏み込み……なおかつ城の中にまで侵入するとは……帝都警備隊に所属するこの“セリユー・ユビキタス”が悪なる行為を行ったお前に裁きを与えてやる！」

“タタタタタタツ……カチャツ”

タ「ツ……後ろにもガーディアンがつ」

セリユーと名乗る少女はその風貌からは想像もできない

憎しみに満ちた顔をしながら銃口をタツミに向け、

それが合図かのように後方にガーディアンが展開しツタツミに銃口を向ける

タ「くそおつ……今の俺は怪物との戦いでまともに動けないっ……この包囲を突破して逃げ切るのは不可能だ！」

セ「諦めろっお前に待っているのは……」正義“ というあの銃弾を受けっあの世にくという未来なのだからなあ！」

タ「ツ……万事休すかよ！」

セ「ふふふっ……総員射撃用意！」

“カチャツカチャツカチャツ”

タ「ツ!!」

セ「撃て……」

“バアンバアンバアンツ……ドオンドオンドオンツ”

セ「うわああっ……なッ何!？」

タ「……えっ……あれっ……俺……撃たれてない？」

ビ「死を覚悟するには……お前はまだ若すぎるでしょ」

タ「えっ!？」

銃撃音がしたもののタツミの体はどこも撃たれておらず、

逆にセリユーを護衛していた3体のガーディアンが

謎の銃弾の攻撃を受け爆散した

なんとタツミの窮地を救ったのは…

マシンビルダーに乗り銃をもった仮面ライダービルドだった

タ「ビルド……お前が…助けてくれたのか？」

ビ「話は後だッ!!」

“ シュウンッ ”

タ「うおおっ!!」

ビ「それかぶって後ろに乗れっ強硬突破するぞ!!」

タ「わっわかった!」

タツミはビルドから投げ渡されたヘルメットを頭にかぶり、

ビルドの支持のもとマシンビルダーの後部座席に座る

セ「はっ…総員一斉射撃ッ絶対に逃がすなああ!」

ビ「しっかり掴まってろよ!」

タ「おっおう!」

“ブオオオオオオオーーンッ”

ビ「行くぜえええーっ!!」

タツミはビルドの体に手を回してしつかり掴み、

それを確認したビルドはマシンビルダーを一気に走らせた

当然ながらそれを逃がさんとするセリユーは

ガーディアンたちに発砲の許可を出し、

自身もトンファー型の銃を使いガーディアンたちと共にビルドを撃つ

“ババババババツ…バアンバアンッ”

タ「うおおっ!!」

ビ「そんなもんにつ」

“バアンバアンバアンバアンッ”

ビ「当たるわけないでしょうがああーっ!!」

“ブオオオオオオオーーンッ”

セ「はっしまった!!」

ビルドはマシンビルダーを巧みに操り敵の銃弾を回避、
速力を維持したまま後方に向かって走っていき

ガーディアンたちの真上に向かってジャンプした

“ドオンツ” 無事に地面に着したマシンビルダーは

セリユーやガーディアンたちを無視し、

猛スピードでその場から走り去っていった

セ「……………くっそおおおお!!」

“バアアンツ”

セ「……………あの仮面野郎っ…次会ったときはっ…私の手で必ず殺してやる!」



“ギユイイインツ”

ビ「ふうう〜…ここまでくればもう大丈夫だろう」

タ「そっそうだな……」

セリユーら帝都警備隊を振り切ったビルドとタツミは

帝都の町を囲む城壁前に来ていた

後部座席に座っていたタツミはゆっくりと地面に足をつけ、

ビルドはドライバーからボトルを抜き取り元の姿へと戻る

セ「この道を真つすぐ行けば警備に見られずに帝都を出ることができる、そこからは君の好きにしなさいな」

タ「……どうして俺を助けてくれたんだ？こんな…見ず知らずの俺を」

セ「誰かを助けるのに理由があるのかい？」

タ「そっそれは……」

セ「……強いて言うなら……俺は君のことを信じただけさ」

タ「えっ？」

セ「君からは何かを成し遂げたいという強い信念を感じた……だから思つたんだっ君をあの場で死なせちや駄目だつて」

タ「……………」

セ「それにつあそこまで巻き込んでおいてほつたらかしになんてできねえよ、俺は命を絶対に見捨てないッ……そう心に誓つてるからさ」

タ「あんた……優しい人なんだな」

セ「セントツ」

タ「へえっ？」

セ「セントツ……それが俺の名前だツ1回で覚えろよ」

タ「……俺の名前はタツミだッよろしくなセント！」

セ「おうっ」

“ガシツ”お互いに改めて自己紹介をした後、

セントとタツミは固い握手を交わした

タ「この帝都にセントみたいなのがいたなんて…ちよつと嬉しくなったよ」

セ「…：なあ…：さつきから気になってるんだけど…：ズボンのチャック全開だよ」

「Yeah!」

タ「えつ…：嘘お！いつから!？」

セ「割と最初から♪」

タ「そんな前から!!なんで教えてくれなかったんだよ!？」

セ「どのタイミングで言うんだよッ自分で気づきなさいよバカ♪」

タ「ばっ誰がバカだよ誰が!」

セ「そんなじゃつ…：俺はここで失礼するよ…：元気でなツタツミ」

“ブオオオオオーンツ” そう伝えると

セントはマシビルダーを走らせ帝都の町へと消えていった

残ったタツミはセントに言われた道を走りながら、

セントのこと…：そして仮面ライダービルドのことを考えていた

タ「(仮面ライダービルドと…：それに変身するセントか…：またどこかで会えるよう

な気がするな)」

一方：セントまた先ほど別れたタツミのことを考えていた

セ「タツミか……城に潜入するなんて余程の理由がなきゃしないことだ、つまりタツミは革命軍の一員……もしくはナイトレイドと関りがある可能性がある……こりやつ忙しくなりそうだな！」

そんなことを考えながらマシンビルダーを走らせるセント、

そんなセントの様子を……帝都の城壁から見つめる謎の存在がいた

？「ふははははっ……さあ……戦争の始まりといこうかつセント！」

“ t o b e c o n t i n u e d ”



【次回予告】

ソ「仮面ライダー指名手配されてるじゃねえか！」

“ 仮面ライダーが指名手配！”

セ「ナイトレイドの皆さんにご挨拶行ってくるか」

タ「ふざけるなよっセントはそんな奴じゃない!!」

マ「昨日会ったばかりの奴のことを信用しろっという方が無理あると思うわ」

“ ぶっかかりあう2つの想い”

ビ「最悪だあっこんな美女が暗殺者なんて」

ア「お前は…私が葬る！」

《第2話・動き出すナイトレイド》

第2話・動き出すナイトレイド

《前回のあらすじ》

セ「天才物理学者であるこの俺セントがいる帝都の町では“スマツシユ”と呼ばれる異形の怪物が暴れ民を苦しめていた、そこに現れたのは…帰ってきた我らがヒーロー“仮面ライダー”!!」

ア「なあセント…この“あらすじ”というのはなんだ？ここに書いてあることを読めばいいのか？」

セ「ちよつとアカメツまだ入ってきちやだめだよ！」

ア「何故だ？」

セ「俺と君はまだ出会ってないからだよ！出会ってない人物があらすじ紹介に出てきたらまずいでしょ!？」

ア「なるほど…つまりこの回は私とセントの出会いが描かれた話になるんだな」

セ「…さり気なく恥ずかしいこと言うんじゃないよ／／／」

ア「??？」

セ「ああもう調子狂うつそんなこんなで第2話をどうぞ！」

「カフェ【nascita】」

セ「昨日採取した成分はゴリラだったのかあゝ…最っ高だあ！これでビルドにまた新しい力が手に入ったっ」

ソ「朝から随分テンション高いなセント」

セ「そりやそうでしょうっ新しいボトルは手に入ったし…例の怪物を生み出してる大本の手がかりも掴めたし…昨日の収穫は大きいよマスターツ」

ソ「そうかそうか…んじやそんなハイテンションなセントくんは…報告だ」

セ「へえっ？」

“バサッ”

ソ「見ろよッ仮面ライダー指名手配されてるじゃねえか！」

タツミと出会い謎の怪物と戦った次の日、

セントは *nascita* にてあの時怪物から採取した

成分から生まれたゴリラロボットを嬉しそうに振っていた

だがそんなセントにソウイチは一枚の紙を見せた、

その紙には仮面ライダービルドの顔が：

雑なイラストではあったが写っており、

更に下の方には“WANTED”と大きく書かれていた

そう：セントが変身するビルドが

犯罪者として“指名手配書”に載っていたのである

セ「ああ、あつ遂に俺も指名手配犯かあ」

ソ「たく何してんだよお前はツ正義の味方名乗ってるくせに悪人扱いされちまって：

これじゃ本末転倒だろう！」

セ「別に気にしてないよ：だって俺悪いことなんてしてないし」

ソ「そういう問題じゃねえんだよ！たくつ：昨日お前が話していたタツミとかいう少

年の逃亡を手助けなんかしてなければこんなことになつてなかつたんじゃないやねえか？」

セ「しょうがないだろつあの場にタツミを残していたら：奴は間違いなく撃ち殺され

ていた。それにつゝタツミがもたらしてくれた情報のおかげで奴らの発生源がわかったんだよ」

ソ「奴らの発生源？」

セ「最近帝都に出没してゐる怪物”スマツシユ”の発生源だよ！」

“スマツシユ”それは昨日セントがビルドとなつて倒した異形の怪物の総称、帝国全域には“危険種”と呼ばれる凶暴な生物はいくつかいるが

スマツシユはこれまで確認されてゐるどの生物にも該当してゐない特徴としては生物らしきがない機械的なフォルムをしており

出現すると無差別に人間を襲つたり周囲を手当たり次第に破壊するなど、その行動に意味があるかは不明だが、

正体がわかつてゐないため現在の帝都においてもっとも危険視されている生命体なのである

ソ「スマツシユの発生源？」

セ「そうつタツミが昨日こんなことを言つてたんだ……」

タ『城の中を進んでいったらとある部屋にたどり着いたんだ。そこは……薬品や金属が

焼けたような臭いが充満してて、怪しいと思つて調べてたら…白い防護服を着た集団が女の人を液体がはいった大きな桶の中に入れて…：そしたらっ」

ソ「被験者の女性がスマツシユになったと…」

セ「タツミの話したことが本当なら帝国が裏でスマツシユを生み出し町に放つてることになる、一体何の目的で…そもそも人間をスマツシユにする技術をどこで得たのか…」

ソ「噂の“帝具”とやらの中に人間をスマツシユにすることができる力を持った道具があつたんじゃねえのか？」

“帝具”それはいまから千年前…

帝国を築いた始皇帝の命により造られた48の超兵器のこと

体力・精神力を著しく消耗する危険性を持つが

その力は一般に広まっている武器の性能を凌駕しており、

帝具の所有者同士が戦闘を行えば

必ずどちらかが死ぬと言われているほどである

セ「だとしたらスマツシユのことを知っている人間がどこかにいてもおかしくない。

だがスマツシユの扱いは“未確認危険種”というカテゴリー……つまりその存在を最近まで誰も知らなかったツということだ」

ソ「おおつ言われてみればそうだな！」

セ「ガーディアンが存在だつてそうだ。帝具が生み出されても帝国は人間の兵士を約千年ものあいだ運用してきた……だがガーディアンが本格的に配備され運用を始めたのは約10ヶ月ほど前のこと……完全な独立歩行の機械兵士を作つたにしては期間があまりにも短すぎるつ文明開化なんて言葉じゃ済まされない技術革新の早さだ」

ソ「それとスマツシユの出現に因果関係があるのか？」

セ「思い返してみなよ、1年前……マスターに拾われた俺は手元にあつたビルドドライブとボトルを使い色んな検証実験を行つた。そしてスマツシユが帝都の町に出現するようになったのはそれから2ヶ月後のこと……つまりスマツシユの出現し始めた時期と帝国がガーディアンを正式採用した時期がピッタリ重なつてるんだよ」

ソ「なるほどおねえ……つまりどういふこと？」

セ「……ガーディアンの生産つそして人間をスマツシユに変える人体実験、この双方の技術を帝国に伝えた”第三者”がいるつてことだよ」

一連の出来事や事件についての答えを導き出したセント、

それを聞いたソウイチは“そういうことか!”と言わんばかりの顔で右手の平の上に左手の拳を“ポンッ”と置くのだった

ソ「そこまでの答えを導き出せるなんて…すげえじゃねえかセント!」

セ「凄いでしょッ最高でしょッ天才でしょ俺♪」

ソ「でつ…ここから先はどう動くんだ?」

セ「悩みの種はそこなのよ。帝国が“クロ”なのは100%間違いないけど、問題はその事実をどうやって暴くかなんだよね…証拠も無しに提示したところでもみ消されるのがオチだろうし」

ソ「思い切ってビルドに変身して城に突撃するつてのはどうだ!」

セ「…バカだねえマスターは。そんなことしたところで無駄だよ、城の中には何百体とガーディアンがいるんだよっ相手にしていったら絶対ジリ貧になつていくだろうし…何よりそこまでの大きな行動を俺1人でやるにはさすがに無理がある」

ソ「冗談だよ冗談♪さすがの俺もそんなバカな事を本気で提案しねえつて!」

セ「その割はさつきすげえドヤ顔で言つてたよね」

ソ「はははつ…けどよセントっさすがにこのまま何もせずについていうわけにいかねえんじやねえか?」

セ「……………っ」

ソ「確かにお前が扱うビルドは最強だ、だがお前が言ったように人間1人で出来ることには限界がある。そんな時に人間はどうするか……そうっ互いに手を取り合っつ同じ目標に向かって共に歩んでいくんだ！」

セ「……ごめんマスター……話の本筋がわからないんだけど」

ソ「わからないかっお前が今すべきことは……仲間を作ることだよ！」

セ「なっ仲間!？」

唐突なソウイチの発言に驚くセント、

仲間を作る……確かに同じ志を持つ仲間がいるなら

ビルドとしての活動を大きく広げられる

何より帝都に住む市民にとってビルドの存在は

都市伝説のようなあやふやなものでしかなく、

その状態のまま犯罪者扱いになってしまったので

イメージは決して良くはない

ビルドのイメージアップを狙いつつ、

ビルドが正義のために戦っているということ

多くの人に知ってもらうためにも…

それを支えてくれる存在は自然と必要となってくる

セ「さっさすがに今の状況で仲間作りは難しいんじゃないかな？」

ソ「だったらいつそ革命軍…いやっナイトレイドに入ってみたらどうだ!？」

セ「はあああ!!なんでそうなってくるわけっ!？」

ソ「だってお前もナイトレイドの連中もこの国を変えたいっていう想いは同じじゃねえか」

セ「行動の概念がまるで違うから!!ナイトレイドは大義名分こそこの国を変えるために動いている組織だけど結局のところただの“殺し屋”だよ!」

ソ「だから?」

セ「だからって…言わなくてもわかるでしょ!?!俺とナイトレイドじゃ考え方が違うってことくらい!」

ソ「だから仲間になることはできないってか…そんなのはお前の一方的な意見でしかないんじゃないか?」

セ「うっ…:…:…:それはあ…:」

ソ「一回話し合ってみても良いと俺は思うけどなあ…:仮に仲間になれなくてもっ何

かを得られる切っ掛けにはなるだろうし」

セ「……………」

ソ「セントつ今後のお前のためにも…そしてこの帝都に住む大勢の人々のためにもつ…まずは勇気をもって一步を踏み出すんだよ！」

ソウイチの言葉を聞き顔を下に向けるセント、

しばらくすると…諦めたかのように一息ついて

ポケットから棒付きキャンデーを取り出し口に咥える

セ「…んじやつナイトレイドの皆さんにご挨拶行つてくるか」

ソ「そうそうその意気だ…：…てっお前ナイトレイドの居場所わかるの!？」

セ「昨日会ったタツミ…城の中に潜入したって話を聞いた時点であいつは革命軍かナイトレイドに属しているんじゃないかって思ったんだ、だから昨日握手した時にボトルの成分をタツミに付着させておいたんだ」

ソ「まあ…手際が良いことで」

セ「このビルドフォンの探知機システムを起動させればっ…」

“ピピッ…：…ピピピッピピピッ”

セ「ピンゴツタツミの現在位置は……帝都から北に10キロ離れた地点にいたいだね」

ソ「北の10キロ先っていえば……危険種がうようよいる文字通り危険地帯な場所だな」

セ「まあ暗殺集団のアジトだからね、そういう場所じゃないと安心して活動できないでしょ」

そういうながらセントは自身お手製の冷蔵庫の中から

これまた自家製の棒付きキャンデーを10本ほど携帯バックに入れ、

装備品一式を手に持ちお気に入り黒コートに身を纏う

セ「んじやつちよつくら出掛けてくるねマスター」

ソ「おうっ気をつけてなセント！」

セントはnascitaを出発して

まずは北の出入り口がある方向に向かって走り出す

マシンビルダーを使えば良いのでは？と思う方もいるだろう

だがあれにビルドが乗っている姿を帝都警備隊に見られた以上、町中で使うのはリスクが大きすぎる

なので取り合えずは自身の足で北の門まで向かい

そこからは見張りがいないエリアまで移動した後、

マシンビルダーを使いナイトレイドのアジトに向かうこととした

そして走ること20分後：

セントは北の出入り口となっている門の前に到着し、

一応警戒しながら門を通り過ぎ広大な大地が広がる外の世界に飛び出した

そこからは人々に紛れ込みながら歩き進め、

帝都からある程度離れた地点で道を外れ森の茂みの中に入る

セ「ここまでくればもう大丈夫だろ……したらっこいつの出番だ♪」

「ビルドチェンジ」

“カチャカチャツ……ブオオオンツ”

セ「さあてとっ……ナイトレイドのアジトに向かってっレッツゴオオーーツ!!」

“ブオオオオーーンツセントはマシンビルダーのエンジンを起動させ

正面ディスプレイが指示するルートを確認した後、エンジンを全開にして猛スピードで走り去っていったのであった

タ「痛つ…顔の傷が痛むなあ」

とある場所にて…セントに助けられた少年タツミは

洗い場にて食事に使われたと思われる皿を丁寧に洗っていた

その際に昨日のスマツシュとの戦闘で負った顔の傷が痛んだよう、皿洗いの際つ手に付いた水で傷を負った部分を冷やすようになじませる

タ「仮面ライダービルドかあ…あんな力が俺にもあつたらなあ」

ア「タツミ…一人で何をブツブツ喋ってるんだ？」

タ「うおおっビックリしたあ…」アカメ“いたのかよ”

ア「最初からここにいたぞ」

タ「えっマジで!？」

ア「注意力が散漫だ、そんなことでは戦いの場で生き残る確率が下がるから気をつけ
た方がよい」

タ「(ううっド正論過ぎて何も言い返せねえ!) そっそうだな…気をつけるよ」

ア「うむっ正直なのは良いことだ」

タ「(お前は俺の母親か!!)」

ア「そうだとツミっボスから招集がかかった、昨日お前が行った任務の報告をしてほ
しいそうだ」

タ「わっ分かったすぐ行く!!」

謎の少女“アカメ”からボスなる人物の招集を受けたタツミは

近くに置いてあったタオルで手をふき取ると

愛用の剣を持ってアカメの後に続いた

しばらく歩き進めると大きめの扉が目の前に入り、

“ガチャツギギギイ…”その扉を開け中に入ると…

大きな部屋の中に8人の男女がタツミとアカメを出迎えた

マ「遅かったじゃないのタツミッ」

タ「そんなに待たせてないだろ」

マ「口答えするなあっ」

タ「はああく……」マイン“さあ……前から思ったけどなんでそんな高圧的なの?”

マ「下つ端のタツミにはこの接し方がお似合いだからよ!」

タ「そんな理由でつ理不尽すぎるだろ!?!」

チエ「まあまあ抑えてツマインはタツミにちよつと気があるから恥ずかしくて強く当たつてただけなんだよ!」

ラ「なぬ!お前ら……いつの間にそんな関係になつたんだ!?!」

タ「なあつたんでそうなるんだよ!」チエルシー“に”ラバック“変なこと言うの止めろよな!”

マ「そつそうよ!だつ誰がこんな田舎者のことなん……て／／／／」

シユ「言動に矛盾が生じてますよマイン」

マ「うぐつ……」シェーレ“なんでそういうとこだけ鋭く見抜くのよ!”

シユ「???’」

ブ「はっはっはっはっ……2人ともそんな恥ずかしがることないじゃないか!革命軍の中には同じ任務にあつたのを切つ掛けに付き合い始めたカップルだっているくらいなんだから!!」

ス「新たな恋の始まりか…今夜は赤飯だな」

ア「私は大盛で頼むッ」

レ「ついでに良いお酒も用意してねッ!!」

タ「どんだけ食うつもりだよっつか」ブラート”の兄貴まで何言い始めるんだよ!」

マ”スーさん（スサノオ）”もブラートの言葉に乗っからなくていいの!」

タ・マ「あと”レオーネ”（姐さん）はどさくさに紛れて酒飲もうとするな!」

レ「おおっ息びつたし…」

チエ「良いねえ良いねえ…：本当にお似合いのカップルだよ2人とも♪」

タ「…：キリがねえなこれ／＼／＼」

マ「なっ慣れるのよ…：こんなの…：日常茶飯事だから／＼／＼」

ナ「まあ仲が良いことは何よりだが…：お前たち本来の目的を忘れてないか?」

一同「ギクツ!!」

タ「おっ俺は忘れてないよ」ナジエンダ”さん!」

ナ「ならいいんだ、それでは報告会といこう…：タツミっ昨日の任務で得た情報を皆に

話してくれ」

タ「わっわかった…：…」

そう…実はタツミはいま帝都の町で名を馳せている

革命軍の暗殺集団“ナイトレイド”に所属しているメンバーなのだ

そしてタツミの周りにいる個性豊かな9人のメンバーは

ナイトレイドとして日夜帝国の闇と戦う腕利きの暗殺屋なのである

そんな組織に何故タツミが所属してるか…その理由を話すのはまたの機会にし、

取り合えずタツミは昨日の任務で得た情報を他のメンバーたちに説明する

城の内部にあつた謎の部屋に人を異形の怪物へと変貌させる人体実験、

そしてその異形の怪物を倒した戦士・仮面ライダービルド、

自身の逃亡の手助けをしてくれたセントのことを

タ「……とまあ…これが昨日観た内容なんだけど」

ナ「なるほどな、やはり例の怪物を生み出していたのは帝国だったのか…」

タ「その怪物の名前なんだけど…総称だとは思うけどスマツシュっていう名前みたいなんだ」

ナ「スマツシュ…聞いたことない名前だな」

ブ「俺もそれなりに危険種は狩ってきたが…スマツシュという名の危険種は初めて聞くな」

ラ「アカメちゃんとかどうっ聞いたことある？」

ア「初耳だ」

チエ「んでっ…その実験室みたいな部屋でタツミは女の人がスマツシユという怪物になるのを目撃したとっ」

タ「ああっ…何が起きたかわからなくてっ…凄く焦ったよ」

マ「でっ…その後は思わず声を出した結果ガーディアンに発見され、それ以外のことは知ることができずに撤退したと」

タ「うっうん…」

マ「たくっ肝心な時になにドジなことしてんのよ！」

タ「うぐっ!!」

ブ「そう言うなよマイン、まだナイトレイドに入って日が浅いタツミがっここまでの情報を1人で得られたことは評価に値すると俺は思うぞ」

マ「……………っ」

タ「ごめんっ…この2か月近くっ皆に色々と鍛えてもらったのにこのざままで……………自分が情けないよ」

“ コツンツ ”

タ「痛っ」

マ「べつ別に攻めてるわけじゃなの！」

タ「??？」

マ「そつそのお……ぶつ無事に帰ってこれてそれなりに結果残したんだから……もつと自信持ちなさいって言いたかったの！」

タ「マイン……ええつと……ありがとな／／／／」

マ「ふつふん／／／／」

シユ「素直じゃないですねマインは」

マ「うっ煩いわね！」

ナ「話を戻すぞ、そしてタツミは排水溝を通じて外に逃げるのができたが追ってきたスマツシユに遭遇し戦闘……そこでお前は謎の仮面の戦士・仮面ライダービルドに出会いつそのビルドはお前の代わりにスマツシユと戦いこれを撃破、その後は帝都警備隊に見つかり射殺寸前まで追い詰められたお前の逃亡の手助けしたと」

タ「そつそうなんだ！その仮面ライダービルドが凄く強くて俺の剣の攻撃がビクともしなかったスマツシユを圧倒して……最後は変なキックをしてスマツシユを倒したんだ！」

ラ「あの化け物を倒した!?しかも肉弾戦で!?信じられねえな……俺たちも何度かそのスマツシユと遭遇して戦ったことがあるけど帝具を使った攻撃をもつしなかった

んだぜ」

ア「私も葬ろうとして村雨で斬ったが…何事もなかったかのように襲い掛かってきた」

マ「私も同じくよっパンプキンから放ったエネルギー弾を正面から喰らったのに無傷だったのよ！」

シエ「私もエクスタスで切断しようとしたんですが…装甲が固すぎて真つ二つにできませんでした」

タ「そっそんなヤバい化け物に勝つちまうとか…もしかしてセントって凄いなのか!？」

ス「そのセントという少年がビルドとやらの鎧を身に纏って戦ったのか？」

タ「ああ…正義感が強くて…出会ったばかりの俺の話を信じてくれて…同い年くらいなのにすげえカッコよく思えた」

ナ「セントに仮面ライダービルド…か、無視しておくには惜しい存在だな」

ナイトレイドのボス・ナジエンダは煙草を吸いながら考える、

帝具使いですら倒すことができなかつたスマツシユと

互角に戦えそれを撃破できる仮面ライダービルドと

それを扱う謎の少年セントのことを…

そしてナジエンダは思った、

現状帝国側からは自分たちと同じようにお尋ね者扱いで

どの勢力にも属していないセントをナイトレイドの仲間に出れば

自分たちが目指す革命に一步近づけるのではないかと

ナ「……そのセントという少年の場所はわからないのか？」

タ「えっ…ああ…さすがにそこまでは」

マ「そいつの居場所聞いてどうするの…あつもしかして!!」

ナ「その〴〵もしかして〴〵だ、セント…いや仮面ライダービルドとやらを仲間に出れば
ばっスマッシュに対しての対抗策もできなかつ我々が目指す革命に大きく前進する
ことができるはずだ」

ラ「なるほどおっさすがナジエンダさん!!そこまで先のことをお考えになっていると
は!!」

チエ「茶化さないでラバツ」

マ「けどさ…信用できるのそいつ?タツミを助けたのは単なる気まぐれかもしれない
し、何よりそいつが本当に単独で動いているか確認できる証拠もないじゃない」

ス「確かに…裏で帝国に繋がり革命軍を内部から壊そうとしている可能性も捨てきれないな。」

チエ「それ以前にほとんど知られていない未確認危険種扱いなスマツシユを倒せる力をどこで手に入れたのか…：考えてみたらちよつと怪しくない？」

ナ「……………」

チエ「ボス…ここは慎重に行動すべきだと思うよ。最悪の場合…：そのセントつてやつを始末しなきゃいけないし」

タ「ちよつちよつと待つてくれよ!!それつてどういう意味だよ…：実はセントは悪者でつ俺たちナイトレイドを殺そうとしてるつて言いたいのかよ!!」

チエ「まあ…そんなところかな」

タ「ふざけるなよつセントはそんな奴じゃない!!」

マ「なんでそう言い切れるの？」

タ「そつそれは…………」

マ「昨日会つたばかりの奴のことを信用しろつていう方が無理あると思うわ、このご時世…：人は裏で何を考えてるかわからないつそれはタツミにだつてわかるでしょ!!」

タ「ツ…」

マ「安易に信じてそいつがもし帝国の回し者だつたらどうなると思う!!?ここまで私た

ちがやってきたこと全部が無駄になるのよっこの革命のために散っていった大勢の人たちの命が全部無駄になっちゃうのよっタツミはそれでいいわけ!？」

タ「……………うっ」

ナ「マイン落ち着け、何もすぐにセントを仲間にしようと云ってるんじゃない…まずはセントの言動と真意を見定めっその上で仲間に招くか始末するか判断を下す」

マ「……………っ」

ナ「お前が不安がるのもわかるが…タツミのセントを信じてやりたいという気持ちもわかってやれ。」

マ「……………わかってるつもりよ」

ナ「……………タツミっそういうことでまずはセントと接触を試みる…異論はないな？」

タ「……………ああっ」

ナ「よしっでは早速セントの居場所を調べることに」

“キイイーン…”

ラ「ツ…ナジエンダさん侵入者だ!!」

ア「ツ!!」

ナ「人数と場所は？」

ラ「南西2キロの地点で反応があつたっ人数は…1人しか確認できてない」

ブ「一人だつて！」

ナ「そういうことは異民族や傭兵の可能性はないな……考えられるとするなら帝国の人間か……もしくは……」

一同「もしくは？」

ナ「……とにかく緊急出動だつチエルシーとスサノオはこの場で待機つ残りは現場に迎え!!アカメつ現場の指揮は頼んだぞ」

ア「わかった」

ナ「いいかつまずは侵入者が何者かを見極めるんだ、見逃すか始末するかはその後だ……いいな!!」

一同「了解ッ」

ナジェンダの命令を受けたアカメら7人は

侵入者がいると思われる地点に向かうべくアジトを後にした

タツミはいまだ思うことが色々あつたが、

今は任務に集中すべく余計な考えは一旦捨てアカメたちと共に走り出した

セ「タツミの反応があつた地点まで残り2キロ…大分近づいてきたな」

ナイトレイドが動き出した頃、

セントはマシンビルダーで山道を走り進んでいた

そしてタツミに付着させたボトルの成分の反応があつた

地点まであと2キロというところまで近づいていた

セ「さつき薄つすら見えた糸…おそらくナイトレイドの帝具使いが仕掛けたモノ、ということはこちらの動きは向こうにバレてるはずだ」さすがは暗殺集団ツ抜かりはないってことか!!」

そう言いながらセントはマシンビルダーを走らせる、

しばらくすると木々が生い茂っていない開けた場所に飛び出し

そこでセントは「キュイイインツ」マシンビルダーを一時停止させる

セ「……………」

“ ヒユウウウウ……シユンツ ”

セ「ツ……お出迎えの準備万全ってわけか」

セントはマシビルダーから降り周囲を見渡す、

辺りは人気がない静かで美しい森……

だがセントは何かを感じ取ったようで

何も言わずに懐からビルドドライバーを取り出し腰に装着する

“ カチャツ ”

セ「……んじやついきますか」

「ラビット／タンク・ベストマッチ！」

「Are you ready?」

セ「変身ツ!!」

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！Yeah！」

セントは昨日も使用したラビットと戦車のボトルを

ビルドドライバーに装填し右サイドのレバーを回す

そして前後に形成されたハーフボディは

掛け声と共に中心にいるセントに装着され、

仮面ライダービルド・ラビットタンクフォームに変身した

それと同時にドライバーから透明のチューブが出現し、

うねる様な動きをしながら空中で形を形成していく

そしてそのチューブはビルド専用の武器“ドリルクラッシュャー”となり、

ビルドはそれをガンモードにしっ右手で持ち構える

ビ「……………」

“ シュツ…シュツ…”

ビ「ツ…そこだあっ!!」

“ バアアーンツ” 何かの気配を感じ取ったのか、

ビルドは目の前の茂みに向かって光弾を放つ

光弾が着弾した衝撃で周囲の草が飛び散る、

そして次の瞬間” シュウウンッ” 光弾を放った茂みから
何かが飛び出しビルドの目の前へと飛んできた

レ「お見通しってかい！」

ビ「ビンゴッはあああーっ」

“ ガギイインッ” 飛び出してきたナイトレイドの1人である
レオーネは右拳をビルドに向かって放ち、

ビルドは瞬時にドリルクラツシヤーをブレードモードにし
レオーネの右拳から放たれたパンチを受け止める

レ「あんたが仮面ライダービルドって奴か!？」

ビ「ナイトレイドに知ってもらえてるなんて… 光栄だねっ」
“ ギイイインッ”

レ「うおっ…」

ビ「噂の暗殺集団のカツ見せてもらおうよ！」

ビルドはドリルクラツシャーの刃を回転させ

回転で生じた摩擦力でレオーネの拳をはじき返した
そして間髪入れずにドリルクラツシャーを構え、

レオーネに向かって斬りかかろうとした：その時ツ

“ シュルルル：シュルルル： ”

ビ「うおっなんだこれ：糸!？」

突如としてビルドの周囲に無数の糸が現れ、

その糸はビルドの左腕に巻きついていき

レオーネに斬りかかろうとしたビルドの動きを止めた

ビ「くうっ：なんだこれっ外れないんですけど！」

ラ「よしっ動きを封じた：突っ込めブラート!!」

“ シュウウンツ ”

ブ「うおおおーっ!!」

ビ「ちよっマジかよ！」

両手で糸を巧みに操りビルドの動きを封じたラバック、そのラバックの掛け声と共に鎧を身に纏ったブラートが巨大な槍を構えビルドに向かって突撃した

ビ「ちいっ…はあああっ」

“ シユウウンツ ”

ブ「なあっ」

ビ「よおっと!!」

“ ギイイインツ ”

ラ「ツ…糸を斬りやがった！」

だがビルドは間一髪でブラートの攻撃をジャンプで回避し、空中でドリルクラッシュャーを使い左腕に巻き付いていた糸を斬る

ビ「ふううっ…危ない危ないっ」

“ バアアンバアアンバアンツ ”

ビ「ツ…ほおっ」

地面に着地し一安心したのも束の間…

ビルドに向かって数発の光弾が飛んできた

だがビルドはドリルクラッシュャーで

その光弾を弾きつなんとか直撃を回避した

その様子を少し離れた岩場から

巨大な銃を構えながら見たマインは苦い顔をしていた

マ「ちいつ…中々良い反射神経してるじゃない」

ビ「スナイパーまで潜んでるのかよっ」

レ「まっ熱烈大歓迎っことで♪」

ブ「さっきの攻撃を回避するとは…やるじゃないかビルドッ」

ラ「ほめてる場合かよっ」

レオーネ・マイン・ブラート・ラバック…

ナイトレイドの中核を担う主要メンバーが

いつの間にかビルドを取り囲むように集結していた
普通の人間がこの状況に出くわしたらまず生きて帰ることは出来ない
そこまで危機的な状況なのにビルドはというと……

ビ「ナイトレイドの主要メンバーがこんなにいるなんて…最っ高じゃねえか！」

レ「はえ？」

ラ「お前…この状況で何言ってるんだよ」

“バサツ”

タ「はあ…はあ…セントツ」

ビ「んっおおく誰かと思えばタツミじゃん！昨日ぶりだね」

タ「取り囲まれてるのにすげえ余裕だな…：…てそうじゃなくてっみんな攻撃をやめてくれ！」

レ・ブ・ラ「…なんで？」

タ「さつきも言っただろっそいつは悪い奴じゃ」

“バアーンツ”

タ「うわあああっ！！」

タツミが他のナイトレイドのメンバーを説得しようとした時、

ビルドはガンモードにしたドリルクラッシュャーを

タツミに向けツそこから1発の光弾を放った

タ「あつぶねえっ…おいセントっいきなりなにすんだよ!？」

ビ「お前が俺の邪魔するからだろ」

タ「邪魔?!俺はお前が悪い奴じゃないってみんなに説明しよう」とっ」

ビ「余計なお世話だよ、それに帝具使いとの本格的な戦闘はまだしたことがなかったからな…こんなにワクワクする実験はないっしょ!だから邪魔するなっもし次間に入り込んだら容赦なく眉間に撃ち込むからな!」

タ「えええ…」

※報われない男・タツミでありました♪

ビ「さてっ気を取り直して…：…続きといこうかナイトレイドッ」

レ「強気だね少年っ私そういう子嫌いじゃないよ♪」

ブ「だが…状況は圧倒的にお前が不利だ」

ラ「スナイパーも含めればこっちは帝具使いが4人いるんだ…どんなに足掻いたところでお前の負けは見えてるぜ」

ビ「その状況をひっくり返せるのがビルドの強みなんだよっ」

そういうとビルドはラビットと戦車のボトルを抜き取り、
新たなに黄色と青緑色のボトルを取り出しドライバーに装填する

「ライオン／掃除機・ベストマッチ！」

ビ「さあ…実験を始めようか!!」

「Are you ready?」

ビ「ビルドアップ！」

「たてがみサイクロン！ライオンクリーナー！Yeah！」

先ほどの赤青のボディが変わり、

今度は黄色と青緑色の鎧へとその姿を変えた

これがライオンと掃除機のボトルを使ったベストマッチ：

“ライオンクリーナー”フォームである

ラ「なあっ姿が変わった!？」

タ「昨日見たやつと違う…どうなってんだ!？」

レ「ふっ…姿が変わったところで私の速さにはついてこれないっしょ!」

そう言うのとレオーネは目にも止まらぬ速さでビルドに接近し、大きく振りかぶった右腕から強力なパンチを放つ

ビ「それは…どうかな!」

“ブオオオオオーツ”

レ「くわあっ…なっなにこれっ…吸い込まれるうう!」

ビ「そのままあゝ…ポイっ♪」

“ブオオンツ…ドオオンツ”

レ「痛っ!」

そんなレオーネに対しビルドは左腕の掃除機を使い

強力な吸引力を発生させレオーネの動きを封じ、

そのままレオーネを近くの木に向かって投げ飛ばした

タ「姐さん！」

ブ「ラバックツ」

ラ「言われるまでもないぜ！」

マ「援護は射撃の天才マイン様に任せなさい！」

“バアアンバアアンツ”

ビ「ふつ…見え見えだつつうの!!」

“キユイイイーンツ”

マ「うっ嘘…」

タ「マインが放った光弾を吸い込んだ!？」

ビ「お返ししまあす!!」

“バアアンバアアンツ”

ブ「ぐううっ!!」

ラ「どわああっ!!」

ブラートとラバックはそれぞれの武器を構えビルドに攻め込み、

それと同時にマインは巨大な銃から再度数発の光弾をビルドに向け放った

一方のビルドは再度左腕の掃除機を使いマインが放った光弾を吸収、

そしてその光弾を迫ってきたブライトとラバックに向け放った
なんとか防いだ2人だったがこれにより動きが止まってしまい、
その間にビルドはレオーネの方に向きドライバーのレバーを回し始める

「Ready go!」

ビ「喰らつときな…はああああーっ」

「ボルテックフィニッシュ！Yeah!」

“ガオオオオオンツ…ドガアアアンツ”

レ「ぎやああふっ!!」

必殺技を発動させたビルドは右腕からライオン型のエネルギー波をレオーネに放つ、
レオーネは直撃の寸前でガードをしたものの勢いを殺すことは出来ず
大きく吹き飛ばされそのまま地面に倒れてしまう

マ「そんなつ…レオーネがやられるなんて!!」

ブ「(っ)いつつ…思った以上にできるな」

ビ「ふっふっふっ…驚くのはここからだよっ」

レオーネを倒したビルドはライオンと掃除機のボトルを抜き取り、
今度は茶色と水色のボトルを取り出し慣れた手つきで振り、
振り終えた後つボトルのキャップを正面に合わせドライバーに装填する

「ゴリラ／ダイヤモンド・ベストマッチ！」

「Are you ready?」

ビ「ビルドアツプ！」

“ガチャアンツ”

「輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！Yeah！」

三度ビルドの色が変わりつ今度は茶色と水色の鎧へと変化した、
これがゴリラとダイヤモンドのボトルを使ったベストマッチ：
“ゴリラモンド”フォームである

ラ「んなつ…また変わりやがった！」

タ「どんだけ姿変えられるんだよお前は!？」

ビ「さあく…どんだけ変えられるんだろうねえ♪」

ブ「っ…これ以上奴のペースに持つていかれたらマズイツ一気に仕留めるぞ!!」
ラ「おっおう!」

マ「今度こそっ…その体に風穴開けてやるんだからあああ!」

“バアアアーンツ” マインはブラートとラバックの動きに合わせ、

先ほど放ったものは比喩物にならない程の強力な光弾をビルドに向け放つ

それを合図にビルドに向け再度攻め込むブラートとラバック、

だがビルドは焦らず冷静に状況を分析し…ナイトレイドを迎えうった

ビ「…ふうっ」

“ピイイン…バアアアアーンツ”

マ「なあっ…何よあれ?」

タ「たっ弾が…ダイヤになったああ!?!」

ビ「…勝利の法則は決まった!」

なんとビルドはマインが放った光弾を無数のダイヤモンドへと変換させ、

そして飛び散ったダイヤはそのままマインが立っている岩場の元へ飛んでいき、断面から地中までセリ矢のように入り込み、そこからヒビが入り全体に広がり崖崩れを起こした

マ「そつそんなのつてつ…うわあああつ!!」

“ゴロゴロツ…バタンツ”

マ「痛つ……なツなんて奴なのよおおつ」

タ「マインツ大丈夫か!？」

マ「なつなんとかね……それにしてもあんたがいったビルドツ…とんでもない化け物だわ」

タ「ああつ…まさか全滅させられるなんて…」

マ「私がいた場所にまで仕掛けてくるなんて…予想外過ぎるわよツ」

ビ「君の位置は先ほど放たれた光弾の弾道・地形・大気中の水分量と風圧を計算して見抜いたよ、確かに良い射撃の腕をしてるけど調子に乗って何発も撃つたことが仇になったね」

マ「…そのセリフつそのままお返しするわ!!」

ビ「へえっ?」

マ「シエーレッツ今がチャンスよ！」

“ シュウウンツ ” マインの言葉を合図に

ビルドの背後の草むらから巨大な鋏を持った

ナイトレイドのシエーレが現れツビルドに向かって突撃する

そしてその巨大な鋏を広げ、

ビルドのボディに向け刃を放った

シエーレ「……すみませんっ」

ビー「(背後にもう一人ッこのままじゃやられる……) わけないだろっ!!」

“ ガギイイイインツ ”

シエーレ「……へえっ？」

シエーレが驚くのも無理はない、

彼女の持った巨大な鋏の刃は……ビルドが左腕から生み出した

巨大なダイヤの盾によって防がれてしまったのだ

シエ「そっそんなあ……」

ビ「さすがの帝具もダイヤの硬さの前には無力っ……てね♪」

“ピヨイツ”

シエ「ああっ……眼鏡があ……眼鏡っ眼鏡っ」

唾然としてるシエーレの眼鏡をビルドは左手で軽くはじく、
するとシエーレの目の前がぼやけて何も見えなくなってしまう
シエーレは戦闘を放棄し眼鏡の搜索を始めた

マ「なっ……何してんのよシエーレエエ！」

タ「なんというダサイ負け方っ……」

ビ「さあてっ……これで帝具使いは全滅っ勝負は俺の勝ちということぞ」

“ザザザザザザーツ”

ビ「ツ!!（まだっ……まだ何がいるっ……とんでもない殺気を放ってる何かぞ）」

“シユウウウンツ”

ビ「ツ……右かつ!!」

ア「……お前は……私が葬る！」

ビ「ちいつさせるかよお！」

“ガギイイインツ” 高速移動からの勢いをそのままに仲間を救うべく現れたアカメは鞘から刀を引き抜き、

ビルドに向けその刃を振り下ろす

だが寸前で気づいたビルドは両手でアカメが放った刃を白刃取りの要領で受け止め攻撃を防いだ

ア「ツ……」

ビ「ツ……残念だけどそんな攻撃じゃビル……ド……は……」

ア「っ?」

「Yeah!」

ビ「(ううっ……なっなんだこの胸の鼓動はっ……おっ思わずときめいちまったじゃないか)」

ア「……お前……どうかしたか？」

ビ「……はああく……最悪だあっこんな美女が暗殺者なんて」

ア「なあっ……びっつ美女……だと／／／／」

タ「あいつ…この状況で何言ってるんだよ」

ビ「うっとうんっ…とっ取り合えず刀をしまいなさい、俺は君たちを殺すために来たわけじゃないんだ」

ア「…ではなぜここに来たんだ？」

ビ「話が見たいんだ…ナイトレイドの皆さんと」

“ t o b e c o n t i n u e d ”

【次回予告】

セ「俺は君たちの仲間にはなれない」

タ「お前が目指すものは国を変えることじゃなかったのかよ!？」

セ「人の命を犠牲にして築く国に平和なんてない」

“ 相反する2つの信念 ”

? 「さあ…本当の戦いの幕開けといこうか” セント ”」

セ「恥ずかしがってちゃヒーローは務まらないからね♪」

《第3話・交差する正義》

第3話・交差する正義

《前回のあらすじ》

セ「天く才物理学者のセントは仮面ライダービルドとして帝都に現れる異形の怪物・スマツシユと戦っていた、そんなセントはマスターことソウイチのアイデアで帝都の闇を斬る暗殺集団・ナイトレイドに接触を試みたのだった！」

ア「なあセント…お前の飴が食べたくなかった」

セ「いま切らしてるから持ってないよツつか関係ない話をあらすじ紹介にぶち込まないの!!」

ア「関係ないことないぞっセントが作った飴を食べたのはこの時が初めてだったんだから」

セ「よく覚えてたな！」

ア「仲間だからな／／／／」

セ「おっおう…とまあ俺はナイトレイドのみんなと話して色々と思うことがありつ今後の自分の運命を大きく変える分岐点となったのがこの回なのである！」

ア「一体何を思ったんだ？」

セ「それは話の中で説明してるから第3話一緒に観ようね」

―ナイトレイドのアジト―

ナ「でっ…全員で応戦したもののビルドの前に敗北っ拳句の果てに負傷したお前たちをアジトまで運んでくれた…：…ということの間違いないな？」

一同「はっはい…」

ナ「一体何の言い訳だこれはっもし相手が帝国の人間だったら今頃私たちの命はないぞ!!」

レ「そっそれは言い過ぎっしよボスウ…：帝国のひ弱な兵士が来たところで私たちが返り討ちにッ」

“バゴオオンツ”

レ「ぎやあふうっ!!」

ナ「相手がビルド並みに強かったらという話をしてるんだ…：理解したかレオーネ(怒)」

レ「いっイエスボス!!」

ナ ジェンダに先のビルドとの戦いのことを…

アカメを除いた5人が正座した状態で報告していた

さすがのナジェンダもこの失態に頭を押さえ、

そこに空気が読めないレオーネが決め手の一言を言ってしまい

愛ある鉄拳を喰らい頭にたんこぶができてしまったのである

ナ「たくつアカメが止めに入っただけでいかなかったらどうなっていたことか、苦勞を掛けたなアカメ…アカメ？」

セ「へええ、これが噂の帝具。一斬必殺の村雨。かあ…思ったより軽いんだね」

ア「刃には触れるなよ、少しでも斬れると傷口から呪毒が入ってすぐに死んでしまう」

セ「了解にしてもそんな危険な刀の攻撃を白刃取りで止めた俺…凄いでしょっ最高でしょっ天才でしょお!!」

“ シイーン… ”

セ「…いや誰か反応してよっこれじゃ俺が寒い奴みたいに見えるじゃんか！」

ラ「こっこんなふざけた奴に負けたとか…マジでありえねえええっ」

タ「てかアカメ…そんな簡単に村雨触らせちゃって平気なの？」

ア「大丈夫だ。危険性についてはちやんと説明したから」

セ「どこかの誰かさんと違って俺は理解力と吸収力があるからねえ」

タ「おまつそれ俺のことかよ！つかさつきはよくもやつてくれたなセントツ俺はお前が悪い奴じゃないって皆に説明しようとしたのにっ」

“グイッ”

タ「んぐっ!!」

セ「まあそう熱くならずには：飴でも舐めて気持ちいを落ち着かせなさい♪」

先の戦いにて自身に向け銃を向けたことに文句を言おうとしたタツミ、そんなタツミにセントは自家製の飴を強引に口の中に押し込んだ

タ「こっ子ども扱いすんな……っ／／／／」

レ「んっ……タツミどつたの？」

タ「(なっ何だこの味!?!色んな果物が合わさってて……フルーティで南国を思い浮かばせる爽やかな感じ……こんな美味い飴っ生まれて初めて食べたぜ!)」

セ「美味しいいだろっオレ自家製のトロピカル風フルーツミックス味だ」

タ「あああ……口の中がすげえ幸せになってるう／／／／」

ア「……………(ゴクツ)」

味わったことのない飴に感動し顔が緩むタツミ、
そんなタツミを見て：アカメはセントの方をじっと見つめた
セントは何かを察したようで：

腰に付けていた携帯パックから新たな飴を取り出した

セ「アカメも食べる？」

“ヒユイツ……………パクツ”

ア「ツ……………美味い!!」

セ「そりや良かった♪」

ナ「ううんっ……………そろそろ本題に入ろうかセント」

セ「はい？」

ナ「君にいくつか聞きたいことがある。勿論答えられる範囲で返答してもらって構わないんだが：了承してもらえるか？」

セ「…まあ俺もあなた達のことを知りたくてここまで来たんで：可能な限り質問には答えますよ」

ナ「よしつではまず1つ目：どうしてこのアジトの場所がわかった？」

セ「それは昨日タツミと握手した際にこのボトルの成分をタツミの体に付着させ、その成分の反応をこの端末の探知機能で探しだしたからさ」

セントはナジエンダの問いに自慢げな顔をしながら

ビルドフォンとボトルをナイトレイドのメンバーに見せびらかす

チエ「何これっこんな道具見たことないよ！」

ラ「こんな小さなモンに探知能力があるとか：信じられねえなあ」

セ「天才の発明ですから凡人には理解できなくて当然だよ：恥じることはない」

ラ「：いますげえムカついたんですけどお！」

セ「飴食べる？」

ラ「いらんわ!!」

レ「けど場所がわかったにしてもよくここまで無事に来れたよね」

ブ「確かに：：ここらへんは獰猛な危険種がたくさん生息していて無傷で通ることはまず不可能と言つていくくらいの危険地帯だ」

ス「普通の人間なら間違いないで死んでいる：君は一体どんな方法を使つてここまで来

「なんだ？」

セ「それはこいつを使ったからさ♪」

「ビルドチェンジ」

セ「ほいつ」

“カチャカチャツ…ドオンツ” セントはまた得意げな顔で

ビルドフォンにボトルを装填してその場に投げる

するとビルドフォンが巨大化したのち変形し、

1台のバイク・マシンビルダーとなってその場に現れた

マ「なっ何よこれ!!あの小さな板が…乗り物に変わった!?!」

セ「マシンビルダーツこいつも俺の発明品さ♪最高時速は271km…いくら危険種
と言えどこいつのスピードにはついてはこれないさっ」

タ「たっ確かにこの乗り物…馬が遅く感じるほどすげえスピードで走ってたもんな」

ナ「なるほどな…取り合えずタツミツお前はもう少し注意力を鍛えろ、これがもし
帝国の人間だったらお前は仲間を危険に晒すことになるっ一瞬の気の緩みが自らの身
を亡ぼすことをよく覚えておけよ」

タ「はっはい…（アカメと同じこと言われちったよ）」

ナ「ではセントツ2つ目の質問だ…：君の持つビルドを含めた一連の道具はこれまで見たことのないモノばかりだ、一体どこで…誰からそれらの道具を作る技術を得たんだ？」

セ「ああ…：実は俺もそこらへんのことはよく覚えてなくてさ」

マ「はあっどういう意味よそれ？」

セ「俺さ…：自分が何者でどこで生まれて育ったか…：そこら辺の記憶が頭の中からごっそり抜け落ちてるんだよね」

チエ「それって…：記憶喪失ってこと？」

セ「簡単に言っちゃうとそういうことつんで…：1年前に路頭で倒れていた俺はとある人に助けられ今日まで生きてこられた。ちなみにこのビルドドライバーと2本のポトルは倒れていた俺が既に持っていたモノみたいなんだ」

ブ「既に持っていたって…：それを作ったのはお前じゃないのか？」

セ「ビルドに関して既に完成された発明品だったんだ、どこで作られどういう理由で使われていたか…：今でもハッキリとしたことはわかってないんだよね」

タ「わかってない状態で使ってたのかよ！」

セ「ああ、でも不思議なんだよね…：記憶はないはずなのにビルドに関する知識や機械

作製の技術だけは頭の中に残っててさ。最初の頃はこの力を何のために使えばいいか悩んでただけど…答えが見つからないまま帝都でスマツシユの被害が出始めて…：今はとにかく目の中の命を守らなきゃって想いでビルドとして戦ってきたんだ」

ドライバーとボトルを見つめながら神秘的な顔つきで話すセント、その話の内容を聞いていたナジエンダは啞えていた葉巻を灰皿に置き両手を顔の正面で合わせセントの方に顔を向ける

ナ「君の素性は大体わかった。まだ不明なことは色々とあるが…：君が帝都に住む人々の命を守るためにスマツシユと戦いそれを倒してきたことは評価に値すると私は思っている」

セ「それはどうも…」

ナ「では最後の質問だ…セントツ我々ナイトレイドの仲間になるつもりはないか？」

セ「……………」

ナ「君の力はいまの世を変えるためにも必要だ。何よりも命を尊びそれを守るために己の体を張ってでも戦う君のような人材はこれから作る新たな国に必要となってくる」

セ「……………」

ナ「どうかその力を我々に貸してほしい！給金も多くはないが出すし君の知り合いを革命軍の元で保護することもできる……どうだセントっ協力してくれないだろうか？」

本命ともいえる質問をセントに投げかけるナジエンダ、

革命軍としても……ナイトレイドとしても

セントがもつビルドの力は帝具以上の能力を持っており魅力的だ

これを革命軍の戦力に加えることができれば

帝国を打ち崩す力となり……国を変えることができる、

この場にいるナイトレイドのメンバー全員がそう考えていた

特にタツミはセントの信念と人を信じる心の強さを知っているため

セントの仲間入りを誰よりも望んでいたため、

ひと際強い眼差しでセントのことを見つめていた

しばらくするとセントは舐め終わった飴の棒を口から出し、

近くにあったゴミ箱にその棒を捨てると

優しく微笑みながらナジエンダの方に顔を向ける

セ「ありがたい話だよ、素性もハッキリ分かってない俺を仲間にしてくれるなんて

……嬉しくて涙が出そうだ」

ナ「ではっ」

セ「でもっ……俺は君たちの仲間にはなれない」

タ「えっ!？」

優しい顔から急に険しい顔になったセントはそう言った

“仲間にはなれない”この言葉を聞いたタツミは

疑問に思いセントに詰め寄り理由を問い詰めた

タ「仲間になれないって……どういう意味だよセント!？」

セ「理由は簡単さ、俺は人の命を奪うことなんてできない。例えそれがどんなに腐った屑野郎でもな」

チエ「だから……私たち〃殺し屋〃と一緒ににはなれないってこと?」

セ「まっ……そういうことだね」

タ「納得できねえよ!じゃあお前のビルドの力は何のためにあるんだよっ犠牲が出ない為にスマッシュと戦ってるんじゃないのかよ!？」

セ「そうだよ……だから断ったんだ、これ以上犠牲を生み出さないためにも」

タ「ならナイトレイドに入ったっていいじゃないか！腐った帝国を壊して新しい国を作る為に俺たちは悪党を斬っているんだ！これはっ…必要な事なんだよ！」

セ「人の命を犠牲にして築く国に平和なんてない」

タ「じゃあお前のビルドは何の為にある!?人の命を守るためにあるんじゃないのかよ

!!」

セ「ああそうだよ、だからこそっ俺はビルドを戦争の兵器になんてさせないっ絶対に

!!」

ナイトレイドを否定されたかのようなセントの言い方にタツミは激怒し、

一方のセントもビルドを強力な兵器としてしか見ないタツミに対し

感情こそ抑えているが怒りがこみ上げた顔をしてタツミと対峙する

一触即発な状態となったセントとタツミ…

さすがにまずいと感じたナジエンダがタツミの肩を掴み止めに入る

ナ「それ以上は止めておけタツミッ」

タ「でもっ!!」

ナ「頼んでいるのはこちらだ。それにセントの言っていることは正しい、どんなに綺

麗な理屈を並べたところで……私たちがやっていることは人の道から外れた行動だからな」

タ「けどっ……それでもっ……こんな言われ方っ」

セ「気に障ったのなら謝る。けど訂正するつもりはないよ、俺はっビルドを戦いの道具としてしか見ていないお前と一緒に歩むことなんてできない……無論お前がいるナイトレイドの皆ともね」

タ「お前っ!!」

ナ「止めるタツミツ今ここでセントとやり合ってもこちらに勝てる見込みは1%もない!! 間近でビルドの力を見ていたお前ならわかることだろ!」

タ「ッ……わかったっ」

ナ「ジエンダに制されタツミはセントから1歩下がる、

険悪なムードが漂っているのを感じたセントは

携帯バツクから飴を取り出しそれを口に啜える

セ「……すみませんナジエンダさん、折角のお誘いを断る形になってしまっ

ナ「いやっこちらこそ部下が失礼なことをしてすまなかつた」

セ「いえっ…それにタツミが言ってることも一理ありますつなので彼へとお咎めは無しにしてあげてください」

タ「…ツ」

ナ「この状況で他人の心配をするとは…：…本当に君はお人好しだな」

セ「よく言われます…：…では俺はこれで失礼しますね」

マ「ちよつとつ何しれつと帰ろうとしてるのよ！」

セ「へえ？」

マ「このアジトの場所を知った奴を大人しく帰せるわけないでしょ！！」

セ「そうなの？」

シエ「そうですね…：アジトの場所を知った以上つ仲間にならないと殺されてしまうのが私たちのルールなんですよ」

セ「まあ暗殺屋だから当然と言えば当然か…：けど安心してつこのアジトの場所は絶対に喋らないからつオレ口が固い方だし」

マ「そんなの信じられるわけないでしょ！！」

ラ「お前が帝国側の人間じゃないって証拠はどこにもないんだつ口約束程度じゃ俺たちは納得しないぜ」

セ「ならけじめとして指2・3本斬っていく？」

マ・ラ「ツ!!」

ナイトレイドの言い分を聞いたセントはそう言い放ち

なんの躊躇もせず自身の左手を前へと差し出した

これにはさすがのナイトレイドのメンバー全員が驚く、

自身の体の一部を斬ってもかまわない……

普通の人間であるなら絶対に言わないであろう台詞である

だがかといってセントは強がってる訳でもなく、

むしろ平然とした態度でそれを言ってきたのだから

ナイトレイドのメンバーはなお驚いたのである

ラ「おまつそれ本気で言ってるのか!?!」

セ「別に指程度ならあとで義指を作れば良いだけだし……それにつこれで皆が納得してくれるのなら安いもんだよ」

レ「凄い度胸というかなんというか……お前には驚かされっぱなしだよ」

チェ「私もこの世界に長いこといるけど、そんなことをサラツと言える人なんて滅多にいないよ」

セ「それでっ……どうしますナジエンダさん？」

ナ「……君のことは信じられる。だからそんなことをする必要はない」

セ「そう？ならいいんだけど……それじゃ長居は無用だから俺はこの辺でッ」

ナジエンダの発言を聞きセントは左手を引つ込め、

改めてその場を後にするために外へと通じるドアの方へ向かう

その途中でアカメと目が合い、

何を思ったかセントは腰に付けてた携帯バッグを

丸ごとアカメに向かって投げ渡した

ア「んっ……セントツこれはなんだ？」

セ「そのバッグにさっきあげた飴があと6本入ってるからっ全部アカメにあげるよ」

ア「セントツお前は凄く良い奴だ！」

セ「ありがとう♪」

一同「(食べ物で買収されてるう……)」

セ「んじゃ改めまして……さようならナイトレイドの皆様っ」

さよならの挨拶をしたセントはドアを開け外へと出る、
見渡す限り山と森林で囲まれた景色……

ここならバレる心配はなさそうだとセントは心の中で感じた

その後セントは要塞ともいえるナイトレイドのアジトの中を歩き進め
しばらくすると地面に通じる出口にたどり着き、

ここで本日3度目の登場となるビルドフォンを取り出す

セ「ポチツとしてポイ」

“カチャカチャツ……ドオンツ”

セ「さあてっ……帰るとしますかね」

タ「セントツ」

セ「んあつ……なんだタツミかよ」

タ「はあつ……はあつ……なんだとはなんだよ!？」

マシンビルダーに乗りいざ走り出そうとしたその時、

先ほどまで互いにいがみ合っていたタツミが

息を切らした姿でセントの後ろに現れた

セ「なにつ見送りにでも来てくれたの？」

タ「……セントツ気持ちは変わらないのか？」

セ「ああつ誰が何を言う……この信念だけは曲げるつもりはない」

タ「ツ……頑固な奴だなお前は」

セ「それほどでもないよ」

タ「………ツ」

セ「……せめてもの餞別だ、タツミツお前にこれやるよ」

“ブウウンツ”

タ「えつ……ちよつ」

“ガチャツ”

タ「つつ……これって……」

セ「ビルド専用武器のドリルクラッシュャー!! 剣先を回転させることで摩擦を生じさせ斬れ味をアツプすることができ、更に剣先の向きを変えれば銃にもなって遠距離戦にも対応できる俺の発明品だつ大事に使ってくれよ」

タ「ちよつこれお前の武器だろ! あげちやつていいのかよ!?!」

セ「別に良いよ、また新しいの作れば良いだけだから♪」

タ「(こいつつ…さり気なくすげえこと言ってるぞ!!)」

セ「ただしつそれは対人相手には威力が強すぎる…あくまでもスマツシユとの戦闘が避けられなくなったときにだけに使ってくれよ」

タ「わつ…わかつたよ」

セ「OKつ…それじゃまたどこかで会おうぜタツミツSee you!」

“ブオオン…ブオオオーンツ”

タツミにドリルクラツシャーを譲ったセントは
マシンビルダーのエンジンを起動させ、

颯爽とその場から走り去っていった

その場に残ったタツミはセントから譲り受けたドリルクラツシャーを持ちながら、
去っていくセントの後姿を見送ったのであった

―同日夜・城内人体実験室―

セントは店のカウンタ―で自作パソコンを弄りながら店番をしていた。ちなみにナイトレイドとのことはソウイチに報告済みであり、

結果仲間にならなかったことに関しては“まあそんなことだろうと思った”と

ある程度予想していたためとやかく言われることはなかった

だがあの日以来：セントは本当にこれで良かったのかと、

自分が出した答えに対して疑問を持っていた

確かにナイトレイドのやっていることはただの人殺し、

だが国そのものを変えるためには諸悪の根源を

潰さなくては変えられないのも事実だ

彼らは常に“死”と隣り合わせの状況で日々戦っている、

それに対し自分は固い信念はあるものの

戦う“姿勢”に関して言えばまだ不透明なところがある

こうしてる間にもどこかで誰かが苦しみ命を落としていつている…

そういう人たちの命を救い明日を守るためにビルドはある、

なら自分が本当に取るべき選択は…

そんなことを考えながらセントはパソコンのキーを打っていた

セ「……けど今更〃 やっぱ仲間になります〃 なんて言えるわけないよなあ」
〃 チイリンツ〃

セ「(えっお客?! 珍しいなおい!) あっすみません今日マスターが留守……で……」
タ「本当にいたよっアカメ凄いな!」

ア「よっよしてくれ……褒められるのには慣れてないんだ〃〃〃〃」

セ「アカメにタツミ!?!」

珍しくお客が来たと思いきやセントは入り口に向かう、
だがそこにいたのはお客ではなく

ナイトレイドのメンバーであるアカメとタツミだった

セ「どっとうしてこの場所がわかったの!?!」

ア「セントから貰った飴の匂いがここからした」

セ「お前は犬か!?!」

タ「俺も半信半疑だったけど……まさか本当にいるとは思わなかった」

まさかの2人の登場にさすがのセントも頭をかかえる、

取り合えず近くにあった椅子を2人のところに持っていき座らせる

セ「それでっ何用得2人はここに来たのかな？」

タ「そっそれは…」

セ「言っておくけど何度勧誘しても無駄だよ、俺とナイトレイドじゃ目指す場所は同じでも戦う目的が違う…だから一緒に歩むことは出来な」

タ「違うっそんなことを言いに来たんじゃない！」

セ「へえっ違うの？」

タ「おっ俺…セントに謝りたくて」

セ「??？」

自分が予想していたのと違う答えが来たことにセントはまた驚く、

“謝りたい” 一体タツミは何を謝罪したいというのだろうか

タ「俺さ…お前の言うとおりにビルドのことを戦う道具としてしか見てなかった、ビルドの力があれば帝国を倒しっ新しい国を作ることができる…初めて見たときからそういう風に思ってたんだ」

セ「……」

タ「けどっお前がくれたこの剣を振って感じたんだ……お前の強い覚悟と信念をさ」

セ「俺の覚悟と信念？」

タ「この剣……あれだけ激しい戦いを潜り抜けてきてるのに血の匂いが一切しなかった、それで思ったんだ……セントは本当に誰の命も奪わずに戦いを終わらせようとしていたんだって」

ア「私もタツミから借りたときに思った、この剣は……人を斬るためではなくつ命を守るために生み出されたモノなんだと」

タ「お前のビルドもっ何かを壊すためじゃなく……何かを生み出し創り出すためにある力なんだって、そのことに気づいた途端……ビルドを兵器としか思ってた自分が恥ずかしくなってる」

セ「タツミ……」

タ「だから直接お前に会って言いたかったんだ！ビルドを……仮面ライダーを汚すようなことを言っただけ悪かった！」

謝罪の言葉を述べながらタツミはセントに頭を下げる、

一方のセントはタツミの言葉を聞き……

ばつが悪そうな顔をしながら手に持っていたコーヒを一飲む

セ「(最悪だっ…カッコ悪すぎるだろ俺)」

ア「セント？」

セ「…頭を上げてくれタツミ」

タ「……………ツ」

セ「お前がビルドの意味を理解してくれただけでも…その武器をお前に譲った意味はあった。それに…お前が言うようにこの国を変えるためには悪を斬らなきゃならないというのもわかっている」

タ「セント…」

セ「けどだからこそ知ってほしい!!命は1つしかない…その命を奪うということはその命の分まで生きていかなきゃならないということ!!」

タ「奪った命の分まで…生きる」

セ「そうだった例えどんな苦境に立たされようと…どんなに絶望的な状況であろうと生きる!!それが…命を奪った者たちが背負う責任なんだ」

タ「……………ふっ…やっぱセントには敵わないなあ、さすが正義のヒーローツ言葉の重みが違い過ぎるよ」

セ「そりやそうだろっなんせ俺は”愛と平和”を守る仮面の戦士・仮面ライダービルドなんだから♪」

タ「よくそんな恥ずかしいことをサラツと言えるよな」

セ「恥ずかしかつてちやヒーローは務まらないからね♪」

ア「……ふっ」

なんやかんやで和解したセントとタツミ、

その光景を見ていたアカメは安心したように笑う

ひと時の和やかな時を過ごす3人、

だが…現実はそのままで甘くはなかった

“ピイピイピイピイツピイピイピイピイツ”

タ「うおっなんだよ急に!？」

セ「この音は…スマツシュが現れたんだ!」

ア「スマツシュが!？」

不吉な警告音を発するパソコン、

セントはそんなパソコンを操作し
帝都周辺のマップを画面に広げる

セ「場所はエリアE―2ツ建物の何もなに平地じゃないか」

タ「この場所にスマツシユが現れたのか!？」

セ「みたいだな…こうしちやいられないっ現場にいかないと!!」

セントは椅子にかけていた黒コートを持ち、

スマツシユが出現した場所に向かうべく店を出た

タ「アカメツ俺たちも行こう!」

ア「…放つてはおけないか…よしっ後を追うぞ!!」

タ「おうっ!!」

そんなセントの後を追うべく、

タツミとアカメはそれぞれの武器を持ち店を出た

幸いなことにスマツシユが出現した場所は

nascitaからそんなに離れていなかったため、
10分ほどで現場に到着することができた

セ「つ…誰もいない」

タ「本当に何もなし場所だな…けど肝心なスマッシュがないぞ」

ア「本当にここであっているのか？」

セ「ああっ確かに反応があつたのはこの場所だ、きつとどこかに……んっあそこに誰か倒れてるぞ!!」

セントが指差す方向に顔を向けるタツミとアカメ、

そこには確かに白い囚人服のようなものを着た

男女2人が地面に倒れていた

そしてその男女を見た瞬間…

タツミは形相を変えてこう言った

タ「…イエヤスに…サヨ!」

セ「えっ…あの2人お前の知り合い!」

タ「あつああ…同じ村の出身で幼馴染なんだ」

ア「確か帝都を目指す途中で夜盗に出くわし離れ離れになったと話していたな」

タ「ああつけど…なんで2人があんなところに」

セ「詮索は後回しだツまずは2人を助けないと!!」

?「おおつとそうはさせないぞ」

“バアアンバアアンツ” 倒れているイエヤスとサヨに近づこうとした瞬間、

セントたちの足元に数発の銃弾が着弾し爆発した

タツミとアカメは瞬時にそれぞれの剣を鞘から抜き構え、

セントも再度作ったドリルクラツシャーを手に持ち周囲を見渡す

セ「誰だツ姿を見せろ!」

?「ではリクエストに応えて…」

“ シュウウウウ… ”

?「ふっふっふっようやく出会えたなあ…仮面ライダービルドにナイトレイドのお

二方よ」

セ「お前はっ…」

ス「俺の名は……」ブラッドスタークだ！」

“ to be continued ”

【次回予告】

ブ「It's Showtime!!」

タ「イエヤスとサヨが…スマツシユにつ」

“ スマツシユとされた友たち ”

ビ「今ここで立ち止まったら全てが無駄になるんだぞ!!」

タ「俺はツどうすれば…」

“ 葛藤する心 ”

セ「俺も…変わらなきやいけないのかもしれない」

セ「いい加減下手な芝居は止めなよマスター…」

《第4話・暴かれる本性》

第4話・暴かれる本性

《前回のあらすじ》

セ「天々才物理学者のセントは仮面ライダービルドとして帝都に現れる怪物スマツシユと戦っていた、そんなセントは暗殺集団ナイトレイドと出会い仲間にならないかと誘われるが自らの信念を守るためにその誘いを断ってしまう」

ア「命を守りたいというセントの考えは正しい、けど何故かあの時“仲間になれない”と言ったとき…私は悲しい気持ちになったんだ」

セ「その節はごめんなさいっあの頃は俺もまだ戦う姿勢がハッキリしてなかったからさ」

ア「だが今はこうして共に歩んでいる…結果オーライというやつだな」

セ「それっぽくまとめるのやめてくれない。ここに至るまでの話はまだ始まったばかりなんだから、して*nascita*に訪れたアカメとタツミと話していた時にスマツシユの反応があり現場に急行してみるとつなんとタツミの幼馴染であるイエヤスとサヨが倒れていた…更にそこに“ブラッドスターク”と名乗る謎の男が現れたのだった!!」

ア「今回はいつもより長めに喋るんだな」

セ「情報量が多いからね、まあこれ以上長くなるとあれだからそろそろ第4話にいきましょね」

ス「俺の名は……ブラッドスタークだ！」

セ「ブラッド……スターク？」

霧の中から現れた謎の仮面の男・ブラッドスターク、

セント・アカメ・タツミの3人は予期せぬ人物の登場に

各々が構えていた武器を再度力強く握りしめる

タ「霧の中から現れた……あいつもスマツシユなのか？」

セ「いやつスマツシユになつた人間は言葉での会話……つまり意思の疎通はできなくなるはずだ。だがあいつはいまこうして俺たちと喋っている……」

ス「そうっ俺はスマツシユじゃない。強いて言うなら俺は仮面ライダービルドの好敵

手といったところだな」

セ「好敵手ってお前……ビルドのことを知っているのか!？」

ス「ああ知つてるとも……憎いくらいにな♪」

セ「なら俺が何者かも知っているのか!？」

ス「……………」

セ「答えろスタークツ!!」

ス「それはまだ言う時じゃない……それにつ今のお前がすべきことは自分のことじゃなくこいつらを助けることなんじゃないか?」

セントの問いに対しスタークははぐらかすように答えながら地面に倒れていたイエヤスとサヨを持ち上げ3人に見せる

タ「イエヤスツサヨツ!!」

セ「ツ……その2人をどうするつもりだ!？」

ス「ふふふつ……どうするかって?」

“バサツ……ドサツ”

ス「こうするのさ!」

「ライフフルモード・デビルスチーム」

“ブシユウオンツブシユウオン”スタークはイエヤスとサヨをその場に投げ捨て、取り出した刃が付いた銃から黒い霧状の物質を2人に向け放つ

放たれた黒い霧はイエヤスとサヨの体を包み込んでいき、

次の瞬間“バアアンツ”2人は異形の怪物・スマツシユへと姿を変えてしまった

「又オオオオ……」

ア「あれはっ!!」

セ「まさかつ……そんなことがっ」

タ「イエヤスとサヨが……スマツシユにっ」

ス「どうだっこれが”トランスチームシステム”の力だ」

セ「人間をスマツシユ化させる武器……そうかつお前が帝国にスマツシユの人体実験技術を流した張本人か!!」

ス「そういうことだ。さあ……It's Show time!!」

「グアアアアアア……」

スタークの掛け声を合図に

“バーンスマツシユ”と“ミラージユスマツシユ”は
セントたちに向かって走り出した

セ「来るぞッ」

「又アアアッ」

セ「はあああッ」

“ギイインギイインッ”

「ツ……アアアアアッ」

タ「ぐうっ !!」

「又アアアアアッ」

ア「ツ……はあああッ」

“ギイインッ” 2体のスマツシユをドリルクラツシャーで斬り込むセント、

その後つバーンスマツシユはタツミへ……ミラージユスマツシユはアカメの方へと向
かった

アカメは帝具・村雨を使いミラージユスマツシユの動きに対応するが

“カチャツ” セントは右手に持っていたドリルクラツシャーを地面に突き刺し、懐からビルドドライバーを取り出し腰に装着した

そしてラビットとタンクのボトルを両手に持ち振り始め、

一定回数振り終えた後つ2本のボトルをドライバーに装填する

「ラビット／タンク・ベストマッチ！」

「Are you ready?」

セ「変身ツ!!」

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！Yeah!」

セントは仮面ライダービルド・ラビットタンクフォームに変身し、地面に突き刺していたドリルクラツシャーを右手に持ちアカメとタツミを救うべくスマツシュに攻撃を仕掛けた

ビ「はあああつ」

“ギインツ”

「グウウツ!!」

ビ「ふっおらあぁっ」

“ギインギインツ”

「ヌウアアツ!!」

ビ「つ…2人とも大丈夫か!？」

ア「あぁつまだ戦える！」

ビ「アカメはタツミを頼むツスマツシユが相手じゃ君の帝具もただの刀でしかない
！」

ア「っ…」

「ヌアアアア…:…」

ビ「行くぞっはぁぁあーっ」

タ「止めるセントツ相手はイエヤスとサヨなんだぞ!!」

ビ「ツ…じゃあこのまま放っておけていうのか!?!ここでなんとかしないと奴らは町
に向かうっそしたらそこに住む人たちが危険に晒されるんだぞ!!」

タ「くうっ…」

ビ「2人のことは俺に任せろっスマツシユの成分を抜き取ることができれば…イエヤ
スとサヨを元の姿に戻すことができる!!」

“バアアンバアアンツ”

ビ「ううっ!!」

ス「いいのかあ? そんなことをすれば…2人は消えてなくなるぞ」

タ・ア「「ッ!!」」

ビ「なんだと!？」

ビルドに向け数発の弾丸を放ったスタークは3人にそう言い放った、

“消えてなくなる” その言葉を聞いたビルドは構えていた武器を下し

タツミは恐怖と絶望が入り混じった表情をしスタークを方を見つめる

ビ「消えてなくなるって…:…: どういうことだ!？」

ス「言った通りだ。“ハザードレベル1” 体の弱い人間はガスを注入した時点で死に至る、その2人は帝都の町中で迷っていたところを俺が捕まえ人体実験のモルモットにしたんだ」

タ「人体実験の…モルモットだっ」

ス「元々ろくに食事もとつていない状態で様々な実験を2人に行つてなあ…:結果として体は衰弱しまともに立つこともできない体になっちゃったんだ」

タ「っ…」

ス「そんな状態の2人をスマツシユにしたんだ。もしその成分を抜き取りでもすれば
…2人の魂は肉体と共に消滅するっ跡形もなくな」

ビ「……ッ」

ス「わかるか?どんなことをしても…その2人に助かる道は残っていないんだよ!」

告げられた言葉にタツミは力が抜けたようにその場に座り込み、

一方のビルドもどうしようもないこの状況と

それを行ったスタークに対し憤怒の感情を露にした

ビ「スタークツお前だけは…お前だけは!!」

“バアアンバアアンツ”

ス「ふうんっはああっ」

“ザアンザアン……ドオオンツ”

ス「ふははははっ…さあっこの絶望的状况の中でどう戦うか…遠くから見物させても
らうよ」

“ シユウウウウ……”

ス「精々足掻き苦しむことだ…んじゃまたなビルドツチャオオ♪」

ビ「ッ!!」

“プシュウウ…” そう言うときスタークの周囲に白い霧が出現し、

ビルドが再度ドリルクラツシャーを向けようとした時にはその姿を消していた
それと同時にバーンスマツシユが再度火球を放ってきたため

ビルドはドリルクラツシャーで火球を受け止める

すると今度はミラージュスマツシユが数体分身を生み出し

四方八方から銃弾を放ちビルドを翻弄する

“バアアンバアアンツ”

ビ「つうっ!!」

“ シュンシュンツ…バババババツ”

ビ「がはあっ…くそおっ!!」

タ「ツ…止めてくれセント!」

ビ「タツミツ」

スマツシユに攻め込もうとしたビルドの前に立ちふさがるタツミ、

こんなことをしてもイェヤスとサヨが助かるわけじゃない：
そんなことはタツミ自身もわかっていた

だが頭でわかっけていても体は無意識に動いてしまふ、

そんなタツミを見て再度ドリルクラツシャーを下すビルド

その隙を見てバーンスマツシユが右腕の銃口をタツミに向け、

それに合わせミラージュスマツシユは分身体を自身の体に戻し

両手をタツミの方に向け銃弾を放つ体勢に入った

ア「タツミ!!」

ビ「危ないッ避けるタツミ!!」

タ「ッ!!」

“バアアンツ：バババババツ”

「又ウウウツ!!」

タ「えっ!?!」

火球と銃弾が放たれる音がした：だがそれがタツミに来ることはなかった、
不思議に思ったタツミが後ろの方を振り向くと

サ『ふふっ…それもそうね♪』

イ『よおしっそうと決まれば…』

タ・イ・サ『『帝都で大暴れだああ!』』

走馬灯のように2人との思い出を頭の中で思い返すタツミ、
村を出て3人で帝都で大暴れしてやろうと誓った

あの日からそんなに月日は経ってないはずなのに…

何故こんなことになってしまったのか、

タツミは後悔していた…もつと早く2人を探していれば…

夜盗の襲撃を受けたときに離れ離れにならなければ…

そんな後悔をしてる間も2体のスマッシュは

タツミを攻撃せんと自分自身を傷つけるように

火球と銃弾をその身に受け続けていた

タ「……なあ…本当に2人は助からないのか？」

ビ「………」

タ「………だつたらっせめて2人を元の姿に戻してやつてくれっ…頼む!」

ア「タツミ……」

ビ「……言っただろっ2人のことは俺に任せろって」

そうやってビルドはラビットとタンクのボトルをドライバーから抜き、新たにゴリラとダイヤモンドのボトルを取り出し両手で振り始め、振り終えた後2本のボトルをドライバーに装填しレバーを回す

「ゴリラ／ダイヤモンド・ベストマッチ！」

ビ「さあ……実験を始めようか」

「Are you ready?」

ビ「ビルドアツプ！」

「輝きのデストロイヤー！ゴリラモンド！Yeah！」

ビルドは攻撃力と防御力に特化したゴリラモンドフォームへと変身、そしてタツミを自身の後ろへと下がらせ2体のスマッシュと対峙する

「ヌウウツ……ヌアアアアアーツ」

積み重なったダイヤをゴリラの力が宿った右腕で殴り、

無数のダイヤの粒子をバーンスマツシユとミラージュスマツシユに向け放つ

直撃したダイヤの粒子は渦を巻きながら2体のスマツシユを宙へ浮かせ

それを確認したビルドはスマツシユに向かって走り出す

その様子を目で追ったタツミがスマツシユの方に目を向ける、

するとなんとということか：ダイヤの粒子がスマツシユの肉体を宙に浮かせたまま

イエヤスとサヨの体だけを分離させたのだ

地面に落ちるように倒れた2人を守るべくビルドはイエヤスとサヨの上に立ち、

ダイヤの粒子に揉まれながら下に落ちてきた2体のスマツシユをその身で受け止め

る

ビ「っ……ぐううっ……タツミッ今のうち!!」

タ「イエヤスッ……サヨオオツ!!」

タツミは倒れた2人の元に駆け寄りその体を抱き起し声をかける、
すると……イエヤスとサヨは重い瞼を開きつタツミの姿を視認する

イ「つうっ……タツ……タツミ……なのか？」

タ「ああ俺だツ俺だよイエヤス!!」

サ「ツ……無事だったんだね……タツミ……」

タ「無事に決まつてるだろサヨツ……俺を誰だと思つてるんだよっ」

サ「ふふっ……そう……だね……私たちの……自慢のタツミだもんね」

イ「……恥ずかしいよな……大口叩いて……この様だっ……ぐううっ!!」

タ「イエヤスツもう喋るな……」

サ「っ……タツミ……私たちの……分まで……」

タ「止めろよサヨツそれ以上何も言うな!」

サ「私たちっ……分までっ……生きてっ」

イ「頼むっ……お前まで死んじまったら……誰が村を救うんだよ!」

タ「イエヤスツ……サヨツ……」

イ「頼ん……だぜっ……タツミツ……」

サ「皆を……この国を……変え……てっ……」

タ「駄目だ! イエヤスツサヨツ……消えるなあああ!」

“ パアアアア…… ”

タ「はあっ……つつ……うわああああ……っ!!」

「ビ」くううつ…おつらあああつ!!」

“バアアン”最後の力を振り絞ってタツミに想いを伝えたイエヤスとサヨ、すると2人は力尽きその目を閉じ…それと同時に2人の体は粒子化し消滅した。タツミは2人の温もりが残った両手を握りしめながらその場で泣き崩れ、

一方のビルドは抑えていた2体のスマツシユを遠くへ弾き飛ばした。母体となる肉体を失ったためか2体のスマツシユはそのまま倒れ、

それを確認したビルドはエンプテイボトルをスマツシユに向ける。すると2体のスマツシユの体は粒子となって消滅し、

その粒子は成分となってエンプテイボトルに吸収された。

戦いを終えたビルドはドライバーに装填していたボトルを抜き変身を解除、人間の姿に戻ったセントは回収した2本のボトルを神妙な面持ちで見つめる。

セ「……実験…完了」

タ「なんだよっ…こんな最後あるかよっ…3人でっ…帝都で大暴れするんじゃないのかよお!!」

ア「……ッ」

セ「……帝都警備隊が来る前にここを離れよう。帝都の外まで案内する……そこから2人はアジトに帰るんだ」

タ「もういいっ……もういいよっ……2人がいなくなっちゃったら……生きてく意味がねえよっ……」

ア「タツミ……」

セ「……ふざけるなよっ」

イエヤスとサヨ……友人2人を同時に失い意気消沈してしまったタツミ、そんなタツミの胸倉を掴みツセントは無理やりタツミを立たせる

セ「何がいいんだよ！いい訳ねえだろ！ここで立ち止まったら全てが無駄になるんだぞ!!それでいいのか……それでイエヤスとサヨが喜ぶと思ってるのかよ!!」

タ「……ツ……ツ」

セ「……アカメツタツミを支えてやってくれ」

ア「……分かった」

セ「急ぐようッ早くここから離れるぞ」

タ「……」

こんな時つあいつの仲間だったら傍にいられたのに……

自分の戦う姿勢が不透明だったがためにあんな事態を招き

彼の友を救つてやることができなかつた

そんなことばかりを考えてしまいセントの頭はパンク寸前だった、

このままではまずい取り合えず気持ちを落ち着かせるべく

セントは自家製の飴を一つ取り出し口に咥えた……その時つ

ソ「セントツお前にお客さんだぞ」

セ「へえっお客？」

地下室に現れたソウイチはセントにお客が来たと伝える、

自分にお客……そんなことこれまでなかつたために

セントは驚き咥えていた飴を口から取り出した

誰が来たかをソウイチに聞こうとしたその時、

そのソウイチの後ろから神妙な顔つきをしたタツミが現れた

セ「タツミツお前……どうして……」

タ「……お前につ……お礼を言うのを忘れてたからさ」

セ「……」

タ「セントのおかげで……イエヤスとサヨと最後に話してきた……感謝してる」

セ「つ……礼を言われるようなことはしてない。それに……俺はお前の友達を救ってやる
ことができなかった」

タ「それでもつお前は2人の心をスマツシユから解放してくれた。そのおかげでつ俺
は2人の想いを聞くことができたんだ……ありがとうつセント」

セ「……ふっほんとお前つてどうしようもないくらい真つ直ぐだよな」

タ「それセントには言われたくはないんだけどっ」

タツミから感謝の言葉を受け取ったセント、

そんなセントは椅子から立ち上がると

デスクに置いてあつたビルドドライバーを手に持ちタツミに近づく

セ「タツミ……俺はこのビルドの力を使って大勢の人々の明日を守るために戦つてき
た。けど……この国を明日をつ皆の幸せを守るためにはこのままじゃ駄目だつて……今回
のことで強く痛感したよ」

タ「セント……」

セ「俺も……変わらなきやいけないのかもしれない。タツミたちが目指す革命を成し遂げるためにも」

タ「えっ……それって！」

セ「俺に人の命を奪うことは出来ないっけどお前たちが進む道を切り開くことはできる!!ビルドの力を使ってな」

タ「ッ……」

セ「今更かもしれないけど……俺はお前とっ……いやっお前たちナイトレイドと共に歩みたい!だからっ……俺をお前たちの仲間に入れてくれ!!」

タ「……歓迎するよッセント!」

自分の信念を……そして自身の新たな決意を表明したセントは、

タツミたちナイトレイドと共に歩んでいく覚悟を決めた

その言葉を聞いたタツミは心から喜びセントに右手を差し出し、

セントはその手を右手で力強く握り……固い握手を交わしたのだった

“パチッパチッパチッ”

ソ「よく言ったぞセント！あああゝこんな感動的場面に立ち会えるなんてツ…オレ嬉しくて涙が出ちまうよおおくっ！！」

セ「大袈裟でしょマスター…」

ソ「何言ってるんだよ！お前が前に進む覚悟を決めた歴史的瞬間だぞっこんな嬉しいことはないだろ！」

タ「すっすげえテンションだな…」

ソ「いやあゝゝ長かった…本当に長い1年だったなセントオ！」

セ「本当に長かったね…けどっこうなることはマスターにとつては想定の内範囲内だったんでしょ？」

ソ「んっ…想定の内範囲内って…どういう意味だよ？」

セ「っ…いい加減下手な芝居は止めなよマスター…いやっ」

セ「ブラッドスタークッ」

ソ「ッ」

タ「えっ!？」

“ブラッドスターク”確かにセントはその名を

自身の目の前にいるソウイチに対して言った

まさかの発言にタツミは驚いた顔をし、

一方のソウイチは不自然な笑みをしながらセントに話しかけた

ソ「おいおい…急に何を言い出すんだよセントオツ俺はそんなヘンテコな名前を名乗ったことなんてねえぞ♪」

セ「惚けても無駄だよ。マスターが夜な夜な帝都の城に入っていくとは何度も目撃してるんだから!!」

そう言いセントは数枚の写真をソウイチに見せつける、

その写真には夜の暗闇の中…城の中へと入っていく

ソウイチの姿がバツチリと写っていた

しかも1枚だけでなくセントが持つ全ての写真に

城の中へ入っていくソウイチの姿が写っていたのである

セ「最初は城の中から上質なコーヒー豆でも盗んできてるかと思つてたけど…忍び込んで入るには堂々としてるし、何よりマスターが城へ出入りするようになったのは今から11か月前…その1か月後に帝国はガーディアンを正式採用しつつ時を同じくして帝都の町にスマッシュが出没するようになった」

ソ「お前まさかつ…俺がガーディアン製造方法やスマッシュの人体実験の技術を帝

国に伝えたって言いたいのかよ!？」

セ「俺はそう推測したっ偶然にしては全ての出来事が起きた時期が一致しすぎて…
怪しまない方がおかしい」

ソ「んな馬鹿なことあると思うかあ？酷い奴だなお前はツ…ストーカーした挙句に人を悪者扱いしやがってよお」

セ「証拠なら他にもあるよつまりはこれを聴いて」

しらばつくれるソウイチに対しセントは冷めた声のまま

ポケットからビルドフォンを取り出しディスプレイのアイコンを押す

“ピイツ”

ス『精々足掻き苦しむことだ…んじやまたなビルドツチャオオ♪』

セ「これは昨日の戦闘でスタークが言った言葉だ…言動が怪しいと思つて声を録音しておいたんだ」

ソ「それがなんの証拠になるってんだ？」

セ「スタークの声はどこか籠つてノイズが混じっているように聞こえた。そこで俺はこの声を解析しつ余計な音や声を濁らせてるノイズを取り除いた…そして俺の疑念

は確信へと変わった」

“ピイツ”

ス『精々足掻き苦しむことだ…んじやまたなビルドツチャオオ♪』

タ「えっこの声…ソウイチさんの声そのものじゃないか!!」

セ「おそらくスタークのスーツにはボイスチェンジャーのような機能が付いているんだろう、それで声質を変えて自分の正体がバレないようにしていた…けど相手が悪かったねっついでに声の波長や声紋をマスターのモノと比較してみた。結果は100%マスターのモノだと数字で出たっこれが動かぬ証拠ってやつだよ!」

ソ「……………」

セ「あんたがブラッドスタークなんだろう、帝国にガーディアンの製造とスマツシユの人体実験の技術を教えつタツミの友達であるイエヤスとサヨをスマツシユにした…」

諸悪の根源だ!!」

ソウイチに向け鋭い目つきで言い放ったセント、

だが心のどこかでは嘘であってほしいという気持ちもあった

1年前…路頭で倒れていた自分を拾ってくれ

ここまで共に歩んでくれたソウイチが

一連の事件を引き起こした張本人だと信じたくなかった
 だが……セントの想いは無残に裏切られる、

セントの言葉を受けたソウイチは顔を下げると……

何を思ったか不敵な笑みを浮かべながら笑い始めた

ソ「ふふふっ……はははははははーっ」

セ「ッ……」

ソ「はあ……まさかこんな早くにバレちまうとは思ってなかったよ。さすが……」
 まが
 い物”でも天才物理者ってとこか♪」

ソウイチは懐から銃のようなモノを取り出す、

それは先日スタークが持っていたものと同じ銃だった

そしてソウイチはセントがビルドに変身する際に使うボトルと

似たようなコブラの意匠が施されたボトルを取り出し、

数回振った後ッそのボトルを銃に装填する

「コブラ！」

ソ「…蒸血っ」

「ミストマツチ…！コツコブラ…！コブラ…！Fire！」

ス「ご名答っ俺がブラッドスタークだ…：…んんっ…こっちの声の方が馴染みがあるかあ？」

ソウイチは銃から放出された黒い霧で体を包み込み、

赤いワインレッドにコブラの意匠が随所に施されたスーツを身に纏った

仮面の戦士“ブラッドスターク”へと変身した

その際に喉元をいじったような手振りをすると、

ソウイチの声からスタークに変身した際に使っていると思われる声に変化した

その一部始終を見たセントは右手で拳を握り締めながら感情を露にし、

一方のタツミは自身の友人を死へと追いやった元凶が現れたことに言葉を失った

ス「見事だセントッこんな短期間で俺の正体に気づくとは…天才を自負するだけのことはあるな」

セ「スタークッ」

ス「ふふふっそんなお前に敬意を表して…俺の本当の名を教えてやろう」

セ「本当の…名だと？」

ス「ソウイチ”も”ブラッドスターク”という名も…全ては俺の存在を偽るための偽名だ。俺の本当の名は…」

セ「…ツツ」

タ「…ツツ」

エ「星狩りを生業としつ…宇宙全てを滅ぼすブラッド族の一人”エボルト”だ!!」

セ「…エボルトツ」

“ to be continued ”

【次回予告】

エ「俺の目的は…：セントツお前の成長だ」

“ 動き出すエボルトの計画 ”

セ「お前の野望がなんであれつこの国の明日は俺が守ってみせる」

ナ「改めてつようこそナイトレイドへ！」

“セント・ナイトレイドに正式加入!!”

ア「これだけは覚えておいてくれ：絶対に死ぬなつ」
セ「これからよろしくね：アカメ」

《第5話・新たなる一歩》

第5話・新たなる一步

《前回のあらすじ》

セ「仮面ライダービルドでありつ天才物理学者であるセントは帝都に現れる怪物スマッシュと戦う日々を送っていた、そんなセントの前に現れた謎の男・ブラッドスタークはタツミの幼馴染であるイエヤスとサヨの2人をスマッシュ化させつこともあろうか2人の親友であるタツミと戦うよう仕向けたのだった！」

ア「私の村雨が通用しないスマッシュ：改めて思うと厄介な存在だな」

セ「そんなイエヤスとサヨを救うべくセントはビルドに変身し2人の肉体をスマッシュから分離させることに成功した、だが時すでに遅し：イエヤスとサヨは己の最後を悟りつ親友であるタツミに自分たちの想いを託し消滅していった」

ア「あの時：セントがタツミに声をかけていなかったらタツミは再び立ち上がれなかったと思う。セント：…本当にありがとう」

セ「ちよつ唐突にお礼言われても困るんだけど／／／／」

ア「???」

セ「話を戻して：一連の出来事を経てセントは愛と平和を帝国にもたらす為タツミ

たちと共に戦う覚悟を決めナイトレイドへ加入する決意を固めた。そこで俺は命の恩人であるマスターことソウイチが帝国と裏で繋がってる証拠を突きつけるとマスターはブラッドスタークに変身し自身の本当の名を告げ俺とタツミを驚愕させたのだった！

ア「最後の方ちよつと雑じゃないか？」

セ「詳しいことは第5話の中で話してるから読んでる皆も一緒に観ようね！」

ア「……読んでる皆って誰のことだ？」



エ「エボルトツ……それが俺の本当の名だ」

セ「星狩りの民ブラッド族のエボルト……つまりお前はこの星で生まれた生き物じゃないってことか？」

エ「正解つまあもつと広く言えば……俺はこの世界とは違う並行世界の宇宙で生まれ……そこで数多くの星を滅ぼした知的生命体といったところだ」

セ「この世界とは違う並行世界……だと？」

ブラッドスターク改め：エボルトは自身の生い立ちを

セントとタツミの2人に簡潔に説明した

そこでセントが引つ掛かったのは“並行世界”というワードだった、つまりはいま自分たちがいる世界以外にも複数の世界が存在し

エボルトはその中の1つの世界の宇宙で生まれたということになる

セ「並行世界：パラレルワールドは存在しているということか!？」

エ「そういうことだよ」

セ「つ：：ちよつと待てよっお前は別の世界で生まれたって言ったよな!なら：：どうやってこの世界にやってきたんだ?」

エ「まあ俺にも色々とおあってなあ。その結果この世界にたどり着いたとだけ言っておこう…」

セ「なら次の質問だ：エボルトッお前の目的はなんだ?」

エ「俺の目的は：：：セントッお前の成長だ」

セ「俺の：：成長だと?」

エ「そうだつそのためにもお前には共に戦う仲間を作りつそこで切磋琢磨しながら己の強さを高めていってもらいたかったんだ」

セ「だから俺にナイトレイド入りを進めたのか……けど俺が強くなるんことがお前に何の関係があるっていうんだ？」

エ「そこまで喋っちや後の楽しみがなくなるだろお♪そこから先は……お前が俺の求める水準まで強くなったときに話してやるさ」

セ「……」

セントの問いに意味あり気な返事をするエボルト、

“セントの成長”それが一体何を意味するのか

不思議に思ったセントだったが深追いしたとこで

エボルトは本心を答えないだろうと考え

これ以上の詮索はしなかったのであった

エ「さあ〜って正体がバレた以上……お前とはここでお別れになるなあ」

セ「ああ……そうだな」

エ「ふふふ……そうだったこの設備とこれまで浄化したボトルは全てお前にくれてやろう。ただし……」

“カチャツ”

エ「このドラゴンのボトルだけは俺が貰っていくつこいつは俺の計画に必要なボトルだからな」

セ「そのボトルを使って何をする気だ？」

エ「それも後のお楽しみつてやつだ。それじゃつナイトレイドで頑張つて来いよセント…次会う時はつ今より強くなったお前を俺に見せてくれ」

“ シュウウウ… ”

エ「じゃあなセントツ…チャオオ♪」

ドラゴンボトルを手に持ち別れの言葉を述べた後、

エボルトは周囲に白い霧を放出させ姿を消した

その場に残ったセントとタツミは…

何とも言えない表情をしながら先ほどまでエボルトがいた場所を見つめる

タ「セント…あいつは一体何を始めようとしてるんだ？」

セ「…それは俺にもわからない。けど…少なくともこの国にとってよくないことを始めようとしていることだけは確かだよ」

タ「…ッ」

セ「エボルトツ……お前の野望がなんであれつこの国の明日は俺が守ってみせる。そのためにお前と戦わなければならぬというなら……俺は戦うつそしてお前を倒してみせる……絶対にな!!」

―同日夜・宮殿内―

ソ「いやあく……まさかこんなに早くバレちまうとはつやはり姿形は変わつても”あいつ”は”あいつ”ってことか」

？「おやおやソウイチ殿、貴殿がこんな時間に宮殿にいるとは珍しいですなあ」

ソ「これはこれは……誰かと思えば”オネスト”大臣じゃないかつ相変わらず不味そうに肉を頬張つてるな」

オ「皮肉ですかなあ？”肉”だけに……ぬふふつ」

ソ「……人を笑わせたいのならもう少し捻つた方が良いと思うぜ」

オ「これは失礼……ところでつ例の実験の方は順調なのですか？」

ソ「おかげさまでなつあんたが人員や物資を提供してくれたおかげだよ」

オ「礼には及びませぬよ。ソウイチ殿がもたらしてくれたガーディアンの技術はこの帝国を飛躍的に進歩させましたっそれ相応の対価は与えねばという皇帝のお言葉を私が実行したまでのことです」

ソ「そりやどうも。あそうだっ…今日から俺も宮殿住みになったっ色々と迷惑をかけると思うがどうぞよろしく♪」

オ「こちらこそっ…ソウイチ殿とはこれからも友好な関係を築いていきたいと思っておりますので♪」

ソ「ふっ…んじやつ今日はこれで失礼するよ」

オ「ええ…ではつまた会う時まで」

ソ「…（ふふつどの世界にも権力と生にしがみつく輩はいるもんだな、そういう奴ほど…俺の手の平で操りやすいっていうもんだ。精々…残った時間を謳歌することだなっ大臣様よ♪）」

― 3日後・ナイトレイドアジト ―

“ガチャツ”

セ「よしっこれでnascitaにあった設備と荷物は運び終えたな……いやあく本
当に男手が多くて助かったよっありがとう3人とも♪」

ブ「礼には及ばないさっお前はもう俺たちの仲間なんだ、仲間の手を貸すのは当然の
ことだろ（キラツ）」

セ「(なっなんとまぶしい笑顔…イケメンだなブラートは)」

ブ「おいおいそんな見つめないでくれよ……照れるじゃないか／／／／」

セ「(これで”ホモ”じゃなかったら完璧なのになあ〜…)」

タ「どうでもっ…いいけどっ…っっ…疲れたあっ…」

ラ「こんなに荷物があるなんてっ…聞いてねえぞっ…」

セ「だっって言ったら絶対断るでしょ」

ラ「んなっお前オレの心が読めるのか!？」

セ「ラバの性格からして言わないのが得策だと思っただけだよ♪」

ラ「(…いつ…思ってた以上に腹黒い!!)」

エボルトと決別してから3日後…

セントはnascitaにあった浄化装置やらの機械設備とボトル、

そして残っていた食料などをナイトレイドのアジトに
タツミ・ラバック・ブラートの協力を得て運び終えていた

そして浄化装置や機械設備などは

ナジエンダにお願いして用意してもらった部屋に設置し、
n a s c i t a の地下室と同じような環境に仕上げていた

ラ「まったくつゝ：仲間になったと思えば最初から無理難題をナジエンダさんに言いや
がってっ」

セ「本人が了承してくれたんだから別にいいじゃん」

ブ「しかしここにあるモノは一体何に使うんだ？俺には何が何だかさッパリで想像が
できないぜ」

セ「そりゃ“天才”の発明品ですから♪素人には理解できなくて当然だよ」

ブ「そっそうか…」

ラ「(やつぱ、こいつムカつくッ)」

ナ「おっ戻っていたかお前たち」

ラ「あつナジエンダさん！」

セントたちが雑談しているところに

ナイトレイドのボスであるナジエンダがやって来て、

それに続くようにアカメを含めたその他のメンバーも入ってきた

チエ「おおお〜なんか凄そうなモノがたくさんあるね」

シエ「これ全部帝都の町から運んできたんですか？」

タ「まあ…ね、おかげで体中が痛くなっちゃって」

ブ「俺は良い筋トレになったから文句なしだよ」

ラ「それ言えるのお前だけだよ…」

マ「けどよくバレずに持ってこれたわねっこんな大それたモノ運んでたら目立つんじゃないの？」

セ「それはこの間GETしたこのボトルのおかげさ」

“ シャカシャカシャカツ…スウウ…”

ス「ツ…セントが消えた」

マ「えっ…何どういうこと!?!どこにいったの!?!」

マインの疑問に答えるようにセントは紫色のボトルを取り出し数回振る、

するとセントの体が透明になり：その場から姿を消した

急にセントが消えたことにタツミ・ラバック・ブラート以外の

ナイトレイドのメンバーは驚きセントがどこにいったか周囲を見渡す

シエ「セントさんどこにいったんですか？」

“ヒョイッ”

シエ「ああっ：眼鏡があっ」

チエ「ええっシエーレの眼鏡が宙を浮いてる!？」

“スウウ：”

セ「どうよっこの“忍者ボトル”の力は♪」

そう言うときシエーレの眼鏡を手に持ったセントが姿を現し、

自慢気に右手に持つ忍者ボトルを全員に見せつけた

セ「このボトルは使用すると姿を消すことができるんだ。これを利用して俺やタツミ達の姿を消して帝都の町から荷物を運んできたってわけ：はいシエーレっ眼鏡返すよ」

シエ「あっ：ありますがどうぞごめいませ」

セ「他にも姿を分身させたり手裏剣を出したり音を出さずに移動速度を上げたりなんてこともできるんだ！」

ア「隠密行動を主体とするナイトレイドにはうってつけの力だな」

マ「ちよ：ちよつと待ちなさいよ！そのボトルってあのベルトがないと使えないんじゃないの!?!」

セ「まあ生身でだと100%力を発揮することは出来ないけどビルドドライバーに差し込まなくてもある程度の能力はボトルを振ることで使うことができるんだ」

タ「まっマジかよ…」

ナ「本当に…なんでもありなことをやってのけるな君は」

セ「それほどでもないですよ」

ラ「(おのれええ…ナジエンダさんからお褒めの言葉を貰うとはっセント許すまじ！)」

セ「あそうだったナジエンダさん部屋を用意してくれてありがとうございます。おかげでnascitaからもってきた設備を置くことができました」

ナ「気にしないでくれっこちらとしても…君が我々の仲間になってくれたことに感謝してる。これは私からのせめてもの礼として受け取ってほしい」

セ「どうもですつ俺も…人の命を奪うことはできないけど、ナイトレイドの皆を守る

ために：そしてこの国に愛と平和をもたらす為につナイトレイドにこの力をお貸しします！」

ナ「ありがとうセント：そして改めてつようこそナイトレイドへ！」

そう言いナジエンダは左手を前に出し、

セントはその手を握り2人は固い握手を交わした

こうして正式にナイトレイドに加入したセントだが、

暗殺集団の中で人殺しをしないセントが

どういう役割を持つか気になったマインが口を開く

マ「ところでき：セントはナイトレイドでどういう役割を持つの？」

セ「へえ？」

マ「だってあんた人殺しはしないんでしょっそこらへんどうなのよボス？」

ナ「ああそのことか。セントには主に前線で動くお前たちの後方支援を行ってもらう、依頼があり次第ターゲットの情報収集や戦線離脱時の脱出ルートの確保など幅広く動いてもらうつもりだ」

セ「あとはスマッシュが現れたときの対応だね。奴らにはみんなが持つ帝具でも齒が

立たないから俺がビルドになってスマッシュの相手をする、それ以外だとこの部屋で実験と研究を行うってことくらいかな」

チエ「実験と研究って…一体この部屋で何をするつもりなの？」

セ「それは…：知らない方が良いと思う（ニコツ）」

タ「絶対ヤバイことするつもりだ！」

セ「いまヤバイことするつもりだって思っただろタツミ？」

タ「（ツ…：バレてるうー）」

セ「心配しなくてもマッドサイエンティストじみたことはしないよ。軽く言うとなッシユから採取した成分の浄化とベストマツチの模索…：そしてそれに合った武器の製作やらなんやらだ！あつ時間があつたら皆の活動のためになるモノを作るから楽しみにしててよ♪」

ナ「だそうだつそういうことでみんな…：セントと仲良くしてやってくれ」

ラ「仲良くねえ…：初っ端からこき使われた俺には無理な命令ですよ」

セ「まあそう言わずにつ希望があればラバの活動に役立つアイテムも作ってあげるよ」

ラ「ならその透明になれるボトルをくれ!!」

セ「駄目」

ラ「即答!? なんでだよつ俺が希望するモノくれるんじやなかったのかよ!」

セ「いやだって……絶対やましいことに使うでしょ?」

ラ「うぐつ!!」

レ「だはははははーっラバ見破られてるじやん!」

チエ「セントくん観察力があるねつまさにその通りだよ! ラバつてバレるつてわかっているのに毎回わたしたちがお風呂に入っていると覗こうとしてるんだよ」

セ「やっぱり……ラバツ科学は人が幸せになるためにある力なんだ。このボトルだつてそうだ、スマツシユにされ苦しんでる人たちの命を救いつその人たちの明日を守るために生まれた力なんだ、だからそんな人の道に反する行為のためにボトルの力は使わせないつ絶対にな!」

ラ「わつ……わかつたよ! わかつたからそんな詰め寄らないでくれ!!」

セ「理解がよくてよろしい」

自身の野望があつけなく壊れてしまったことにラバックは少し落ち込む、

一方の女性陣は“当たり前だろ”と言わんばかりの表情で

セントの発言を賞賛し静かに首を縦に振ったのであつた

ナ「あそうだったセント：取り合えずお前の面倒はアカメに見てもらおうことにした」

セ「面倒をみてもらうというと？」

ナ「依頼がない時の仕事のことだ。家事や食料の調達など暗殺稼業以外にもやることはたくさんあってな、そこらへんのことをアカメがお前に教えてくれるからしつかりやれよ」

セ「ああなるほどねっ了解しましたナジエンダさん♪」

ナ「ではアカメツセントのことを頼んだぞ」

ア「わかった」

セ「よしっこれで一通りの話は済んだよね？じゃあ俺は研究に入らせ」

“ガシツ”

ア「セント：今から夕食の食材調達のために山に行くぞ」

セ「えっ今から!？」

ア「そうだっ」

セ「あつあのアカメさん：俺3日間アジトと帝都の行き来で結構疲れてるんですけど」

ラ「おおいっお前荷物ほとんど持ってなかっただろ！」

ブ「大半は俺が荷車で運んだぞ（キラツ）」

タ「それにいま研究しようとしてたじゃんか…本当に疲れてるんならそんなこと言えないと思うけどな」

セ「おっお前らあぁ〜っ」

“ギユツ”

ア「ではセントツ出掛けるぞ」

セ「ちよっ新人にいきなりハードすぎじゃないですかあぁーっ?!?!」

セントの叫びを聞きつつもアカメはその細い腕のどこに力があるのかと…
言わんばかりのパワーでセントの右腕を掴み強引に外へと連れていった

ラ「へえっ一矢報いてやったぜ！」

タ「まあ言われればなしってもあれだからな…今回はラバに乗っかってやったよ」

シエ「けどセントさん大丈夫でしょうか…ここらへんには獰猛な危険種がたくさんいますし、アカメが一緒とはいえ加入初日のセントさんには負担が大きいいようにも感じますが」

マ「大丈夫でしょっ私たちが手も足も出なかつたスマツシユを倒せる奴なのよ、寧ろそれくらい出来てもらわないとナイトレイドじゃやってけないわ」

終わったころには体中バキバキで一歩も動けない状態になっていた

セ「アツアカメ…さすがにキツイツ…少し休憩しようよ」

ア「そうだな…ではここからは山菜を採っていくことにしよう」

セ「食材採取は止めないのね（泣）」

そこから更に1時間…セントはアカメの指導のもと山菜や果物を採っていき、

ここでようやくアカメの口から「今日はここまでにしよう」と

終了を告げる言葉が発せられその場に倒れ込む

セ「もつもう無理い…」

ア「お疲れ様セントっ中々良い手際だったぞ」

セ「それはどうもおお…」

ア「だが体力はもう少しつけた方が良く、このくらいでばてていては今後の任務で満足に動くことができないぞ」

セ「身に染みて感じたよっ如何に自分がビルドの力に頼りきってたっていうこともね…
…気づかせてくれてありがとうアカメ」

ア「礼には及ばない…私たちは仲間だつ仲間のために力を貸すのは当然のことだろ
／＼／＼」

そう言いアカメは優しく微笑みながらセントに右手を伸ばす、
セントはというとそんなアカメの顔を見て“可愛い”と思いつつも
それは心の中にしまい…自身も左手を伸ばしアカメの手を握り立ち上がる

セ「よいしょつと…んじやアジトに戻るとしますか」

ア「…セントツお前に言っておきたいことがある」

セ「んつどしたの急に？」

ア「…私たちナイトレイドは国を変えるためにこれまで数多くの命を葬ってきた、
だがセントが以前言ったようにどれだけ綺麗ごとを並べてもやっていることはただの
人殺しだ…いつかは自分たちにその咎めが来ることも覚悟している」

セ「……………」

ア「けど私はつ…例え咎めを受けることになったとしてもつ今ここにいる仲間たちだ
けは失いたくない！」

セ「……………」

ア「私も皆も……これまでたくさん大切なモノを失ってきた、その辛さは……痛みは決して慣れることはない！失うたびに……心に穴が開くような苦しみが来る……そんな経験つ私はこれ以上したくないんだ！」

セ「アカメ……」

ア「だからセントツお前も……これだけは約束してくれ……絶対に死ぬなっ」

赤く透き通った瞳を見開かせ力強くその言葉を発したアカメは……

これまでセントが見てきた冷静でどこか天然な少女の姿ではなかった

誰かの死を間近で何度も見てきたからこそ言える重い言葉、

それを聞いたセントは思った……アカメは誰よりも仲間想いで誰よりも心が弱い少女なんだと

だからこそ普段はその心を隠し、国を変えろという目的を達成するために

手に持つ村雨で多くの命を斬ってきたんだと……そう悟った

なら自分が取るべき行動はただ一つ……

そう思ったセントはアカメに近づきあるお願いをした

セ「……アカメツ右手を拳にして小指だけ伸ばしてみて」

ア「へっ……何故だ？」

セ「良いから♪」

ア「??？」

言われるがままアカメは右手を拳にし、

その状態のまま小指を伸ばしセントの前に差し出す

それを見たセントは自身も右手を同じ状態にし、

目の前にあるアカメの小指に引っ掛けるように交わらせる

ア「セント……これはなんだ？」

セ「“ゆびきり”っていう約束を守ることを誓うためのおまじないだよ」

ア「おまじない……」

セ「……約束するっ俺は絶対死なない！この国を変えるために……愛と平和をもたらすために……そしてナイトレイドの皆と明日に行くためにっ俺はアカメたちと共に生きる

よ!!」

ア「セント……」

セ「んっ？」

ア「そつその……ありがとう／＼／＼」

セ「どういたしまして……あそうだつ俺もアカメに言わなきやいけないことがあつたんだ」

ア「へえっ？」

セ「これからよろしくね……アカメツ」

ア「ツ……ああつよろしくセントツ」

こうしてセントはアカメの願いを守る意味を込めてゆびきりを行い、

アカメも先ほどとうつて変わりどこか安心したような笑みを浮かべながら

セントにお礼を言い……セントもいつもの感じでそのお礼の言葉を受け取った

そしてセントは改めてナイトレイドと共に歩む決意を胸に抱き、

仲間であるアカメにその意思を示したのであつた

セ「んじやつ……アジトに帰るとしますか」

ア「そうだな……そろそろ向こうも準備を終えてるはずだ」

セ「準備って……なんの準備？」

ア「そんなの決まってるだろ……」

ナ「それではっセントがナイトレイドに加入したことを祝って…」
一同「乾杯っっ!!」
セ「かつ乾杯……」

アジトに戻ってみればどういふことか、
ナジエンダの生物帝具ことスサノオ（スーさん）が

持ってきた食材を調理し豪華な料理へと仕上げた
そしてテーブルにはお酒を含めた様々な飲み物が用意され、

何事かと思っていたセントだったがナジエンダの発言によつてその疑問は解消され
た

そう…これはセントがナイトレイド加入を記念した歓迎パーティーなのだ、
先ほどアカメがセントを半ば強引に外に連れ出したのは
その準備をセントがいない間にしようというナジエンダの提案だったからだ

セ「まさか俺の歓迎パーティを開いてくれるなんて……本当に仲間想いな組織だな
ナイトレイドって」

レ「ぷはあつ……やつぱこういう賑やかな中で飲む酒は最高だな♪」

セ「(レオーネは酒が飲めればなんでもいい感じだけど)」

ス「セントツお前の為に腕によりをかけて作った！遠慮なく食べてくれ!!」

セ「あつありがとうスーさん……ではいただきます」

“パクツ……モグモグツ……”

セ「ツ!! (なつなんだこの肉!!すげえ柔らかいし噛んだ瞬間肉汁が溢れてくる……そ
して肉本来の旨味を前面に押し出しつつもしつこくない甘さと塩味……最っ高だああ
♪)」

タ「美味いだろセントツ」

セ「ああ……これぞまさにベストマッチオブベストマッチだあ♪」

チエ「何その表現？」

セ「こんなに美味しい料理を作れるなんて……スーさん本当に帝具なの？」

ナ「ああつスサノオは元々要人警護を目的として作られた生物型の帝具で戦闘能力は
もちろん家事全般を完璧にこなすスキルを持ち合わせているんだ」

セ「凄いな……んつそういえば生物型帝具にはまだ未解明な部分が多くあるよな……」

できることなら体を分解して実験したい♪」

タ「なあつ駄目に決まってるだろ！」

マ「そうよつスーさんは私たちの仲間なのよ!!」

セ「ジョークだよジョーク♪」

タ「お前が言うのと本気にしか聞こえないんだよ!!」

シエ「まあまあそう熱くならずには：セントさんっ飲み物のお代わりはいりますか？」

セ「あつ出来たらもらえますか？」

シエ「はいっ」

ス「シエーレッツそこにオレ特製の生絞りオレンジジュースがある」

シエ「あつこれですね！セントさんどうぞ…」

“ ツルツ ”

シエ「ふわあああつ」

“ バシヤアアアンツ ”

タ・マ・ラ「「あつ…」」

シエ「はっはわわわわっ…」

セ「……………最悪だあ」

げっ

セ「いいいいよそんなの!!俺は気にしないから!!」

ス「俺が気になるんだっ」

セ「専業主婦かあんたは!？」

“ガシツ”

セ「ひいっ!!」

ス「アカメツ俺がセントを抑える…その間に服を脱がすんだ!!」

ア「わかったスーさん」

セ「分かったじやねえよ!!何普通に返答してるのさアカメツ女子なんだからそこはも

う少し恥じらい持ってよ!!」

ア「大丈夫だセント…すぐに終わるからジツとしていてくれ」

セ「語弊を生む発言をするな!!」

ア「ではいくぞ…セント」

セ「ちよっ…服を掴むなっ引っ張るなっ…止めっ止めてっ…ぎい

やあああああぁーっ!!」

こうして…セントは良い意味でも悪い意味でも

ナイトレイドの洗礼を受ける形となったのであった

タ「(〆)愁傷さまセント…けどすぐ慣れるよっ俺も最初そうだったし」

ブ「おっ随分賑やかなことになってるなこっちは」

レ「あははははーっセント何されてんの!!？」

タ「姐さん…飲みすぎだつて」

“ to be continued ”

【次回予告】

ナ「セントっお前に初の任務を言い渡す」

“ ナイトレイドでの初任務 ”

セ「見返りを期待したら…それは正義とは言わない」

エ「お前ならより強いスマッシュにすることができるかもしれない」

“ 迫りくるエボルトの脅威 ”

セリユ「絶対正義の名の下につ悪をここで断罪する!!」
ビ「力を振りかざすことが正義なんて…俺は絶対に認めない!!」

《第6話・偽りのジャステイス》

ビル斬る劇場#1・懐かしの味

ーナイトレイドアジト・セントの実験室ー

セ「……ふわああく……ああもう夜11時かつどうりで眠い訳だ」

夜も更け静かな時間が流れているナイトレイドのアジト、

そこにあるセントのために用意された実験部屋にて

セントはある装置の開発に励んでいた

デスクの上にはカメラのようなモノから

指のサイズほどの小さな機械がたくさんあり、

これをセントは大量に生産していたのだ

セ「明日は確かタツミとブラートとの稽古の日だったな……そろそろ寝ましょうかね」

“グウウウウ……”

セ「……寝るにしても空腹では寝られんっ取り合えずキッチンにいきますか」

集中して作業していたため少しお腹が空いたセントは

食べる物を探しにキッチンへと向かった

ちなみに夜11時ということもあり

他のナイトレイドのメンバーは寝ており

アジト内は静寂につつまれていた

そんな中セントはキッチンに到着し、

少し前に作った特製の冷蔵庫を開き

何か食べる物がないかと中を見渡した

セ「うーん…夜食うにしては重い物ばっかだなあ」

ア「んっセントか？」

タ「なんだセント…まだ起きてたのか？」

セ「へえっ…アカメにタツミ…お前たちこそこんな夜遅くに何してんの？」

タ「あああ…実は飯食い終わった後に自主練しててさっそこにアカメがやってきて特訓に付き合ってもらったんだ」

ア「1人でやるより2人でやった方が効率が良いし実践に近い模擬戦も行えるから

な

セ「なるほどねっ…にしてもよくあんなハードな夕食たべてから動けるよね」

※ちなみにこの日の夕食はコロツケ丼・唐揚げ乗せであった

セ「してこんな時間まで特訓したは良いものの動いたせいでお腹が空きここに来たと」

タ「まっまあそんなところ／＼／＼」

ア「動いた後はお腹が減る…自然の摂理だな」

セ「まあ人間である以上それは避けられないものね…けど冷蔵庫にあるモノ夜食うにしてはヘビーな物ばっかだよ」

ア「私は平気だぞ」

タ「アカメ…一応女の子なんだからそういうところは気にした方が良いかと」

ア「そうなのか？」

タ「(はあああ…駄目だこりゃ)」

セ「…しようがないっそれじゃ俺の数少ない料理を君たちに披露しよう！」

そう言うとセントは冷蔵庫にあつた卵を5つほど取り出し、

用意した木製ボウルに卵を割り中の黄身を入れていき

それを泡立て器で手際よく混ぜていく

程よく黄身を混ぜたところでセントは砂糖を取り出し、
大きじで5杯ほどの砂糖を黄身の中に入れ再び混ぜ始める

黄身と砂糖を十分に混ぜ合わせたところで

セントは焔炉に火をつけ油をしいたフライパンを置き、

そこに溶いた黄身を流しこみ焼いていった

タ「……なあセント…これは何を作ってるんだ？」

ア「私も見たことない調理の仕方だな」

セ「見てればわかるよ…」

その後…セントは焼いた卵の黄身を丁寧に巻いていき、

巻き終えたらまた黄身を流して焼き巻いていく…

この工程を何度も繰り返し返していった

しばらくすると…焼いていた黄身は厚みを増していき、

最後にセントはそれを四角い形に整えてから皿にのせ

用意した包丁で均等な厚みに切りタツミとアカメの前に皿ごと差し出す

セ「はいっセントくん特製の“卵焼き”の完成です！」

タ「卵焼き…そういう料理名なのか？」

ア「初めて見た料理だ…卵の黄身がこんな厚みのある物になるなんてっ」

セ「味は俺好みにしてるから合わないかもしれないけど…まあ食べてみてよ♪」

タ「おうっいただきます」

ア「いただきます…」

アカメとタツミは箸を使い切った卵焼きを1つ取り、

それを口に運び味を噛みしめるように食べた

セ「…どう？」

タ「…甘っ…甘すぎるっこれ砂糖入れすぎじゃないか？」

セ「やっぱそういう反応だよね…俺にはこれくらいが丁度良いんだけど」

タ「どんだけ甘党なんだよ…」

ア「……………」

セ「アカメはどうっもし不味いなら無理して食べなくても…」

ア「美味いっ」

セ・タ「へえっ!?!」

ア「凄く美味いよセントツもう1つ貰ってもいいか!?!」

セ「うっうん…:どうぞお召し上がれ」

まさかのアカメの反応にタツミはおろかセントツまでも目を見開いた、

普通ならタツミのような反応が当たり前だと思っていたため

アカメの“美味い”発言は予想しておらず驚いた表情をしていた

セ「アツアカメ…:本当に美味しい?」

ア「ああっ私は食に関しては決して嘘は言わない。この卵焼きという料理…:確かに少し甘いとも感じたが卵の本来の旨味と甘味が合わさり目玉焼きと違った味を出している、セントツが入れた砂糖も卵の持つ甘味を更に引き出し旨味成分を放出させ味を滑らかにしつつ味を美味しくしている…:こんな美味しい卵料理っ生まれて初めて食べたぞ!」

タ「あっあのアカメがすげえ饒舌になってる!そんなに美味しいのかこの卵焼きって…:それとも俺の舌がおかしくなっているのか!?!」

セ「まつまあ喜んでもらえたのなら何よりだよ」

アカメの評価が終わったところでセントも箸を使い

皿にのっている卵焼きを一つ取り口に運び食べる

するとセントは幸せそうな笑みを浮かべ、

“最高だあ”と言いつつ残った卵焼きを

アカメと一緒に食べたのであった

セ「はああくやっぱこの卵焼きの味は格別だな♪」

ア「同感だッ」

タ「あははっ……にしてもこの卵焼きっていう料理つ初めて見たけどどこで調理法を覚えてたんだよ？」

セ「……そこらへんのこと何も覚えてないんだよねえ」

タ「あつ……ごめんっそういえば記憶喪失だっけってたよな」

セ「気にしてないよ、それに俺も不思議に思ってるんだよねっ自分がどこで生ま育ったかも覚えてないのに……何故かこの卵焼きの作り方は記憶の中に残ってたんだ」

ア・タ「……」

セ「それにつこれもよくはわからないんだけど……この甘い卵焼きを食べるとどこか懐かしく幸せな気持ちになれるんだ。なんて言うんだろう……母親の温もりを思い出すっていうか／／／」

タ「そうなんだ……確かに不思議だな」

ア「けど……私にはなんとなくだがわかる。これを作った人はとても優しく誰かのことを想つてこの卵焼きを作っていたんだということが……」

セ「なんかっ……ちよつと恥ずかしい気分だな／／／」

ア「セントツ……いつかまたこの卵焼きを作つてくれないか？」

セ「勿論っアカメが望むならいつだって俺が作つてやるよ！」

ア「約束だぞっ」

セ「ああっ……約束だ」

セントはそう言うのと右手を拳にし小指を立て、

アカメもそれを見て自身の右手の小指を差し出し

互いに小指を交わらせ“ゆびきり”をしたのだった

タ「えっ何それ!?なんかのおまじないか!？」

セ「まあそんなとこ♪」

ア「私とセントだけの約束だっ」

セ「ツ!!（こっこの子は どうして そうい うセリフを 恥じ らい なく 言え るん だよ // // //

／
」

ア「んっ…どうかしたかセント？」

セ「…なんでもねえよ // // //

“ 次回・くしやつとする笑顔 ”

ビル斬る劇場#2・くしゃつとする笑顔

ーナイトレイドアジト・訓練場ー

ブ「2人とも…準備は良いか？」

タ「いつでもいいよ兄貴っ」

セ「俺も…準備OKだっ」

ブ「よしっそれじゃ両者構えて」

タ「……」

セ「……」

ブ「……始めっ」

タ「っ……うおおおーっ」

セ「(いきなり正面か…真っ直ぐなタツミらしい攻め方だなッ)」

“ギイインッ”この日…セントはブラートの指導の元、

タツミと実戦に近い形で模擬戦での訓練に取り組んでいた

セントは少し前に完成した刀型武器“4コマ忍法刀”を、
タツミは自身が使い慣れた剣を使い互いに斬りあつていった

タ「ふうつはああつ…はあああーっ」

“ギインツギインギインツ”

セ「ほおつはあつ…せえいつ」

“スピインツ”

タ「ツ…その刀もお前の発明品か!!？」

セ「そつ天才の俺が作った最強武器だ!!」

“スピインスピインツ”

タ「くうっ!!」

セ「どうしたタツミツ防いでばっかじゃ訓練にならないぞ!!」

“スピインツスピインツ”

タ「ツ…言わせておけばっ！」

4コマ忍法刀の連続斬りをなんとか防いだタツミはセントをみかえすべく、
一度セントから距離をとり手に持っていた剣を背中の鞘に戻す

セ「(抜刀をする気か? 本来は日本刀などでやる技術だ: 西洋の剣でそれをやるつもりなのか)」

タ「(悔しいがセントは俺よりも強い: 小手先の技術も通用しないだろう: ならつこの一太刀であいつに一撃お見舞いするしかない!!)」

ブ「……」

タ「……行くぞ!!」

“ シュウウウンツ ”

タ「はああああーっ」

セ「ツ!!」

タツミは地面を蹴りつ激突すくらいスピードでセントとの間合いを詰め、近づいたところで背中の鞘におさめていた剣を抜きつセントに斬りかかった

“ ギイイーンツ ” だがセントはその攻撃を4コマ忍法刀で難なく防ぎ、

そのまま剣を押し返し無防備となったタツミに向かって4コマ忍法刀を振り下ろす

セ「貰いつ」

タ「なんのおつ!!」

“バアアツ”

セ「(へえつ…嘘っあの体勢から飛びやがった!)」

タ「後ろががら空き…今度こそ貫ったアアアアア!!」

セントもビツクリ…タツミは4コマ忍法刀が振り下ろされた瞬間に

空に向かってジャンプしてセントの攻撃を回避し、

そのまま空中で体勢を立て直した後つ背中の防御が薄くなったセントに向かって突っ込む

今度こそセントに一撃を与えられる…普通なら誰もそう思える状況だ、

だが忘れてはいけないつ相手はその常識が通用しない男・セントであるということ

“キンツ”

「分身の術」

“BOOM!”

タ「ツ…あれっセントがない」

セ「はいつチエックメイト!!」

“ シャキンッ ”

タ 「えっ…ええっ…ええええくくっ !! セツセントがつ…2人になってる !!」

セ 「「どうよっ俺の発・明・品♪」」

なんと…セントはタツミの剣が直撃する瞬間に4コマ忍法刀の力を使い自身の分身を1体作りつその際に発生した煙を利用しタツミの攻撃を回避するそして地面に着地し完全無防備となったタツミの首元に分身と一緒に4コマ忍法刀の刃を突きつけ…高らかに勝利宣言をしたのだった

“ BOOM! ”

セ 「分身体を生成し同時攻撃を可能とするこの武器…やっぱ俺って天才だよなあ♪」

タ 「おおいっそんな技使うのありかよ!」

セ 「戦場つてのはいつ何が起きるか分かんないだろ?どんな時でも冷静に対応できな

きや命がいくつあっても足りないぞ」

タ 「ぐぬうっ…」

ブ 「そこまでだっ2人ともお疲れさん」

タ 「兄貴い…摸擬戦とはいえあんな技使うの反則じゃないか!」

ブ「タツミ：セントの言う通り戦場では何が起きるか分からないし相手が常人ばかりとも限らない。帝具使いやスマッシュユといった敵がいる以上つ常に相手の行動の一手二手先を読んで動くことを意識しないとこの先の戦いで生き残っていくのは難しいぞ」
タ「ううっ…」

ブ「とはいえタツミの言い分ももつともだ、セント：訓練っていうのは己の技量を高めるためにやるモノだっ確かにお前の武器の能力は優れているがそれに頼ってばかりじゃ自身の成長に繋がっていかないぞ」

セ「っ…さすが元軍人：的確なアドバイスありがとう」

ブ「ははははっ…だが2人とも持っている潜在能力は高い!!それを磨き鍛えていけば今よりもっと強くなれるはずだっそのことを忘れずに今後も精進していけよ」

タ「おうっ!!」

セ「了く解♪」

ブ「よしっ今日はここまでにしとこう…あそうだセントツナジエンダから1つ頼み事があるそうだ」

セ「頼み事？」

―帝都・市場街―

セ「チエルシーと一緒に買い出しを頼む”って…ボスの頼みだからスゲエことなんだろうと思つてたらただのおつかいかよ」

チエ「そう言わないの、アジトで活動していくためにも日常品や食材やらを補充しなきゃいけないんだからっこれも一つの任務だよセントくん」

セ「それはわかつてるけどさあ…なんで俺とチエルシーなの？」

チエ「大半のメンバー（アカメ・タツミ・ブラート・シエーレ・ナジエンダ）は顔が割れてるし、ラバツクは今日貸本屋での仕事があるしスーさんはアジト内で掃除や洗濯といった家事やつてるし…顔がバレてなくなおかつ暇なメンバーと言つたら私とセントくんだけなんだよ」

セ「レオーネは？」

チエ「スラム街で飲んでる」

セ「マインは？」

チエ「寝てる」

セ「あの野郎共ツ…今日2人の晩飯に特製激辛ソースぶちこんでやる!!」

※セント特製激辛ソースⅡ300万スコヴィル

チエ「さあてつ必要なモノは買い揃えたし…そろそろアジトに戻ろつか」

セ「そうだねっ早く戻つて実験したい「誰かあゝゝっ!!そいつを捕まえてええ!!」とつ
何事!」

セントのセリフを遮るように女性の大きな声が街中に響いた、

その声の方を見てみると叫んだと思われる女性の前にバッグを持った男が走つてい
た

チエ「窃盗かな?あの人災難だね…あんなに距離離れたんじやもう追いつけな」

“ シヤカシヤカシヤカツ…シユウウンツ ”

チエ「んっ…あれっセントくん?」

泥棒「なあつなんだお前は!」

チエ「へえっ…てっセントくん!」

セ「窃盗は…良くないよッ」

“ バアアーンツ ”

泥棒「へぶしっ!!」

チエルシーが驚いたのも束の間：セントはラビットボトルの力を使い

窃盗犯の前に素早く移動しつ有無を言う前に窃盗犯の顔に回し蹴りを放った

蹴りを喰らった窃盗犯は勢いよく地面に倒れ：そのまま気絶した、

それを確認したセントは窃盗犯が持っていたバッグを手に取り持ち主である女性に
手渡す

セ「これ貴女のですよね？」

女「あつありがとうございます！なんとお礼を言えればいいかつ」

セ「気にしないでください！人として当然のことしただけなので♪」

チエ「ちよつちよつとセントくん！」

セ「んっ何チエルシー？」

チエ「“何？”じゃないよつ私たちの立場わかってる!?!いくら顔割れしてないとはい
え目立つ行動は控えないと駄目だよ！」

セ「んなこと言つたつて困つてる人がいたら助けなきや人として駄目でしょ？」

チエ「そりやそうだけどお…」

セ「？」

チエ「とつとにかくアジトに帰るよ！」

セ「はいはい…あつこれ良かったらどうぞ。自家製の桃味の飴ですよ」

女「えっ…あつ…ありがとうございます」

チエルシーに諭されるも己の信念のままに行動するセントにはあまり響かなかった
よう、

これ以上言うのは時間の無駄だと判断したチエルシーはセントを連れその場を離れた

だが…その後も何故か歩き進める先々で喧嘩をするカップルやごろつきに絡まれる
青年、

更には小さな女の子をいじめる数名の男の子の集団に出くわすなどイベント続き
だった

それを目撃したセントはチエルシーの手を振りほどきその争いごとの中に入り込み、
喧嘩の仲裁をしたりゴロツキを追っ払ったりいじめを受ける女の子を助けたりなど
…

人としては良い意味で目立つも…暗殺稼業をするナイトレイドとしては悪い意味で
目立ってしまった

子(女)「ぐすつ…怖かったよおつ…」

セ「ほらもう泣かないでつまたあいつらがいじめに來たらお兄ちゃんが愛の拳でお説教してあげるから」

子(女)「うんつ…ありがとうお兄ちゃん！」

セ「ふふつ…それじゃそんな素敵な笑顔を見せてくれた君にはこの飴ちゃんをあげよう」

子(女)「わああつ飴だあ！ありがとうお兄ちゃん！」

セ「どういたしましてっそれじゃ元気でねえ♪」

子(女)「バイバァ〜イッ」

セ「バイバァ〜イッ」

“バツ”

チエ「セントくう〜ん！（怒）」

セ「あつ…だつてしょうがないじゃんつ条件反射でやつちやうんだから！！（開き直り）」

チエ「ああもうつとにかく帝都の壁外まで走るよ！」

“ガシッ”

セ「ああつちよつ…腕掴んだまま走るなあああ〜〜つ!!」

このままではまた何かの騒ぎに出くわしたらセントが行ってしまう…

そう考えたチエルシーはセントの腕を掴みつ猛スピードでその場から走り去っていった

余談だがセントは争いごとの被害者全員に飴を配っていたことから

“ 飴を配る正義の使者 ” という別の名で存在が広まり帝都の町ではちよつとした有名な人となっていた

―帝都・壁外(草原)―

チエ「まったく言ってる傍から騒ぎの中に入っていくなんて…何考えてるのさ!」

セ「だから言っただろっ条件反射だつて!」

チエ「言い訳しないの!」

セ「つ…」

チエ「……けどセントくんって不思議だよねっ普段は自意識過剰なナルシストって感じなのに、誰かが困ってるのを見ると助けたくなるなんて」

セ「自意識過剰なナルシストって……全然褒めてねえし」

チエ「気になってはいたんだけど……その人助けの活力はいつたどこから来てるの？」

セ「……くしゃつとなるんだよ」

チエ「えっ？」

セ「誰かの力になれたら……心の底から嬉しくなって、くしゃつとなるんだよ俺の顔。ビルドに変身してる時はマスクの下でみえねえけど」

チエ「ええつと……それだけ？」

セ「それだけだよ……どうして？」

チエ「だって人助けをしたからって必ず感謝されるわけじゃないんだよっ自分に何の得もないっていうかあ……損しかしてないっていうかあ……」

セ「“見返りを期待したら、それは正義とは言えない”」

チエ「ふえ？」

セ「頭の中に残ってる言葉なんだ。記憶を失っても俺が誰かのためにビルドとして戦えたのは……この言葉があったからなんだ」

チエ「見返りを期待したら、それは正義とは言えない」か……この言葉を言った人つセントくんと同じでどうしようもないお人好しだったのかもね」

セ「はははっ…かもしれないね、けど…俺が戦うことで誰かが笑えるんならっお人好しのままでも良いんじゃないかって思うんだ」

チエ「そっか…なんとなくだけどっセントくんがどういう人なのかわかった気がするよ」

セ「ならいいんだけど…あそうだっ」

チエ「ん？」

セ「チエルシー…今日は色々巻き込んでごめんね。今後も色々迷惑かけるかもしれないけど…これからもよろしく頼むよ♪」

チエ「ツ／＼／」

くしゃつとした優しい笑みをしながらチエルシーに語りかけたセント、その笑みを見たチエルシーは何故か頬を赤く染めらせ…その顔をセントに見せないよう両手で顔を隠した

セ「んっ…どしたのチエルシー？」

チエ「(いつ今の顔は反則だよお／＼／＼)」

セ「ねえ…大丈夫？もしかして俺…変なこと言っちゃった？」

チエ「へえっ…うっうん！そんなことないよっ!!」

セ「なら良かった…さあてっもうすぐ日が暮れるし、これ使つてアジトに戻るとしま
すか」

「ビルドチエンジ」

“カシヤカシヤカシヤツ…ドオンツ”

セ「はいチエルシートこれ被つて後ろに乗つて」

チエ「おおおっ!!これ乗つてみたかったんだよっありがとうセントくん！」

セ「良いつてことさっ…迷惑かけたお詫びつてことで」

チエ「さすがっ自意識過剰でナルシストな正義の味方なセントくん！」

セ「だから褒めてないじゃん…まあいいやつそれじゃ飛ばすからしっかり掴まってね
！」

チエ「うんっ」

セ「ではアジトに向かつてっレッツゴーっ!!」

“次回・科学者としての自分”

第6話・偽りのジャスティス

《前回のあらすじ》

セ「仮面ライダービルドでありつ天才物理学者であるセントは帝都に現れる怪物スマッシュと戦う日々を送っていた、そんなセントは異世界からやってきた星狩りの民・エボルトの野望を阻止するため…そして愛と平和を帝国にもたらすために暗殺集団・ナイトレイドに加入する決意を固めた」

タ「おおおっこれが噂の“あらすじ紹介”ってやつか!」

セ「唐突に現れるんじゃないよタツミツてかアカメはどしたの?」

タ「お腹空いたから肉食ってくるって」

セ「肉だ?!冷蔵庫にあるやつは保存用だぞっあれ食べられたらこの1週間どうやって生活していけばいいんだ!!」

タ「セントがこんな感じだから…紆余曲折ありながらもナイトレイドの仲間たちに迎えられたセントにナジエンダさんから初の任務が言い渡される…果たしてセントの運命や如何にっそれでは第6話をどうぞ!」

セ「ちよっ俺の仕事取るんじゃないよ!」

―ナイトレイドアジト・セントの実験室―

セ「……………うしつビルドドライバーのメンテナンス完了つと!!」

チエ「やつと終わつたの? 随分時間かかったね」

セ「精密機械つていうのは時間かけて内部を細かく見てメンテしないと駄目なの、ちよつとした変化が大惨事に繋がるかもしれない…とても繊細で傷つきやすいのが機械なんだよ」

チエ「ふううくん…なんか女の子みたいだね♪」

セ「まあそういう例え方もあるか……んつつかチエルシーはなんでここにいるの?」

チエ「用がなきや来ちや駄目なの?」

セ「べつ別にそういう訳じゃないけど…」

チエ「ならいいじゃん! それに…セントくんが夢中になつて機械いじりしてる姿見るのっなんか好きなんだよねえ♪」

セ「そつそういうセリフを安易に言うんじゃないよ／／／／」

“パクツ”

チエ「おつ今日は何味の飴なの!？」

セ「コーラ味…って言ってもわかんねえか」

チエ「コーラ? 聞いたことないなあ…ねえっ! っ頂戴!」

セ「ほいつ」

チエ「ありがとうセントくん♪」

セ「うっうん／＼／＼」

セントがナイトレイドに加入して1週間、

一先ずセントはアカメの指導のもと基本的な仕事を覚え空いている時間は自身の研究と体の鍛錬を行っていた

特に鍛錬の方についてはタツミやブラートの協力を得て

まずは基礎体力を上げることから始めており、

筋トレやタツミとの稽古でそこからへんを鍛えていた

そのおかげもありこの1週間で体力はかなり上がり、

初日に悲鳴を上げたアカメとの狩りも問題なくついていけるようになり

それに伴いボトルを使用した際の負荷も緩和されたのだった

セ「さあてつらバが監視装置の扱い覚えたか見に行きますか」

チエ「例のアジト周辺に設置したっていう機械のこと？」

セ「そっ少しでもらバの負担を減らすためにね：チエルシーも来る？」

チエ「勿論ッ」

“監視装置”それはラバックの頼みでセントが作った装置のことである、

知つての通りナイトレイドのアジト周辺の監視及び索敵は

ラバックの帝具“千変万化・クローステール”の力を使い行ってきた

だがいくら帝具を力を使っているとはいへ

数キロの広範囲をラバック1人で担うには負担が大きすぎる

そう考えたセントはアジト周辺の木々や地面に

索敵用のセンサーと監視用の小型カメラを数台設置し、

誰でも監視ができるよう複数のPCとモニターを設置した部屋を用意した

これによりラバック以外のメンバーも監視の仕事をこなせるようになり、

それと同時に広範囲の索敵と監視が行えるようになったので

ナジエンダは喜びセントのことを賞賛した（余談だがラバックはこれに嫉妬した）

セ「ラバいるっ入るよお」

“ガチャツ”

ラ「んっ…おおくセントツそれにチエルシーも」

チエ「どうラバっ機械の扱い覚えられた？」

ラ「なんとかな…しかし思ったより扱いが難しいんだな機械って」

セ「まっ最初は誰だっってそう思うよ。けど慣れちまえばこれほど便利なモノはないだろ？」

ラ「そうだなっにしてもこんな装置を1人で作っちまうなんて…お前すげえよな」

セ「凄いでしょッ最高でしょッ天才でしょ！」

ラ「ああしまった…こいつ調子に乗らせるところなるの忘れてた」

チエ「あはははっ…」

セ「さてっんじや次はチエルシーの番だな」

チエ「えっ私も!?!」

セ「そりやそうでしょっラバの負担が減る様に皆で監視できるために作ったのがこの装置なんだから、チエルシーもちゃんと操作覚えてね」

チエ「えええ…それじゃセントくんが操作方法教えてよ！」

セ「俺は他にやることがあるからそこらへんはラバから教えてもらって」

チエ「ちえっ…ノリが悪いなあ」

セ「ほんじやラバツチエルシーを頼む。チエルシーが終わったらシエーレやブラートにも操作方法教えてあげてね」

ラ「なあ…これ俺の負担減らすための装置だよな？なのに教えるの俺なのっつかシエーレさんやブラートにこれの操作は厳しいんじゃないか!？」

セ「何事もチャレンジだよ♪じゃあよろしくねえ〜」

ラバツクの肩をポンポンと叩きながらセントは部屋を後にし、

残ったラバツクは腑に落ちない顔をしながらセントが出ていった扉の方を見つめた

ラ「あいっつ…面倒ごとを俺に押し付けやがって！」

チエ「ほらラバツク早く教えてよ。私だって暇じゃないんだから」

ラ「へいへいっ…わかりましたよ」

ラバツクは文句を言いつつも言われた通りチエルシーに監視装置の操作方法を教えるのだった、

一方セントはアジト内の廊下を考え事をしながら歩いていった

セ「監視装置は完成したから次はブライトに頼まれた特訓用の装置を作るか、それともシエーレに頼まれた多目的眼鏡を作るか、レオーネのは……まあこれは後回しでいいや」

ナ「おおセントツここにいたか」

セ「あつボス。俺に何か御用で？」

ナ「そうだったここだとあれだな……いつもの広間に行こう」

セ「了解ッ」

セントの前に現れたナジェンダはセントを連れいつもの大広間へと向かう、そして定位置に置かれた椅子に座ると懐から煙草を取り出し口に啜える

セ「煙草の吸い過ぎは体に毒だよ」

ナ「これだけはやめられん」

セ「煙草味の飴作ろうか？」

ナ「それ美味しいのか？つかそれ以前にそんな味の飴作れるのか!？」

セ「天つ才の力舐めてもらっちゃ困るよ♪」

ナ「……まあその話はまた今度にしよう。今日はお前に伝えることがあつて呼んだんだ」

セ「伝えること？」

ナ「……セントっお前に初の任務を言い渡す」

――翌日・帝都中心街――

セ「ええつと…依頼人との待ち合わせ場所はこつちでいいんだよな」

この日…セントはナイトレイドのアジトを出て1人で帝都の町に訪れ

口には毎度おなじみ自家製の飴を啜えつ右手には何か書かれた紙を持って
人が賑わう町中を歩き進んでいた

セ「いやあくまさが入って1週間で依頼を任されるなんて…それだけ期待されてるっ

てことかなあ♪」

話は遡り昨日のこと：ナジェンダはセントに初任務を言い渡した、
セントが帝都に来たのもその任務のためなのである

ナ『セント：明日帝都に行きつそこで私たちにあるターゲットの暗殺を頼みたいとい
う依頼人に接触してくれ』

セ『それが俺の初任務っていうことか』

ナ『そうだったが接触の際は周囲への警戒を怠るなよ。お前はまだ顔が割れてないと
はいえ：どこに帝国の回し者がいるか予想ができない、それを肝に銘じて慎重かつ迅速
に行動するんだ』

セ『了解つそれで：依頼人と会う場所と時間は？』

ナ『この指示書に大まかなことは書いてある、あとのことはお前の判断に任せる』

セ『まだ入って1週間の俺にそんなこと言っちゃっていいの？』

ナ『そこも含めてお前の技量を見てみたいんだ：それじゃっ頼んだぞセント』

セ『お任せあれ♪』

と…任務内容はシンプルだがその分細かなことに気を回さないといけないため油断はできない、

だがセントは緊張した様子を感じさせず、余裕の表情で町中を歩き進め依頼人がいる待ち合わせ場所へと向かっていた

セ「ん〜今日の飴も良い感じだ…あれっこの通り地図に載ってる形と違うな。つか建物の場所も微妙に違うし…まさか工事でもあったのかここ？」

呑気に歩き進めているとセントは気づいた…地図に載ってる通りの形と建物の場所が違うことに、

見間違いかと思ひ再度周囲と地図と照らし合わずが、やはり微妙に違っておりセントは困惑した

セ「嘘だろっなんでこんな時に限って…あつそういえばここ少し前にスマツシユの被害があった場所だ、それで工事が行われて町の外観が変わっちゃったんだ！」

通行人A「ねえ…あの人さつきから一人で喋ってない？」

通行人B「そうだね…なんか気味悪いよね？」

セ「初任務でこの運の悪さ…最悪だああ」

※人目を気にしない男セント

セ「仕方ないっ時間はかかるけど別ルートで行きますか」

セリユ「ややっ私の正義センサーに反応アリ…：その君っ何かお困りですかな!？」

セ「はえっ…げえっ君は!!」

セリユ「帝都警備隊所属セリユ・ユビキタス&コロです!」

コ「キュウウンキュウーン」

セントの前に突如現れた少女…彼女の名は帝都警備隊に所属しており

少し前に宮殿に侵入したタツミを処刑しようとした“セリユ・ユビキタス”であつ

た

ちなみに共にいる子犬は“コロ”という名前であるがセントはこのコロについて知っている、

その正体はスサノオと同じ生物型帝具である“魔獣変化・ヘカトンケイル”という名

で
戦闘時には巨大化し獲物を捕食するという獰猛な帝具なのである

セリユ「何かお困りのようでしたけどどうしたんですか!？」

セ「えっええっとそのお……ちよつと道に迷ったと言いますかあ」

セリユ「おおっそれは大変!どこに行くんですかつパトロールがてら私が案内しますよ!」

セ「いいいやそれは悪いよ……セリユーさん仕事でしよつ迷惑かけるわけにはいかないですし」

セリユ「そんなつ私は全然気にしないですよ!ねえコロちやん?」

コ「キュウキュウツ」

セリユ「ほらっコロちやんもこう言ってることですし♪」

セ「(参ったなあ……このままじゃ依頼人と会う時間に遅れちまう……よしっここはコロの本能を利用させてもらおう!)」

“ シュツ ”

セ「コロツ 飴あげるから取ってこおおーいっ!!」

“ ピヨオオイツ ”

コ「キュキュウウーッ♪」

セリユ「ああつちよつとコロちやああん!」

機転を利かしたセントは懐から飴を一つ取り出しコロに見せつけその飴を思いつき、
り投げる、

するとコロはものすごいスピードで走り出し投げた飴を追っていき、
飼主であるセリユはそのコロを追ってその場から走り出した

コ「キュウーーンッ」

“パクッ”

コ「キュキュウウンッ♪」

セリユ「もおくコロちゃんツ食べ物に貪欲すぎるよおお」

コ「キュウ?」

セリユ「でもあの人なんで急に飴なんか……あれっあの男の人いなくなってる! どうするのよコロちゃんツ困ってる人を見失っちゃったじゃない!」

コ「キュウウ??」

セ「やれやれ……一時はどうなるかと思っただぜ。さあ気を取り直して……依頼人が待って

る場所に向かいますか」

セリユーとコロをまいたセントは改めて依頼人と会う場所を目指して歩き出す、しばらくすると墓石がたくさんある霊園らしき場所にたどり着き、セントは再度地図と比較して周囲を確認する

セ「…ここが待ち合わせ場所かつ依頼人はどこかなあ？」

依頼人「あつあのお…」

セ「んっ…もしかして依頼人の方ですか？」

依頼人「はっはいそうです！」

セ「……少し奥に行きましようツ話はそこで聞きます」

セントの前に現れた女性…どうやら今回ナイトレイドに仕事を頼んできた依頼人のようだ、

正体がバレないように布を頭から被っていたため、セントは人気がない霊園の奥へと女性を連れて行った

セ「よしっここなら人もいないし安全なはずだ…それじゃっ早速お話を聞きましょうか」

依頼人「はっはい……ええっと…そのお…」

セ「落ちていてっ…ゆっくり話してくれて大丈夫だから」

依頼人「……貴方たちナイトレイドにっ…殺してほしい人間がいるんですっ」

セ「やはり殺しの依頼か…周囲に生体反応はないな）その殺してほしい奴の名は？」

依頼人「帝都警備隊長のオーガと…油屋のガマルという男です」

セ「そいつらは裏で何をしてるんですか？」

依頼人「オーガはっ…ガマルから大量の賄賂を貰ってるんです」

セ「（警備隊長の隊長がね…本当腐ってるなこの国は）OKっそのまま続けて」

依頼人「はいっ…ガマルはっ…自分が悪事を行う度に代理の犯罪者をオーガによってつち上げるんです、私の婚約者もその1人でっ…濡れ衣を着させられ死罪になりました」

セ「…っ」

依頼人「あの人はっ…牢屋で2人の密談を聞きっ…処刑前に手紙でこのことを私に知らせてくれたんです！」

セ「……貴方の大切な人は…自分の命を犠牲に真実を伝えてくれたんですね」

依頼人「…うっ…お願いしますっ…どうかっ…どうかこの晴らせぬ恨みをつ…」

涙を流しながらセントに自身の想いを訴えかける女性、

その姿を見たセントは女性の肩に優しく手を置き、自分がいるナイトレイドがどう行動するかを伝えた

セ「わかりました、あなた達に苦痛を与えたオーガとガマルはつ俺たちが始末します」

依頼人「っ…ありがとうございますっ…ありがとうございますっ」

セ「お礼は結構ですよ…俺は”人”として当たり前のことをするだけなんですから」

依頼人「…こっこれ…少ないかもしれませんが依頼金ですっ」

依頼人の女性は依頼金として小さな麻袋を差し出した、

その麻袋は金貨でパンパンになっており…

貧困層にいる人間では決して溜められないほどのお金が入っていた

だがセントはその袋を受け取ることはせず、

優しく女性の胸元の方へとその袋を押し戻した

セ「そのお金は貴女が自分のために使ってください」

依頼人「けっけど…」

セ「自分の体を傷つけてまで稼いだお金なんですよっならこれは…貴女が使わなきゃいけないお金だ」

依頼人「ッ!!」

セ「ここまで貯めるのにたくさん辛い思いをしたんですよね、本当に…よく頑張りました」

依頼人「…うっ…うっ…うっ…」

セ「後のことは俺たちに任せてくださいっ貴女の明日は…俺が創ってみせます!!」

セ「以上が依頼人から聞いた話だ…」

ナ「事実確認の方は？」

セ「“クロ” 確定…油屋の屋根裏部屋でターゲットが密談してるのを目撃した」

ナ「初めてにしては中々の手際だなセントっ」

セ「どうもです♪」

レ「けどさあゝ…依頼金貰わないのはどうかとお姐さんは思うなああ？」

マ「そうよっ私たちはボランティアで暗殺稼業してるんじゃないのよ！」

チエ「日々活動していくためにもお金は必要だしね」

セ「ボスは判断を俺に任すと言ってくれた…俺は仕事を受けるために金銭を受け取ることはしない」

レ「けどそしたら私たちがただ働きになっちゃうじゃんっつり合いが取れてないと思うんだけどおゝ？」

依頼受領とその事実確認をとるなどそれなりの成果を出したセント、

だが依頼金を受け取らなかったことに関してはさすがに他のメンバーから突っ込まれるも

それに対しセントは確固なる意思のもとこう言い返した

セ「誰かが苦しみ辛い思いをしているの…その苦しみを晴らすために対価を求めるのは間違ってる」

ア「……………」

セ「誰が何と言うと…これが俺のやり方だ、誰かが救いを求めて手を伸ばしてるなら

俺はその手を掴むっどんなことがあってもだ」

タ「セント…」

セ「心配しなくてもお金は別のこととしてここに還元してくからっだからお願い！みんな協力してくれ！」

マ「……本当にっアンタどうしようもないくらいお人好しね」

チエ「けど…セントくんらしくて良いんじゃないかな？」

ブ「ああっ損得を考えず目の前の目的をなそうとする姿勢…俺は嫌いじゃねえぞ」

ラ「まっお前が倍働くっっていうなら俺は文句ねえけどさ」

シエ「私も…セントさんの判断は正しいと思います」

ス「同じくだ。セント…お前は人として立派なことをした」

タ「スーさんの言うとおりでよ、さすがはセントっ伊達に正義のヒーローを名乗るだけのことはあるな！」

ア「お前の信念…しかと受け止めた、だから私たちもその想いに応えっこの任務を遂行する！」

セ「みんな…ありがとう！」

レ「しよゝがないっ…んじゃ今度セントが奢るっことで手をうってやろうか♪」

セ「そんなこと言うとお前が俺に頼んだ」人工酒製造機”作ってやらねえぞ”

タ『わかつたつこのまま待機する』

セ「功をあせるなよ…夜とはいえまだ人通りが多い時間だ。確実にオーガを1人にするよう誘導してから行動に移すんだっいな?」

タ『そんなことわかつてるよつ俺だつてそれなりに場数は踏んでる!お前が心配するような無鉄砲な行動はしないよ』

セ「ならいいんだけど…それじゃ引き続き張り込みよろしくつ」

“ピイツ”

セ「ラバツクツタツミの後方支援に向かつてくれ…ただ可能な限りタツミー人に暗殺をさせてやってほしいとのボスのお願いがきている。タツミを援護するのはあいつ1人で暗殺が不可能とお前が判断した時に行つてくれ」

ラ「了解ツにしても入つて1週間ちよいのお前に現場の指揮を任せるなんて…ナジエンダさん何を考えてるんだか」

セ「それもひつくるめて俺の技量を見てみたいってことじゃないの?」

ラ「なのかねえ…けどこの“通信機”つてやつめつちや便利だな!遠くにいる奴とも会話ができるなんて…お前本当にすげえ奴だな!」

セ「天つ才の発明を舐めないでくれたまえ♪」

そう…今回の任務のためにセントは離れてる仲間同士でコンタクトが取れるように腕輪型の通信装置を人数分開発しつ帝都の町に入る前に任務に参加するメンバーにくばっていたのだ

これのおかげである程度距離が離れても通信機を使えば連絡がとり合えるため任務遂行時の意思疎通がより正確に行えるようになったのである

セ「扱いは大丈夫か？腕輪の右側のボタンを押せば指定したチャンネルの通信機と繋がり通話ができる、左側のボタンは届いた受信電波を受け取り他の通信機と繋げるためのモノだ…音量は下にダイヤルがあるからそこで調整してくれ」

ラ「さっき嫌ってほどお前から説明受けたから大丈夫だよ！んじゃ俺はタツミの方に行ってくる」

セ「OKっ頼んだぞラバック」

再度通信機の使い方を聞いたラバックは軽い身のこなしで民家の屋根を飛び移りながら移動を開始し、

残ったセントは中央広場の方に視線を移し…方が一に備え身を隠しながら周囲を警戒する

その頃…メインストリートの路地裏で身を潜めていたタツミの目の前に酒に酔い足がおぼつかない状態になっているターゲット・オーガが姿を現した

タ「(現れた！周りに護衛はいないな……よしっ行くか!!)」

オ「ウイ……たっぷり尋問した後の酒はうめえや♪」

“ シュツ ”

タ「あつあのうオーガ様」

オ「あん？」

タ「ぜひお耳に入れたいお話があるのですが…路地裏でお話できないでしょうか？」

オ「んあ？…ああく…いいぜっ聞いてやるよ」

タ「(よしっ)」

※メインストリート路地裏

オ「それで…話ってなんだ？」

タ「……単刀直入に言う」

オ「っ？」

“ バサッ ”

タ「お前の命っ…貰いに来た!!」

セ「……今のところ警備隊とガーディアンに動きはないな……このまま順調に事が運んでくれればいいんだけど」

“ ピイピイピイツ ”

セ「こちらセントツ」

ア『私だ……いまガマルの始末を終えた』

レ『あつけな過ぎすぎてあくびが出ちやったよお』

セ「ご苦労様つ2人はそのまま離脱して合流地点に向かつて」

ア『わかった……セントツ』

セ「んっ？」

ア『合流地点で待ってる……必ずっ生きて戻ってくるんだぞ』

セ「……了解っ」

“ ピイツ ”

セ「ガマルの方はクリア……残るはオーガの方だな」

“ ピイピイピイツ ”

セ「っ…ラバツクか？」

ラ『ああ俺だっいまタツミとオーガが戦闘を始めた…今んところはタツミの方が優勢だ』

セ「わかった…アカメとレオーネは任務を終え帝都の町から離脱した。ラバツクはオーガの対処が終わり次第つタツミと共に合流地点に向かつてくれ」

ラ『お前は何してんだよ？』

セ「万が一に備えて中央広場の監視をしてる」

ラ『指揮官殿は楽なポジションで良いな♪』

セ「茶化すなよ…それじゃそっちの方は頼むなっ通信切るぞ」

ラ『はいよっ』

“ピイツ”

セ「ふううう…良い感じだっこの調子なら被害を出せずに終われそうだな…っ…っ!!」

順調に進んでいた矢先…セントは中央広場に警備隊の1人であるセリユーが

2人の隊員と8体ほどのガーディアンを引き連れ姿を現しているのを視認した

セリユー「まったく…オーガ隊長はどこに行っちゃんだらろ？」

隊員1 「いつもみたいに酒場で飲んでるんじゃないか？」

隊員2 「詰所にも姿はなかったし…その可能性が高いな」

セリユ 「いくら隊長でも仕事中の飲酒なんて許せないよ！私は隊長を探しに行つてくるっ2人はそのまま勤務を続けて!!」

隊員1 「あんまり無理しすぎるなよセリユー」

隊員2 「オーガ隊長酒癖が悪いんだから…襲われないように気をつけろよ」

セリユ 「わかつたつありがとう2人とも！それじゃコロにガーディアンたちっこれよりオーガ隊長の捜索に出発するよ！」

コ 「キュウキュウーッ」

2人の警備隊員と別れたセリユーはコロとガーディアンを引き連れ、

隊長であるオーガを探しにメインストリートに向かつて進みだした

セ 「(まずいっいまあの子たちを行かせたらタツミとラバックが危険に晒される!)」

屋根上で一部始終を見ていたセントはどう行動すればいいか頭の中で考える、

通信機を使いラバックに知らせることもできるがいま連絡を入れ離脱を促しても

オーガと戦闘中のタツミを連れ安全に離脱できるかと言われればハッキリ言っ
て難
しい

かと言つてこのままセリユー達を行かせればこちらが不利な状況に陥る、

帝具使いのラバックがいるとはいえオーガとセリユーにガーディアン数体が相手と
なれば

いくらラバックといえど対処しきれるはずがない

となれば…この任務の指揮官として自分がとる行動はただ1つ…

セントはドリルクラツシャーをガンモードにし右手で持ち、

銃口をセリユー達がいる方向へと向け…引き金に指をかける

セ「なるべく穏便に進めたかったけど2人にこれ以上負担はかけられない…行くと
しますか!」

“バアンバアンツ”

セリユ「ツ…敵襲ツ!!」

コ「キュウツ!!」

セリユ「ガーディアンは全方位に展開ツ敵を迎え撃て!」

セ「(そんなことしても…俺には通用しないよ)」

セントは懐から忍者者ボトルを取り出し左手で数回振り、
ボトルの力の発動させ自身の姿を消しつその状態のまま屋根上から地上へと飛び降りる

その後つ襲撃を警戒するセリユーたちの元に向かつて走り出し、
手に持っていたドリルクラツシャをブレードモードにしセリユーの周りにいる
ガーディアンを斬っていく

“ギインギインツ…ギイインギイインツ…ドオオンドオオンツ”

セリユ「うわあつ…なつ何…何が起きたの!？」

“ シユウウ… ”

セ「また会ったね…セリユーちゃん」

セリユ「へえつ…あああつ貴方は昼間の!!」

周囲に展開していたガーディアンを倒したとここでセントは自身の姿を露にした、
その光景を見たセリユーとコロは驚くもつセリユーは警備隊としての職務をなすべくセントに近づく

セリユ「あつ貴方は……一体何者なんですか？」

セ「俺？俺はね……」

“カチャツ”

セ「ナルシストで自意識過剰な……正義のヒーローさ！」

「ラビット／タンク・ベストマッチ！」

「Are you ready？」

セ「変身ツ!!」

「鋼のムーンサルト！ラビットタンク！Yeah！」

セリユの問いに答えるかのようにセントはビルドドライバーを装着し、
ラビットとタンクのボトルを装填し仮面ライダービルド・ラビットタンクFへと変身
した

セリユ「ツ……そつその姿は!!」

セ「仮面ライダービルド……て言えば自己紹介は必要ないよね」

セリユ「……間違いないっあの時わたしの邪魔をした仮面の男だ！」

ビ「……………」

セリユ「やつと…やつつつつと巡り合えたな仮面ライダー!!」

“ゴゴゴゴゴゴ……………”

セリユ「帝都警備隊…セリユ・ユビキタス!絶対正義の名の下につ悪をここで断罪する!!」

ビルドの姿を見た途端…セリユの顔はこの世のモノとは思えないほど醜く歪み、

身に纏うオーラも先ほどまでと違い禍々しく重たいモノへと変わっていた

だがビルドはというとそんなセリユを見ても姿勢は変えず、

手に持つドリルクラツシャーを握りなおしセリユに刃を向けた

ビ「絶対正義”かあ…果たして今の警備隊に正義を語る資格があるのかね”

セリユ「黙れ!お前は重罪を犯した男の逃亡を手助けした…ならばお前は悪だつそこ

らへんにうようよいある賊と同じ悪だ!」

ビ「……………」

セリユ「賊の生死は問わず…ならば正義わたしが処刑する!」

ビ「有無を言わさず…か」

セリユ「私のっ…私のパパはお前の様な凶賊と戦い殉職したっ…絶対につ許さない
!!」

コ「キュウツ！」

“ゴゴゴゴゴゴツ”

ビ「…本性を露にしたか」

セリユの怒りを感じ取ったのか…コロの体が巨大化していき、
気づけば成人男性2人分ほどの大きさになっていた

セ「コロツ捕食!!」

コ「キュウウツ!!」

“バアアツ”

ビ「悪を喰らうってか…けどっ」

“ギイイインツ”

コ「ツ!？」

ビ「生憎オレは“正義”のヒーローだから喰われる訳にはいかないんだよね」

ビルドに向かって夥しい数のパンチを連続して放った

“ブウンブウンブウンツ”

ビ「っ…ふうっ…はあっ」

セリユ「いつまで避けられるかなああ？」

“ブウンブウンブウンブウンツ”

ビ「くうっ 罅が明かない…ならばっ!!」

コロの連続パンチを回避していくビルドだがこのままでは体力を無駄に消耗してしまふ、

そう考えたビルドはドリルクラッシュャーにゴリラボトルを装填しつ刃をコロに向ける

「Ready go!」

ビ「拳にはっ拳ってね!」

「ボルテックブレイク!」

ビ「ふううったあああーっ」

“ゴオオオンゴオオオンツ”

コ「キユウアアツ!!」

セリユ「コロツ!!」

ゴリラの成分が刃に宿ったドリルクラツシャーを使いビルドはコロに殴りかかる、如何に耐久力がある生物型帝具とはいえ懐に強烈なパンチを2発喰らったためか、コロは地面に体を打ち付けながら吹っ飛んでいき近くの壁に激突した

コ「キユウツ…キユウウ…」

セリユ「コロツ…よくもコロを!!」

ビ「セリユ…警備隊に属する君に問うつこの国に…本当に正義はあるのか?」

セリユ「あるさつ私たちがその正義そのものだ!この国を腐られるゴミ共を抹殺し…正義の下にこの帝国の秩序と平和を守っていく!!それが私がオーガ隊長から学んだことだ!」

ビ「そうか…じゃあお前が言うゴミたちが生きるためにこの理不尽な国に蝕まれる権力者共から虐げられてるのは黙って見てるだけなのか?」

セリユ「何を言っている!この国が…皇帝陛下や大臣様がそんなことをするはずがな

い!!」

ビ「お前は物事の良い面しか見ていない…そしてその裏にある真実を知ろうとしてもして
いない…：そんなお前がっ正義を語る資格なんてあるはずねえだろ」

セリユ「煩いッ!! 誰が何と言おうと…私は悪を絶対に許さないっ正義に歯向かうもの
がいるというなら…：私とコロが力でねじ伏せてやるっどんなことをしてでも!!」

ビ「…：力を振りかざすことが正義なんて…俺は絶対に認めない!!」

声を荒げたビルドはラビットとタンクのボトルをドライバーから抜き取ると、
新たに忍者ボトルとコミックボトルを取り出し両手で数回振り始める

“ シャカシャカシャカシャカッ… ”

セリユ「…何をやる気だ!？」

ビ「君に…：本当の正義の力ってやつを教えてあげる」

“ カチャッ ”

ビ「さあ…：実験を始めようか」

「忍者／コミック・ベストマッチ!」

「Are you ready?」

ビ「ビルドアップッ!!」

「忍びのエンターテイナー!ニンニンコミック!Yeah!!」

セリユ「なあっ…姿が変わった!!?」

ビ「忍びなれども忍ばない…:新たなベストマッチの力っ見せてやるよ!」

タ「はあ…はあ…:やつ…やつたぜ」

オ「っ…この俺がっ…:こんな小僧にっ!!」

ラ「無駄な足掻きはやめな…:お前の両手両足はタツミが斬り落とした、もう傍若無人な振舞いはできなくなっちまったなあ」

オ「ぐうっ…」

ラ「上出来だなタツミっんじや…:セントの指示通り町を出て合流地点に向かうぞ」

タ「いやっ俺はセントの方に行ってみる」

ラ「はああっ!?!」

タ「なんか…嫌な予感がするんだよっだから行ってくる!ラバックは先に合流地点に向かつてくれ!!」

ラ「おっおいタツミ…たくっ相変わらず無鉄砲な奴だなあ」

オ「ぐうっ…：…がはあっ」

ラ「まつこいつは放っておけば死ぬことだし…：…向こうはセントがいるからなんとかなるかつんじやお先に離脱するとしますか」

タツミの手によりオーガは両手両足を失い…：その場に血を吐きながら倒れ込んでいた、

任務を終えたラバツクは指示通り合流地点に向かおうとしたが

タツミは嫌な予感がすると言い中央広場の方へと走っていつてしまった

残ったラバツクはいま自分にできることはないと考えたため、

セントの指示に従いアカメたちが待つ合流地点へと向かうことにした

そしてその場に残ったオーガは自分がやられたという事実をまた受け入れておらず、何とか立ち上がろうとするも手足がないため血を這いつくばるのがやつとの状態だ

オ「くそおっ…：…こんなところで…：この俺様が!!」

エ「ほおお…：それだけの傷を負いながらまだ生きてるか」

オ「ッ…：…なっ何者だ貴様は!？」

エ「今から死んでいく奴に名乗る必要はない」

オ「ッ……」

エ「しかし……その生命力には惹かれるなあ……お前ならより強いスマツシユにするこ
とができるかもしれない」

オ「スマスマツシユ……だと!!」

エ「ふふふ……どうせ短い命だ……最後は俺のモルモットしてひと暴れしつ死んでい
け」

“ t o b e c o n t i n u e d ”

【次回予告】

セリユ「なんでつなんで勝てないのよ!」

ビ「正義と悪は紙一重……受け取り方は人それぞれなんだよ」

“ 揺れ動くセリユの信念 ”

エ「秘密警察” イエーガーズ ” か……また楽しくなりそうだな」

“ 新たな勢力の登場 ”

セ 「生きて帰る：そう約束しちまったからな」
ア 「お帰り：セント」

《 第7話・正義のボーダーライン 》

第7話・正義のボーダーライン

《前回のあらすじ》

セ「仮面ライダービルドでありつ天才物理学者であるセントは暗殺集団・ナイトレイドに加入し、帝国に愛と平和をもたらす為の戦いに身を投じた：そんなセントにボス（ナジエンダ）から初の任務が言い渡されつセントは仲間たちと共に帝都へと向かった」

タ「今思ったんだけどビルドって2本のボトルで変身するよな、その時鳴る“ベストマツチ”ってどういう意味なんだ？“生き物”と“機械”の組み合わせがマジ最強ってことなのか？」

セ「“有機物”と“無機物”って言いなさい！兎と戦車やゴリラとダイヤモンド：この組み合わせがなぜベストマツチなのかハッキリとしたことはわかってないんだよ」

タ「わかってないのかよ：つか今回登場するニンニンコミックっていうベストマツチはどんな能力を持つてるんだ？」

セ「今から本編で活躍するんだからそれを観なさいよっつかアカメはいつ戻ってくるの!?!このまま保存食全部食われたらマジで今後の生活危ういんだけど！」

タ「とっついで帝都警備隊のセリユーとビルドの新たな姿・ニンニンコミックが

激突する第7話をどうぞ！」

セ「あらすじはしより過ぎだろ！ていうか俺の仕事を盗るなって何度言えばわかんたよ！！」

ビ「忍びなれども忍ばない……新たなベストマッチの力つ見せてやるよ！」

セリユ「っ…姿が変わったところで何ができる！コロツ蹂躪！！」

コ「キュウウウツ！！」

新たなベストマッチ・ニンニンコミックFとなったビルドに対し

セリユは臆することなくコロに命令を出しつ命を受けたコロは

その巨大な腕を振るい、ビルドに向け再度攻め込み強力な拳を放った

セ「放て！！」

コ「キュウウウツ！」

“ブウウウンツ…キインツ”

コ「ッ!？」

ビ「どうだコロ…斬れ味抜群の4コマ忍法刀のお味は？」

コロの拳が直撃しようとした瞬間…ビルドはニンニンコミックFの専用武器、

“4コマ忍法刀”を出現させ右手で逆手にし持ちつつコロの拳を右腕ごと斬った

一瞬のことにセリユも斬られたコロも反応が遅れたが、

生物帝具の強みである再生能力を使い斬られた右腕を瞬時に修復させた

ビ「ふっさすがの再生能力だ…：…ならっ再生が追い付かないくらいのダメージを喰らわしてあげるよ！」

“キンッ”

「分身の術」

“BOOM!”

ビ「「ふっ」」

セリユ「なあっ…：分身した!？」

ビ「「さあてっ…：行くとしますか!」」

ビルドは4コマ忍法刀の力を使い自身の分身体を5体召喚し、分身体と共に四方八方散りココの周りを取り囲むように展開した

セリユ「コロツ腕!!」

コ「キュウウツ!!」

“ブウウンツ”

ビ「ほおっ」

コ「キュウキュウツ!!」

“ブウウンブウウンツ”

ビ「よおっ」

ビ「はあっ」

セリユ「くうつちよこまかと!!」

ビ「今度はこつちの番だ!」

“ブオオオン…”

ビ「これでも喰らいな!」

“シュウウンツ…ザアアンツ”

コ「キュアアアッ!」

ビ「はあああつ」

ビ「せやああつ」

“ ギイインギイインツ”

コ「キュウウウツ！」

セリユートの指示を受けコロは巨大な腕を振るいビルドに攻撃を仕掛ける、
だが複数に分身し忍者ボトルの力で反応速度が強化されたニンニンコミックFの前
に

その大振りな攻撃はことごとく回避されてしまう

その隙に分身体の1人が右手から巨大な手裏剣型のエネルギー刃を出現させ、
無防備となっているコロの背中に向け放ちつそれと同時に残りの分身体が

4コマ忍法刀を構えコロに突撃しっ手裏剣が直撃した瞬間にコロの体を斬っていつ
た

コ「キュツ…キュウウウツ」

ビ「まだまだ行くよっ」

“ カキカキカキツ”

ビ「忍法・擬音飛ばしの術！」

“バアアアンツ：ドオンドオンドオンドオンツ”

コ「キュウウウツ！」

弱つてるコロに再生の間を与えさせないために立て続けにビルドは攻め込むべくコミック側の左腕に装備されたペンを使い、空中に複数の擬音文字を書いていく、するとその文字が実体化しつその実体化した文字をビルドはコロに目がけて放った実体化した文字の攻撃を数発受けたコロはさすがにダメージが蓄積したのか：傷ついた体を再生させる前に体勢が崩れそのまま倒れ込み、

それを確認したビルドは召喚していた分身を一旦消し元の1人の状態に戻った

セリユ「コロオツ！」

セ「キュツ：キュキュウツ：」

ビ「どうよ俺の発・明・品とニンニンコミックの力は？ 獰猛かつ狂暴なヘカトンケイルをここまで圧倒する能力：やっぱ俺って凄いでしょ！ 最高でしょ！ 天っ才でしょ！」

“チャキンツ”

ビ「んっ？」

セリユ「お前はっ…お前は絶対にこの場で殺してやる！」

コ「キユウツ…キユウウツ！」

怒りのままに銃仕込みのトンファアークガンをビルドに向けるセリユ、
それに反応したのか…コロも再生がままならない状態で立ち上がりビルドと対峙す
る

ビ「まだやる気？ 言っておくけどこれ以上続けたところで君たちが負けることに変わ
りはないよ」

セリユ「まだ負けてないツ!! 私のこと…私とコロの心が折れない限りっ何度だって立ち
上がってやる!! この手で悪を全て滅ぼすためにっ…」

ビ「…そこまでの強い信念がある君なら…この国を闇を見通す力だっ持っているは
ずだ」

セリユ「ツ？」

ビ「いま君が忠誠を誓っている帝国は…権力という名の力を使いつなんの罪もない
人々を苦しめ…追い込み…死へと誘っている。そんな帝国が築く国に一体何の価値が
ある……生きる希望を失わせっ明日へ向かう力を奪っているいまの帝国のため…」

その力を無駄に使っているとなんで気づかないんだよ！」

セリユ「煩いっ…煩い煩い煩い!! お前に何がわかるっ…パパをつ…大切な家族を私は失ったっ…その時誓ったんだっこんなことをする悪を滅ぼすための力を手に入れると!!そして私はコロという力を手に入れたっ…国がどうかそんなこと私には関係ない!!私はただっ…悪行を働く屑どもをこの手で殺せればそれでいい!!」

ビ「……」

セリユ「お前だっつていずれわかるさ!力を持てばっ…誰だっつて己を願いを果たしたいと思うっ力が見せる欲望っつていうのはそういうものなんだよ!」

ビ「俺はっ…力の欲望になんて屈しない!」

セリユ「ツ!」

セリユの発言に対し…ビルドは何の迷いもなくそう答えた、

マスクのためセントがどういふ表情をしてるかまではわからないが…

その真っ直ぐな瞳と強い信念のものと発言につセリユは圧倒されたじろいだ

ビ「力を得たことで俺は真に理解した…力とはっ自分の欲望を満たすためのものじゃない!大いなる使命を果たすためのモノなんだ!!」

セリユ「大いなる…使命っ…」

ビ「この腐敗した国を変えるためっ…この国に生きる人々の愛と平和を守るため…その使命を果たすために俺はビルドの力を使い今日まで戦ってきたんだ！」

セリユ「…っ」

ビ「セリユ…君もまたっこの国の闇が生んだ犠牲者だ。君の心の中に潜む闇を払うためにつ俺はこの力を使う！」

“ キンツ ”

「分身の術」

“ BOOM! ”

ビ「勝利の法則は…決まった！」

ビルドは再度分身体を7体召喚させっ臨戦態勢状態のコロに向かって一斉に走り出す、

コロはすぐに巨大化した腕でビルドを攻撃しようとするも…数の多さに混乱し手が出せないでいた

そんなコロを翻弄するようにビルドは分身体と共に四方八方に散り、

身軽な動きとその速さから生まれる残像を利用しコロの身動きを封じ込める

“ シュンシュンシュンツ ”

コ「キュツ…キュキュ!？」

“ シュウンシュウンツ…シュウンツ ”

コ「キュウウツ…キュウウウツ」

ビ「(核にダメージを喰らわせなきや致命傷は与えられない…どこにあるっコロの核は!!)」

“ フウウウ……ピイピイピイツ ”

ビ「(あそこかっ!!)」

目に搭載されている索敵システムを使いコロの核の位置を見つけたビルドは分身体7をコロの周囲に円を描くように配置させつ一斉に高速で走り始めた一方コロはなんとかビルドの姿を追おうとするも分身体に紛れている本体を見つけ出せず、

逆に目で追ったせいで自分の周囲を走り続けるビルドたちを見て目を回してしまう

コ「キュウウツ…キュウウウツ…」

ビ「一気に行くぜっ!!」

“ キンツキンツ ”

「火遁の術」

ビ「はあっ!!」

“ シユウウンツ ”

「火炎斬り!」

ビ「はあああああーっ!!」

“ スピイイーーンツ ”

コ「キュツ……キュウウーッ!!」

“ ドガアアアアーンツ ”

セリユ「はっ……コロオオオーッ!!」

勝負はついた…炎を身に纏った4コマ忍法刀がコロの胴体を斬り裂いた、

その一斬を受けたコロの体からは血が大量の流れ始め…それと同時に大きさが元のサイズにまで縮んだ

戦いを終えたビルドは召喚していた分身体を自分の元へと戻し消滅させ、

セリユは地面に倒れたコロの元に駆け寄りその小さな体を持ち上げ呼びかける

セリユ「コロツ…コロオツ!!お願いっ…目を空けてよお!!」

ビ「……………」

セリユ「……………よくもっ…よくもコロを殺ったなあーっ!!」

“ババババババーツ”

ビ「ツ…………ふうっ」

“シユウウンツ…スピインツ”

セリユ「ツ…あっ」

怒りに我を失ったセリユはコロをその場に寝かせトンプアーガンをビルドに向け銃弾を放つも、

ビルドはその銃弾を難なく避け…素早くセリユに近づき4コマ忍法刀でトンプアーガンを斬り落とす

セリユ「くうっ…こんのおっ!!」

“ブウウンツ”

ビ「…はああっ」

“ドオオンッ”

セリユ「がはあっ!!」

トンファアガンを失つてもなおセリユは止まらずビルドに向かって拳を放つ、
だがその攻撃もビルドは容易に回避しつ右手を使いセリユの首に手刀による打撃
を与える

セリユ「つうツ……なんでっ……なんで勝てないのよ!」

ビ「怒りに身を任せた攻撃なんて俺じゃなくても対処できる」

セリユ「ツ……貴様あつ!!」

ビ「落ち着きなつて……コロは生きてるから」

セリユ「えっ!?!」

コ「……キュツ……キュウ……」

セリユ「コロツ!!」

る、
コロの鳴き声が聞こえたためセリユは後ろを向きコロを寝かせてる方に目を向け

そこには以前倒れたままだが目を薄つすらと開き…セリユの方方に手を伸ばすココの姿があつた

それを見たセリユは先ほどまであつた怒りと憎悪の感情が消えさり、手を伸ばすココの方に駆け寄り抱き上げ…存在を確認するように抱きしめた

セリユ「コロツ…コロオ…良かったつ…生きてたんだねっ」

コ「キュウウ…」

セリユ「でもっ…どうして生きてるの？核を壊されたら再生できなくなつて死ぬはずなのに」

ビ「核を斬つてないからだよ」

セリユ「えっ!？」

ビ「生物帝具の特性上…ただ斬っているだけじゃ長期戦になつてこつちが不利になるだけだからね、だからココの胴体を斬つた瞬間にむき出しになつた核に4コマ忍法刀で軽い打撃を与えたのさ。それによつてココは元の大きさに戻り再生能力も一時的に弱まつたつて訳…意識を失つていたのもそのせいだよ」

セリユ「…どうしてココを殺さなかつたの？」

ビ「俺は命を奪うようなことはしないつて心に誓つてるからだよ」

セリユ「…私とコロは貴方を殺そうとしたのよ!!」

ビ「だから?」

セリユ「だからって…敵にそんな情けをかけたら自分が死ぬかもしれないじゃないっなの!」

ビ「それでも俺はっ…たつたーっしかない命を奪つたりはしないっそんなことをする資格も権利も持ち合わせていないからな」

セリユ「…っっ」

ビ「…確かに君の言う通りこの世には悪が蔓延っている、そいつらの行いのせいで悲しい思いをする人がたくさんいるのも事実だ。けどだからといって…有無を言わさずにそいつらの命を奪っていい理由なんてどこにもない」

セリユ「…っ」

ビ「正義と悪は紙一重…受け取り方は人それぞれなんだよ。君が正義だと思つてこれまでやってきたことだって…第三者の視点からみれば悪にだつて見えるっ人間の心つていうのはそういうものなんだよ」

セリユ「…っっ」

ビ「セリユ…人の心を知りその内側を見極められるようになれ、そして本当の悪は法の下に裁きを与え更生するチャンスをあげるんだ。それができた時っ君は本当の意

味で正義のヒーローになれるはずだよ」

セリユ「……っ……私はず……私はず……」

ビ「苦しかったよね……辛かったよね……でももう我慢する必要はないよ。次への一歩を踏み出すために……今はたくさん泣きなさい」

セリユ「……ううっ……うわあああああ……っ」

これまで心の中に溜めていたであろう感情が溢れだし……セリユはその場で泣き崩れた、

そんなセリユの背中をビルドは右手で優しく撫で、彼女が泣き止むまで傍にいたのだった

ビ「落ち着いた？」

セリユ「うん……ええつと……そのお……ありがとうごさいますビルドさん」

ビ「どういたしまして♪」

“タタタタタツ……”

タ「セントオオオツ!!!」

ビ「んっ……えつタツミ!?お前なんでここにいんの!?!」

タ「いやあく…なんとさえばいいのか…なんか嫌な予感がしちゃってさっそれで」

ビ「それで不安になってこつちに來たと。余計な氣を回すんじゃないよつ俺はお前と違つてヘマをするほどバカじゃないんだよ」

タ「なあつバカつてお前な!!」

ビ「けど…ありがとな心配してくれて」

タ「おつおう／＼／＼」

セリユ「…ああつ貴方はこの間の!!」

タ「へえつ…げえつお前は帝都警備隊の!!セントなんで警備隊と人間と一緒にいるんだよ!」

ビ「落ちて着けてつてタツミツセリユはもう大丈夫だ。俺たちと戦う意思はもうないよ」

タ「…本当か?」

ビ「本当だよつ」

タ「……ならいいんだけどさ」

コ「キュウキュウツ」

ビ「おおつもう元氣になつたのかコロ!!生物帝具の再生能力は本当に凄いな……できることなら解剖して中をじっくりと見てみたい!!」

セリユ「だつ駄目だよ!! コロは大切な家族なんだよつそんなことさせるわけないじゃない!!」

ビ「ジヨークだよジヨーク♪」

セリユ「ジヨークでもそんな物騒なこと言わないでください!!」

タ「(あれっ……このくんだり前にもあつたようなあ)」

ビ「それよりタツミツお前の方は任務ちゃんとやり遂げたのか?」

タ「当たり前だろ! やり遂げたからこつちに来たんだよ!!」

ビ「あつそ……ならそろそろ集合地点に向かうかつ大分時間オーバーしちゃってるし」

タ「ああそうだ忘れてた! 早く行こうセントツこれ以上遅れてたらボスのお説教が

待っている!」

セリユ「あつあのお……貴方たちは一体何者なんですか?」

ビ「俺たち? 俺たちは……ツ!! タツミツセリユー避ける!!」

タ・セリユ「へえっ?」

“ シュルルル……ドオオオンツ”

タ「うおおっ!!」

セリユ「きやああつ!!」

ビ「ツ……これはっ……碓!」

“ブオオオンツ……チャキンツ”

「グオオオオオオ……」

ビ「スマツシユ!!」

突如として飛んできた巨大な碇はビルドたちがいた地面に直撃しつその場に大きな穴を形成し、

次の瞬間その碇は引き寄せられるように地面から離れ：投げた張本人がいるところへと戻った

そしてその碇を投げたのは……歪な紺碧のボディに海賊を思わせる帽子のようなものをかぶり、

先ほど投げた巨大な碇を軽々と右腕で持ち上げる“パイレーツスマツシユ”が立っていた

セリユ「なっなんですかあれ!？」

タ「未確認危険種のスマツシユだよっ最初にお前と会ったあの日：俺は宮殿の一室で白い防護服を着た集団が女性をスマツシユに変えるところを見たんだ!!」

セリユ「そんなっ……帝国がっ……そんな酷いことをっ」

ビ「タツミツそこら辺の話は後回しだ!!まずはこのスマツシユを倒す!!」
「ウオオオオオオーッ」

“ブオオオオオーッ：ドガアアンツ”

ビ「つうつ：なんちゆうパワーだよっ」

パイレーツスマツシユは戦闘態勢をとるビルドに向け再度巨大な碇を投擲した
ビルドはその攻撃をすれすれで回避するもつ碇が直撃した地面にはまた大きな穴が
形成された

「ヌウウウウンツ」

“ブウウンツブウウンツブウウンツ”

ビ「うおおっそのまま振り回すとか反則だろ！」

“バアンバアンツ”

「グウウツ!!」

ビ「んっ？」

タ「セントツ大丈夫か!？」

ビ「ナイス援護だタツミツ」

地面に突き刺さった礎を繋がれた鎖を使い大きく振り舞わし攻撃するパイレーツスマッシュ、

その攻撃は広範囲に及んでいるためニンニンコミックFのビルドでも迂闊に近づけなかった

そんなビルドを援護すべくタツミはドリルクラッシャーをガンモードにし、パイレーツスマッシュに数発の銃弾を撃ち込みその動きを一時的に止めた

タ「あいつ桁違いのパワーを持つてるな…この間のゴリラモンドってやつで行った方が良いんじゃないか!？」

ビ「あれは近接戦闘に特化したフォームだつそれに機動力が低くてあのスマッシュみたいに飛び道具を扱う相手には逆に不利になる」

タ「じゃあどうすんだよ!？」

ビ「…:どんな敵でもつ空中に飛ばせば身動きができなくなる」

タ「えっ?」

ビ「タツミ一瞬で良い…あいつの注意を引き付けてくれ!!」

タ「わっ…:わかった!やってみる!!」

り、
 ビルドの指示を受けたタツミはドリルクラッシュャーをブレードモードにし右手で握

以前として強い威圧感を放つパイレーツスマッシュユに向かって攻め込んだ

「フウウウンッ」

“ブオオオオンッ”

タ「(来るっ!!)」

ブ『タツミ：：セントの言う通り戦場では何が起きるか分からないし相手が常人ばかりとも限らない。帝具使いやスマッシュユといった敵がいる以上つ常に相手の行動の一手二手先を読んで動くことを意識しないとこの先の戦いで生き残っていくのは難しいぞ』

タ「ツ：俺だつてつセントや兄貴と鍛えて強くなつてるんだ!!」

“シユウウンッ”

「ツ!?!」

タ「いつまでもつお前たちにやられっぱなしになつてたまるかあああーっ!!」

“ギイイインッ”

タ「はああつふうんっ」

“ギインギインツ”

タ「うおおおおおーっ!!」

“ギイイイインツ”

「グワアアアーっ!!」

タツミはパイレーツスマツシユが投擲した碇の軌道を読み：目の前に来た瞬間に体を反らして回避し

つ 防御が薄くなったパイレーツスマツシユの胴体に向けドリルクラツシャーの刃を放

つ 数回の斬撃を受けたパイレーツスマツシユは握っていた碇を繋ぐ鎖を手から離しその場に膝をつき、

つ その隙を狙いタツミは更に強力な一斬をパイレーツスマツシユの胴体に放つたのだった

タ「今だっセントオオオ!!」

ビ「上出来っ後は俺に任せな!!」

“キンツキンツキンツ”

「風遁の術」

ビ「ふうっ…はあああああつ…」

「竜巻斬り！」

ビ「はあああああーっ」

“ ビュウオオオオオンツ ”

「又ウウツ…ウオオオオオーっ」

ビルドは4コマ忍法刀に風の力を纏わせ…小型の竜巻を刃から発生させ放った、竜巻はパイレーツスマッシュを体を包み込みつその巨体を空高く舞い上げた

“ キンツ ”

「分身の術」

“ BOOM! ”

ビ「勝利の法則は決まった！」

「Ready go！」

ビ「ふっ…はあああつ」

「ボルテックフィニッシュ！Yeah！」

ビ「「「「はあああああーっ！！」」」」

“ドオンドオンドオンドオンツ…ドガアアアーンツ”

「ヌウアアアアアーンツ！！」

ビルドは三度分身体を7体召喚しっドライブバーのレバーを回した直後、

分身体たちと共に空へジャンプしっ宙を舞うパイレーツスマッシュに向けて一斉にキックを放った

キックを受けたパイレーツスマッシュは空中で爆発しっ体から緑の炎を放出しながら地面に落ち、

同じくして地面に着地したビルドは召喚していた分身体を自身の元に戻しドライブバーに装填していたボトルを抜きとり変身を解除した

セ「ふううく…どうにか倒せたな」

タ「やったなセントツ！！」

セ「タツミの援護あつての勝利さ…まっ今後もその感覚を忘れずに精進しなさいな

♪

タ「なんで上からなんだよっ！！」

セ「さあてっスマツシユの成分を回収しますか」

タ「…無視はやめてくれ」

セ「ほいっと」

“ チャキンツ…シユウウウ…”

セ「よしっ実験完了!!」

タ「…ええっ…あいつは!!」

セリユ「オーガ隊長!」

セントはエンプティボトルを取り出し倒れたパイレーツスマツシユの方にボトルを向ける、

ボトルの蓋を開いたと同時にパイレーツスマツシユの体は粒子化し消滅したがそのスマツシユの元になっていた人物は…帝都警備隊の隊長にして

先ほどタツミがメインストリートで倒したオーガだったのである

何故オーガがスマツシユに…そう疑問に思うタツミを他所に

セリユはオーガに近づき両手で体を揺さぶりながら声をかける

セリユ「オーガ隊長ツオーガ隊長しっかりしてください!」

エ「無駄だ…そいつはもう死んでいる」

セリユ「えっ!？」

“ シュウウウウ… ”

エ「ふふふっ…ようセントツク久しぶりだなあ」

セ「エボルトツ!!」

突如としてその場に響いた謎の声…セリユが驚いている間に

オーガが倒れている近くに白い霧が現れっそこからエボルトが現れたのだった

タ「なんでお前がここにっ…まさかっオーガをスマツシュにしたのは!!」

エ「ご名答っ四肢切断され苦しんでいたところを俺がガスを注入してスマツシュにしたんだ」

タ「オーガは死にかけていたんだぞっそれを…無理矢理スマツシュにして俺たちを襲わせたっていいのかよ!!」

エ「その通りだっどうせ散りかけていた命だ…だから最後に俺の奴隷としてその命を有効に使ったって訳だ」

セ「っ…」

「エ」にしてもっ俺が力を与えてやったのにこの程度とはなあゝ…期待外れもいいところだ」

“ドオンツ” エボルトは既に息を引き取ったオーガの頭に足を乗せ、

悪態を言いながら足に力を入れオーガの顔を踏みつけた

それを見たセリユは“バアンツ” エボルトの足を払い飛ばし、腰の装備していたナイフを手に取りその刃をエボルトに向ける

セリユ「お前がっ…オーガ隊長を怪物にっ…」

エ「ふんっ…お前はコイツの裏の顔を知っているか？」

セリユ「裏の…顔？」

エ「コイツはなあ…とある人間と裏で通じっそいつが犯した罪を別の人間に擦り付け私腹を肥やしていたんだ。そして…無実の罪で死んでいった人間の家族が暗殺集団・ナイトレイドにオーガの殺しを依頼しっコイツは見てのとおり天誅を受けたという訳だ」

セリユ「そんなっ…オーガ隊長がそんなことをっ…」

エ「そんなことも見抜けなかつたのかあ？ふふふっ…とんだ能天気娘だな♪お前はこんな層の言うことを信じっ偽りの“正義”をかざして多くの人間の命を奪ってきたん

だ」

セリユ「っ…私はあつ…私はあつ」

エ「どうだあ？信じていた者に裏切られ…自分が信じていた」正義」が全て偽りだったという現実を突きつけられた今の気分は？」

セリユ「あああつ…あああつ…」

エ「ふははははーっ！！たまらないねえっやはり人間が絶望した顔を見るのは最っ高だあ♪」

セ「エボルトツ…お前って奴は！！」

セリユ「…ううっ…うわあああーっ！！」

エ「ふうんっ」

“ドオンツ”

セリユ「がふうっ…」

セ「セリユーツ！！」

逆上し我を忘れたセリユは策もないままエボルトに向けナイフを刃を振った、

だがそんな安易な攻撃が届くわけもなくっセリユの攻撃を難なく避けたエボルトは彼女の腹に拳を放った

その一撃を受けたセリユーはそのまま気を失い……エボルトはそんなセリユーを右腕で抱え上げる、

その光景を見たコロはまだ万全な状態になっていないにも関わらずエボルトに向かって走り出す

コ「キユキユウウツ!!」

エ「ふううんっ」

“ボオオオンツ”

コ「キユウツ!!」

セ「コロオオツ!!」

“バサツ”

セ「コロツ大丈夫か!？」

コ「キユウウ……」

残った力を振り絞りセリユーを助けるべくエボルトに突っ込むコロだったが、エボルトは左手から赤黒い衝撃波を飛ばしつ突っ込んできたコロを吹き飛ばしたそんなコロをセントは地面に落ちる間一髪のとこで抱きとめたが、

コロは受けた衝撃が強かったのか：セントの腕の中で意識を失ってしまった

タ「おっおい：こいつ大丈夫なのか!？」

セ「大丈夫つ：気を失っただけだ」

エ「犬ころの帝具如きが：俺に勝てると本気で思っていたのかあ？」

セ「エボルトオツ!!」

エ「おおつと：お前とやり合うのはまたの機会にしておくよ。取りあえずつ：この小娘は俺が貰っていく」

セ「セリユーをどうする気だ!？」

エ「それは後のお楽しみだ：」

“ シュウウウ：…… ”

エ「それじゃまたなセントツ：チャオオ♪」

そう言つてエボルトは再び周囲に白い霧を放出し：セリユーを抱きかかえたまま姿を消した、

残つたセントとタツミは何とも言えない感情を抱きつつつエボルトが先ほどまでいた場所を見つめていた

セ「ツ…」

タ「セント……」

“タタタタタタターツ”

タ「はあつ…まづいセントツガーディアンたちが来た！」

セ「くうつ…仕方ないっ離脱するぞタツミ！」

“キンツッキンツッキンツ”

「隠れ身の術」

セ「はああつ」

「ドロン！」

“ドオオンツ” セントはタツミを自身の方へと呼び寄せ4コマ忍法刀を地面に刺し煙幕を発生させた、

そして先ほどまで戦闘が行われていた場所には…息を引き取ったオーガ以外誰もいなくなつたのであつた

― 宮殿・人体実験室 ―

エ「Dr. スタイリツシユはいるか？」

ス「はああ〜いつ呼ばれて飛び出てなんとやらってね♪あらっその可憐な娘さんは新しいモルモットかしら？」

エ「まあそんなところだっ次のスマツシユの被検体にする…それまで牢屋にでもぶち込んでおけ」

ス「牢屋ねえ〜…下品なことをするのはスタイリツシユじゃない気もするけど」

エ「余計なことを考えるなっお前は俺の指示に従って動けばいいんだ」

ス「了〜解♪あそうだっ…さつき大臣様が来てねっナイトレイドに対抗すべく新設の特殊警察が結成されるそうよ」

エ「特殊警察？」

ス「隊長にはあの“氷の女帝”の異名を持つ“エスデス”将軍が就くそうよ。それに伴ってエスデス将軍は帝具使いの構成員を要求してね…私もそのメンバーに選ばれたって訳♪」

エ「なるほどなあ…」

ス「ち・な・み・に…貴方にもオブザーバーとしてイエーガーズに来てほしいこのこ

とよつその証拠に召集命令書もここにあるし」

エ「ほおおくこの俺をねえ……面白いつどんな人間共が集まり動くか……見てみるのも悪くはないな」

ス「それじゃあ受領書は私が出しておくわっ」

エ「ああ頼むつ……それじゃつ俺は疲れから少し休むことにする」

“ガチャツ……バタンツ”

エ「秘密警察イエーガーズか……また楽しくなりそうだな」

―帝都郊外―

“ボオオンツ”

タ「……んつ……あれっここって……」

セ「ふううう……上手くいったなっ」

タ「なっ何をしたんだ!?! どうやって帝都の町からここまで移動したんだ!?!」

セ「話すと長くなるからまた今度ね……それよりっ早くみんなが待つ合流地点に向かう

ぞ」

タ「おっおう!!」

無事帝都の町から離脱したセントとタツミはアカメたちがまつ合流地点へと向かう、しばらく歩き進めると…人気のない森の開けた場所にアカメ・レオーネ・ラバツクの3人がいた

ア「セントツタツミ!!」

ラ「お前から遅すぎだぞっ作戦時間大幅にオーバーしてんじやねえか!」

レ「こくりやボスからキツイお説教受けなきやいけないかもねえ♪」

セ「お前からあ…少しは俺たちの心配をしなさいよっ」

タ「そうだよっセントは警備隊の1人と交戦してて…その時にスマツシユも現れてもうしつちやかめつちやかだったんだから!!」

ラ「そんな言い訳…ナジェンダさんにもするつもりか?」

タ「ううっ…」

レ「まあでもっ全員無事に生き残れて何よりだね」

セ「約束しちまったからな…生きて帰るって」

ラ「…んっおいセントその犬っ…もしかして帝具の魔獣変化・ヘカトンケイルか!」

ラバックはセントが抱いているコロを見て驚きつレオーネもまさかと思いセントに近づくと、

セントはというと今だ気絶してるコロを起こさないようにラバックとレオーネに確認させた

レ「おおおほんとだつまさかあの獰猛な生物帝具を回収できたなんて…お手柄じゃんセント！」

セ「回収したというか保護したというか…」

ラ「保護？」

セ「こいつは俺が戦った帝都警備隊のセリユウって子の大切な家族なんだ。だからこいつは革命軍に渡すことはできない」

レ「おおでたつセントのお人好し!!」

セ「そこらへんの話はアジトに戻ってボスに直接話すよ…何はともあれみんなお疲れさま♪」

ラ「いや急に軽くなんなよっ」

ア「……………」

セ「んっ…アカメどうしたの？」

先ほどこから何も喋らないアカメを不思議に思ったセントはアカメに声をかける、するとアカメは何を思ったかセントの方に近づきつ何も言わずにセントの服を脱がそうとした

セ「ていつ」

“コツンツ”

ア「あうっ…何故頭を叩くセント？」

セ「いやいきなり服脱がそうしたら誰だっけこうするだろっ」

ア「……」

セ「なんで服を脱がそうとしたのさアカメ？」

ア「……今まで強がって傷を報告せずに毒で死んでいった者を知っている。だからそれを確かめようとしたんだ」

セ「ああ……そういうことね」

ア「けどっ…その様子なら大丈夫そうだな」

セ「アカメと約束した以上必ず生きて帰らなきゃいけないからね…俺はその約束を

守っただけだよ」

ア「そうか……あそっだっ言い忘れていた」

セ「？」

ア「お帰り……セント／＼／＼」

セ「……ただいまっアカメ」

タ「（この2人……いい加減付き合っちゃえばいいのに）」

レ「（親友にも春が来たんだねえ……私は嬉しいよ♪）」

ラ「（くわあぁ~~~~っ……なんでセントやタツミばかり!）」

こうして……セントの初任務は全員無傷で生還し終了した、

余談だがアジトに戻ったセントはナジエンタから初陣でまずまずの成果を残したことを称えられるも、

作戦時間のオーバーと自分の正体をバラすような行動をしたことに対し2時間に及ぶ説教を受けたのだった

“ to be continued ”

【次回予告】

エス「特殊警察イエーガーズの隊長を任せられたエスデスだ」

ソ「同じ組織の一員同士：仲良くしていこうぜ？」

“動き出す特殊警察イエーガーズ”

セ「新しいベストマツチの武器が完成したぞ!!」

チエ「セントくんって記憶を失う前は何してんだろう？」

“ベールに包まれたセントの過去”

タ「それが：お前が知りたくない事実だったとしてもか？」

セ「俺が恐れるのは：何も知らない自分だ」

《第8話・帝国のリベリオン》

第8話・帝国のリベリオン

《前回のあらすじ》

セ「今回こそちやんと俺があらすじ紹介するからな!! 仮面ライダービルドでありつ天才物理学者であるセントは暗殺集団・ナイトレイドと共に帝国に愛と平和をもたらす為の戦いへと身を投じていた。そんな中つ初の任務が言い渡され帝都に向かったセントは帝都警備隊の1人セリユー・ユビキタスと戦いこれに勝利した!」

タ「けどあの正義バカなセリユーをよく改心させられたよな…」

セ「セリユーもセリユーで苦労してたんだよっその心を理解し優しく受け止めてあげるのも正義のヒーローの勤めってやつさ」

ア「……………」

セ「アカメさん目が怖いので睨むの止めてください!!」

タ「けどあの日は俺も大活躍だったよな!! あの後ドオーンツとあらわれたスマツシユの攻撃をシユウンとかわしてズバンズバンと斬りまくって!」

セ「擬音ばっかで何言ってるか伝わんねえよ…けどそのスマツシユにされていたのはタツミが倒したオーガでっそのオーガをスマツシユにしたエボルトは何を思ったかセ

リユーを連れ去り消えてしまった」

ア「セント…セリユーとは本当に何も無いんだな？」

セ「だから怖いって！このままだとアカメが斬りかかりそうなので第8話行っちゃってください！！」

タ「強引な進み方だなあ〜」

― ナイトレイドアジト・セントの実験室 ―

セ「……………」

チエ「(集中して作業してるセントくんって…なんかカッコいいね)」

ア「(今日は何を作っているんだ?)」

タ「(この間採取したスマツシユの成分からできたボトルのおかげで新しいベストマッチを見つけたらしくて…そのベストマッチ専用の武器を作ってるんだって)」

チエ「(行動が早いというか…ギアがかかるとそれにしか目がいなくなっちゃうんだね)」

ア「それもセントの良さだっ」

タ「けどそのために徹夜続きになるのだけは止めてほしい」

セ「よおしっ新しいベストマッチの武器が完成したぞ!!」

タ「おっ出来たのか……て何それっ弓か?」

セ「名付けて”カイゾクハッシャー”だ!! 攻撃は…各駅電車!!」

〃 シュウンッ〃

チエ「うわあっ!!」

セ「急行電車!!」

〃 シュウンッ〃

タ「おわあっ!!」

セ「快速電車!!」

〃 シュウンッ〃

ア「……避けた」

セ「そして海賊電車の4・段・階!! 凄いでしょ…最高でしょ…天っ才でしょ!?!」

タ・チエ「……………」

ア「ああっセントは天才だと私は思うぞ」

セ「でしょっああ…自分の才能に惚れ惚れしてしまうよお♪」

タ「(何回も聞いてるけど…まだ慣れねえな)」

セ「ああ〜早くこいつの力を存分に試したいっ…けど普通の模擬戦じゃ威力強すぎて使えないんだよなあ〜…どうすればいいかあ…」

“ドオーンッ”

ラ「セントツ帝都にいる諜報班から一報が入った! どうやら町でスマツシユが現れて暴れてるらしい!」

セ「ナイスタイミングツ新しいベストマッチとカイゾクハツシャーを試すチャンスだ!! スマツシユがいる場所を教えてくださいっマシンビルダーを使ってすぐに向かう!!」

ラ「おっおう…」

チェ「ちよつセントくん無闇に町中に出たら危険だよつボスにもこの前言われたばっかでしょ。 ” 正体がバレるような軽率な行動はするな ” って!」

セ「言われたよ…けどスマツシユが現れた以上それに対抗できる力を持っている俺がスマツシユを倒さなきゃ帝都に住む人々に危険が及ぶ。 ナイトレイドは罪なき人々を救済する組織でもあるんだろっなら問題ないじゃないか」

チェ「それはそうだけど…安易に行動を起こして帝国側に警戒されたら今後の任務にだつて支障が出るかもしれないじゃない!!」

ラ「まあそりゃそうだな…セントツナジエンダさんに代わって俺が言わさしてもらっ

ぞ。ナイトレイドが目指す革命と人助けのビルドッお前にとって“いま”大切なのはどっちなんだ!?”

セ「……決まってるだろっビルドだよ♪」

“ズコオツ”

ラ「即答かよおっつ」

チエ「なんの迷いもなかったね……」

セ「んじやちよつくら行ってくるねっ留守番よろしくうっ♪」

セントはビルドドライバーとビルドフォンを持ち研究室を出ていき、

残ったアカメたちは出掛けていったセントに手を振り見送ったのだった

タ「相変わらず自分のことより他人優先か……」

ア「セントらしい判断だな。これから作る国にはより多くの人々の力と想いが必要になつてくる、そのためにもいま帝都に住む人々を救い明日へ向かう希望を与える……良いことじゃないか」

ラ「アカメちゃん……いつからセントにそんな絶大な信頼を持ったのさ」

ア「仲間のことを信頼するのは当たり前のことだろ？」

ラ「(なんつという真っ直ぐでキラキラした瞳!!ここまでアカメちゃんから信頼されてるなんて……羨ましいぞセントオオオ!!)」

チェ「にしても……タツミも言ったけどセントくんって本当に自分のことそっちのだけよね」

タ「もしかしたらセントって神様が”正義”を实体化させてこの世界に産み落とした存在……だったりしてな」

ア「タツミツそんな非現実的な理由でセントの存在の意味をかたずけてしまうのはよくない」

タ「冗談だよ冗談っ俺だってそんなこと思っちゃ」

ア「何より神様は赤子をコウノトリに運ばせて現世に持つてくるっその工程を忘れてはいけない」

タ「いやそこかよっ!!」

ラ「純粹無垢すぎるだろアカメちゃん!」

ア「??」

チェ「けど気になっちゃうよね……セントくんって記憶を失う前は何してんだろう?」

そんな中…突如として周囲に白い文字をした様々な数式が現れ、

スマツシユと少女たちは何事かと困惑しその数式を見渡した

すると“シャカシャカシャカツ” マリンブルーと黄緑のボトルを持ったセントが現れ、

数式に困惑していたスマツシユと対峙しいつもの決め台詞を発した

セ「さあ…実験を始めようかつ」

「海賊／電車・ベストマッチ！」

「Are you ready?」

セ「変身ツ!!」

「定刻の反逆者！海賊レッツシャー！Yeah!」

ビ「んっ…なんかいつもより声が大きかったようなあ」

※海賊レッツシャーの登場を祝していつもより豪華にしてみました♪

ビ「ん…まあいいか♪さあてっ新しいベストマッチと新武器・カイゾクハツシャーの力を試さしてもらうぜ！」

新たなベストマッチの姿“海賊レッツシャー” フォームとなったビルドは

新武器カイゾクハツシャーを出現させ弓の構えで持ち、襲われている少女たちを助けるべくスマツシユに攻撃を仕掛けた

ビ「いくぜっ」

「シャアアアーツ」

〃 ギイインツ〃

ビ「ふんつはあああつ」

〃 ギイインギイインツ〃

「ヌウツブウアアアーツ」

〃 ブオオオオーインツバアンツ〃

ビ「うおっこれは…風か!？」

「フウンツヌウワアアツ」

〃 ブオオンブオオンツ〃

ビ「ふつよおとと…なるほどっ両手の爪で気流を操りそれを風の刃にして放つことができるのか!」

「シャアアア…」

ビ「中々芸達者な奴だが…海賊レッシャーになった俺には通用しないぜ!」

え、
フライングスマツシユの風を使った攻撃を防いだビルドはカイゾクハツシヤーを構

海賊船型攻撃ユニット”ビルドオーシャン号”を引きエネルギーをチャージする

ビ「喰らいなっ」

「各駅電車！出発！」

”バアアンツ”

「ギイヤアアツ」

ビ「まだまだっ」

「急行電車！出発！」

”バアアンバアアンツ”

「グアアアアツ」

ビ「そおくらそらつとんどんどんいくよ！」

”ギインツ”

ビ「ふうつはあっ」

”ギインギインツ”

ビ「ほおつよおつそらあああつ」

“ギインギインツギイイインツ”

「キイヤアアアーツ」

カイゾクハツシヤーから連続して放たれたエネルギー弾を受けたスマツシユは怯み、その隙を見てビルドはカイゾクハツシヤーの弓部分の刃を使い斬撃攻撃を放った

エネルギー弾と斬撃の同時攻撃を受けたフライングスマツシユは分が悪いと感じたのか…

両腕の翼を使い“ブオオオンツ”空へと飛びビルドから逃げるように高度を上げて飛んでいこうとした

ビ「ふっ…逃がさねえよ♪」

“フウウウウ……”

ビ「勝利の法則は決まった！」

「各駅電車…急行電車…快速電車…海賊電車！出発！」

“バアアアアーンツ”

「ツ!？」

“チャキンツ”ビルドは左手でエンプティボトルの蓋を開けスマッシュに向けて、すると倒れているライティングスマッシュの体は粒子と化しボトルに吸収されていた

ビ「ほいつと…実験完了♪」

? 「ん〜つ…あれつ…ここつて…」

? 「フアルちゃんつ」

フア「あつ…ルナにエアツ」

エ「大丈夫つどこか変なことかない!？」

フア「うつうん…ねえ2人とも…私つ今まで何してたの?」

ル「フアルちゃん…怪物になって暴れまわってたんですよつ覚えてないんですか?」

フア「私が怪物に!?!それ本当なの!?!」

エ「うん…けどこの変な仮面と鎧を着たお兄さんが怪物を倒してつフアルちゃんを助けてくれたんだよ!」

ビ「(変な仮面つて…イケてる顔だと思っただけだなあ〜) フェイス」

フア「えつええつと…助けてくれてありがとう」

エ「フアルちゃんを助けてくれてありがとうお兄さんつ」

ル「ありがとうございますっ」

ビ「うえっ…あつああくお礼は大丈夫だよ。人として当たり前のことをしたただけだから」

フア「あれっそこは”それじゃ謝礼としてお前たちの体をいただくか♪”じゃないの？」

ビ「言うかそんなこと!!つか女の子がそんな汚い言葉を言うもんじゃありません!!」
フア「ごつごめんなさい」

ル「許してあげてくださいいっファルちゃんいつもこうなので…」

ビ「どこでどう過ごしたらそうなんだよ…てっそんな話してる場合じゃないか!!」

ル・エ・フア「「??」」

ビ「今の騒ぎで警備隊がすぐ来るはずだっすぐにここから離れよう」

ル「けっけど私たちこの町に来たばかりで…住む家も宿に泊まるお金もないんですよ」

ビ「大丈夫っこの近くに革命軍の隠れ家があるんだ。仲間もそこにいるはずだから君たちのことを保護してもらおう」

エ「かつ革命軍って…お兄さんは何者なんですか？」

ビ「俺?俺は…」

“ シュウンツ ”

ビ 「ツ…ふうんっ」

“ ギイインツ ”

ル・エ・ファ 「「えっ!?」「」

ビ 「…お前は!!」

ソ 「ほおお…今の攻撃を防いだかつやるようになったじゃねえか」

ビ 「エボルトツ!!」

ソ 「ほおっ」

“ ギイインツ ”

ビ 「ツ…なんでお前がここに!？」

ソ 「お前がどれくらい強くなったか観に来たんだよ」

何かを気配を感じ取ったビルドはカイゾクハツシャ―を背後に回し不意にきた攻撃を防いだ、

そしてそこには“ スチームブレード ”でビルドに斬りかかったソウイチの姿をしたエボルトがいた

ソ「ハザードレベル” 3. 7つてどこか…良い感じだっ順調にビルドを使いこなしているな”

ビ「ハザードレベル？何のことを言ってるんだ!？」

ソ「その質問の答えは…こいつが答えてくれるよ!」

“カチャツ…シユツ”

ビ「っ…これは…データメモリ?」

ビルドの問いに答えるようににエボルトは上着のポケットから1つのUSBメモリを取り出し、

得意げの顔をしながらそのUSBメモリをビルドに向け投げ渡した

ソ「その中にはビルドに関するデータが入っている…今後のお前の研究に役立つはずだ”

ビ「ビルドに関するデータ…なんでお前がそんな物を持つてるんだ!？」

ソ「さあ…なんでだろうなあ?」

ビ「とぼけるなっお前は一体ビルドのことをどこまで知ってるんだ!?!俺の過去のことも知ってるんだろっ答えろエボルト!!」

ソ「ふふっ…その答えはお前自身が自力でたどり着かなきゃならないことだっだから…俺の口からその答えを言うことは出来ない」

ビ「…ッ」

ソ「んじやつ用事は済んだから俺はここら辺で失礼するよ…」

ビ「待ってつまだ話は!!」

ソ「あそうだつもう1つ伝えることがあった!」

ビ「っ!」

ソ「今日つ帝国はナイトレイドに対抗するための特殊警察組織を結成する。構成員は全員が帝具使いつそしてその隊長には帝国最強と謳われる女将軍・エスデスが就くそう
だ」

ビ「特殊警察…だと!」

ソ「ちなみに俺も傍観者オブザーバーとして組織に加入する…この先の戦いはつこれまで以上に激しくなると思うから覚悟しておけよお」

“ シユウウウ… ”

ソ「んじやまたなセントツ…チャオオ♪」

エボルトはビルドに特殊警察組織が結成することを伝え終わると周囲に白い蒸気を

ラ「ラン」です…以後お見知りおきを」

ス「科学部隊より来ましたDr. スタイリツシュよつヨロシクね♪」

ク「……クロメ」です」

エス「私はこの特殊警察“イエーガーズ”の隊長を任せられたエスデスだつまあ名乗らなくとも知っている者がほとんどだと思うがな」

ウ「イエーガーズ…それがこの組織の名前ですか？」

エス「そうだ！独自の機動性を持ちつ凶悪な賊の群れを容赦なく狩る狩人…それがイエーガーズの名の由来だっこれ以上の相応しい名はないだろう？」

ウ「そっそうですね…」

ス「魅力的でスタイリツシユな名だと思っわよ♪」

エス「気に入ってもらえて何よりだ…それよりクロメ」

ク「？（バリバリツポリポリ）」

エス「気楽にしたいとは言ったが私が喋っているときに菓子を食べるのは止める」
ク「……これ私だからあげないよ」

エス「いらんっ」

ボ「あつ皆さん喉渇いてますよね!?いまお茶を入れるので待っていてください！」
ラ「手伝いますよボルスさん」

ボ「ありがとうランくんっ」

エス「はああ〜……自由気ままな奴らだな」

帝都の宮殿の一室にて：対ナイトレイドを目的としつ帝国最強と謳われるエスデスが隊長を務める

特殊警察組織・イエーガーズに所属する帝具使い5人が集結していた

帝国海軍から来たウエイブ・暗殺部隊に属していたクロメ・焼却部隊出身のボルス、科学部隊より派遣されたDr. スタイリッシュ・そしてランという個性豊かなメンバーたちは

自己紹介をし終わるとクロメの発言をかわきりにリラックスモードへと入っていた

ボ「どうぞエスデス隊長」

エス「ああ……いただこう」

ウ「……んっ……あのおくエスデス隊長つよろしければ1つ質問してもよろしいでしょうか？」

エス「なんだっ遠慮せず言ってみろ」

ウ「はいっええつと大したことではないと思うんですが……事前に聞かされてた話だと

イエーガーズのメンバーは隊長含めて8人だときかされたんですがあ…残りの2人はどこにいますでしょうか？」

エス「そのことか…本来ならここに帝具使いを6人招集するように頼んだのだが、どうやら残りの1人は見つからなかったようだ」

ラ「帝具使いでなおかつ配属場所を変えられるとなると人材は限られてきますからね」

エス「もう1人はただの傍観者だ…何せ帝具使いに特化した組織は前例がないので、達観できる人材も必要だと思いついでに頼んだまでだ」

ス「多分もうそろそろ来ると思うわよ♪」

ウ「はっはああ…」

“ガチャツギギギ…”

ソ「…あれっもうみんな集まっちゃってる感じか？」

イエーガーズの面々がある程度打ち解けていたその時…待機部屋と廊下を繋げる扉が開き、

そこからいつもの軽い感じの雰囲気醸し出したソウイチことエポルトが入ってきた

ス「遅かったじゃないのっ招集されるのは今日だってあれほど私が釘を刺して言ったのに！」

ソ「悪い悪いっ色々と用事ができちまってよお…来るのが遅くなっちゃった」

エス「ほおお…私が出した招集よりも重要な用事か…結成初日から中々舐めたマネをしてくれるじゃないか」

ソ「おっアンタが噂のエスデスかあ…思ってたより歳いつてるな」

ウ「(こっこのおっさん隊長に向かつてなんてことを!!)」

エス「…皆っ残念なお知らせだ。現時刻をもつて傍観者はK I A^{戦死}となる!!」

遅刻した上に無礼な発言をしたエボルトに堪忍袋の緒が切れたようで…

エスデスは自慢の長い右足を大きく振り上げ「ブウウンッ」エボルトに向け蹴りを放った

それも冗談交じりの軽く小突くような感じではなく、

直撃すれば怪我では済まされない程の殺意が込められた強力な蹴りであった

その場にいた他のイエーガーズのメンバー(D r. スタイリツシユは除く)はエボルトは死ぬと…

誰もがそう思ったが“バシッ” エボルトはエスデスの蹴りを難なく左手で受け止めた

エス「ツ!!」

ソ「へええ〜…さすがは帝国最強と謳われるだけのことはあるなっ」

ウ「(エツ…エスデス隊長の蹴りをつ…左手だけで止めやがったあ!)」

ク「……おじさん…やるね(バリバリバリッ)」

ウ「てっこの状況でもお菓子食うのは止めないのかよ!」

ク「??？」

エス「……お前っ達者なのは口だけではないようだな」

ソ「まあな♪あつまだ自己紹介してなかったな、俺の名前はソウイチだっよろしくな

エスデス隊長♪」

エス「………」

ソ「そう熱くなりなさんさっこれから一緒に戦っていく仕事仲間じゃないか、同じ組織の一員同士…仲良くしていこうぜ?」

“スウツ”

エス「……ふんっ精々私に殺されぬよう気をつけることだ」

ナ「ううっ……」

ラ「正論過ぎてナジエンダさんが言い返せないっ」

チエ「口が達者だよねセントくんって」

タ「言いくるめる能力は確かに高いな」

セ「そう褒めてくれるなよっ照れるじゃないか♪」

タ「いや褒めてはないんですけどっ」

ナ「ううんっ……話を戻そう！セントツッお前が保護してくれた3人の少女についてだ
が」

セ「あそうだったあの子たちどうするって!?!」

ナ「本人たちの希望で革命軍に入ることとなった……とはいっても本部での炊事家事の
仕事だっ子どもを危険な任務に就かせるわけにはいかないからな」

セ「そっかあ……良かったあ〜」

ア「セント……3人の少女とはどういうことだ?」

セ「へえっ……どっとういうことって……何が?」

ア「質問をしているのは私だ……正直に答えてくれっその少女たちとは何もないんだな
?」

セ「なっ何もないよ!つかさつき知り合っただばかりなんだから何かが起こるわけない

だろ!!」

ア「そうか…ならいいんだ」

セ「(今の顔…すげえ殺気が感じられたんだけど)」

マ「それでっ他に何か収穫はあったの？」

セ「ツ……エボルトに会った」

タ「えっ!？」

“エボルトに会った”その言葉を聞いたタツミとアカメの顔は険しい表情となる、

一方のセントはそんな2人を他所に先程の戦いでエボルトから渡されたUSBメモリを懐から取り出す

シエ「それは？」

セ「データメモリ…これをPCに差し込むとこの中に入ってる膨大な数の“データ”を見ることが出来るんだ」

ス「データ？」

ブ「そのデータってのはなんだ？」

セ「簡単に言えば紙に書いてある資料があるでしょ？データって言うのはその資料を

数値の集まりにして圧縮させたモノのことで…データメモリはそのデータをコンピュータに接続して情報を記録・保存することが出来る補助記憶装置のことなんだ」

ナイトレイド一同「??」

セ「つて言われてもわかんないよねえ…百聞は一見に如かずつ俺の実験室にあるPCでどう使うか見せてあげるよ!!」

ーセントの実験室ー

セ「んじやつ早速こいつの中に入ってるデータを開くよ」

タ「なつなあセント…もう少し慎重にいった方がいいんじゃないか?これを渡してきたのはエボルトなんだろう罠の可能性だってあるじゃないか」

セ「かもな…けどここで止まったら俺はきつと後悔すると思う。ビルドのことも…俺自身のことも…得られるものがあるなら例え罠であっても俺は知りたいんだ」

タ「それが…お前が知りたくない事実だったとしてもか?」

セ「俺が恐れるのは…何も知らない自分だ」

“カチャツ” そう言いセントは右手に持ったUSBメモリをPCに差し込む、

すると膨大な量のデータがセントのPCの中に流れ込んでいきつしばらくすると画面に1つの文字列が現れた

マ「何か文字が出てきたわね」

レ「何々つなんて書いてあるの!?!」

セ「……」 PッRロOシJエEクCトT BビUルIドLドD「？」

“ t o b e c o n t i n u e d ”

【次回予告】

? 『ここにはビルドに関するあらゆる情報が記録されている』

チェ「この人：なんかセントくんに似てない?」

“ 明かされるビルドの真実と謎の青年 ”

エ「お前をお披露目する日がようやく来たなあ」

“ エボルトが放つ刺客とは!?! ”

シエ「次の任務が終わったら：皆でまたパーティがしたいですね」

セ「そのためにも：皆で生き残らなきゃだな」

エ「紹介しようっ俺の忠実なる僕を!!」

セ「もう1人のっ：仮面ライダーッ：」

《第9話・強襲のドラゴン》